みらいへ

おうみ未来塾１期生

目　　次

1　おうみ未来塾への僕の想い …… 1

2　地域プロデューサーの誕生 …… 2

3　塾生募集チラシ、新聞記事 …… 3

4　第１期塾生応募の動機など …… 4

5　メモｍａｉｌ …… 11

6　青年会館のオリエンテーションでは …… 13

7　グループ研究目標発表会 …… 14

8　県外研修報告 …… 15

9　グループ研究中間発表会 …… 18

10　プレゼンテーション技法 …… 19

11　グループ研究報告会・旅立ちの会 …… 21

12　新たな一歩 …… 23

13　おうみ未来塾１期生に関わって …… 27

14　グループ研究まとめ

　○　びわこのあまち …… 30

　○　ブレイクスルー夢デザイン …… 48

　○　心のバリアフリー …… 82

　○　セブン・ドロップス …… 100

15　活動経過 …… 126

みらいへ

有澤　一洋

井口　博之

石垣　公由

石田　和子

市田椰良生

岩崎　弘一

遠藤　恵子

岡　佑里子

岡崎　一郎

小澤　聰彦

金澤　惠美

川瀬美智子

来見久美子

澤　　孝彦

高木　有子

辻川　作男

堤　　良彦

苗村まち子

西村菜穂子

原田　亀雄

久田　君江

広実　照美

松井　賢一

森　富裕子

吉田　正樹

おうみ未来塾第１期生

おうみ未来塾への僕の想い

「人が育つ塾であること。そして、楽しく運営して欲しい」。この条件で、おうみ未来塾の塾長を引き受けました。未来塾が掲げる地域プロデューサーは、マニュアルがあるわけではありません。塾生の皆さんが勉強していただいて、その経験を通じて体得していくものです。

皆さんは、この２年間、いろいろな思いを持たれたことでしょう。最初の半年間は、塾生同士のコミュニケーションがとりにくかったが、県内宿泊研修やワークショップを通じて、お互いの思いが通じ合えてきて、グループ分けがうまくいかなかったときも塾生自らが合宿を企画して、解決に当たったということを聞いています。塾生間の温度差や運営についての事務局への不満などもあったことでしょう。皆さんは第１期生ですから、可塑性のあるカリキュラム、塾生主体の塾運営という点で、マニュアルも何もないところから創っていくという相当な苦労があったと思います。その苦労をされた２年間は、これまで以上にネットワークが広がったのではないでしょうか。それぞれ活動分野も、年代も、住む地域も違う塾生が集い、貴重な経験をしていただいたことと思います。

２１世紀に入り、これからますます地域のことを考え、地域課題に取り組む人が求められる時代になってきています。地域の課題を発見し、解決のための方策を考え、そのための事業や運動を興すことのできる人～地域プロデューサー～が求められているわけです。まず自分で考え、個人として動くだけでなく、地域のいろんな人を結びつけ、地域のビジョンを描き、みんなで一緒に汗をかきながら、住む人や訪れる人にとってホッとする地域を創り上げる。こんな理想の新世紀でありたいと思います。

塾はあくまでも練習の場であり、相互学習の場です。皆さんそれぞれ受け止め方は違うと思いますが、塾での経験や貴重なネットワークを活かして、これからの新たなエネルギーにしていただきたいと思います。せっかく、淡海ネットワークセンターが主催する「おうみ未来塾」という場で知り合えたのですから、これからもセンターとの関係を保ちながら地域で頑張ってほしいものです。そして、皆様の中から新たなグループが１つでも２つでもでき、このおうみの地で継続的に楽しみながら地域を変えていくそんな活動が生まれることを期待しています。おうみの未来を創ろうと思う人々が、このおうみの地でどんなすばらしいものを創っていくか、それは皆さんにかかっています。

最後に、未来塾を巣立った後もこの「第１期おうみ未来塾」が皆さんの心に残るホッとするステーションとなることを願いますとともに、今後の皆さんのご活躍をお祈りします。

おうみ未来塾塾長　日高敏隆

地域プロデューサーの誕生

滋賀県内の市民活動やボランティア活動を支援するために、淡海ネットワークセンターが設立されたとき、その活動の一つの柱が人づくりでした。そして、人づくりに際しては、教育システムを与えるというより自主性と多様性とを重んじること、ネットワーキングと相互学習に留意することが大切であるという議論を行い、「おうみ未来塾」という学校を発足させることにしたのです。

学校運営の基本は、あらかじめ決められたカリキュラムを与えるというより、塾生に参加してもらいながら造り上げることにいたしました。市民活動の経験をもつ塾生の皆さんが、グループ研究を仕上げるという目標を共有しながら、塾運営委員会と事務局と連携しつつ、必要に応じてカリキュラムを自らで造り上げることができるようにと考えたのす。すなわち、「可塑性のあるカリキュラムと塾生の参加による学校づくり」です。

この塾が目標とするものは、地域プロデューサーの養成です。地域プロデューサーとは、地域の問題を発見し、解決のための方策を考え、そのための運動や事業を起こすことができる人であると、私たちは定義することにしました。地域プロデューサーという用語をあえて用いたのは、問題発見能力と、政策化能力と同時に、実践能力や事業を起こす能力が、これからの市民活動には重要だと考えたからです。地域社会で必要とされているが、提供されていない機能を、自らつくりだす＝起業する意思と能力を持った人物こそが、これからの市民活動を担うことになるからです。したがって、グループ研究でもこうした側面を重視することにいたしました。

第1期生応募者７５名の中から、２６名の塾生を選考するにあたって運営委員会が留意した基準は、塾への参加と学習の意思と地域プロデューサーたる資質とを基本に、職業・性別・年齢・地域等のバランスを考えたものです。

最初は戸惑いつつも、学習を経ながら塾生相互の認識が深まって行きました。夏の暑い盛りに、滋賀大学を利用して行ったインターネット講座と講義が思い出されます。1年目秋の甲良町と朽木村のまちづくりを学ぶ1泊現地研修は、1期生全体の学習のポテンシャルを急速に高める契機となったようです。グループ研究に入ってからは、それぞれのグループの個性を生かしつつ、現地調査や聞き取り調査を実施し、課題の共有と論点を深める作業を行いました。それらをふまえて、事業の創造と新たな問題提起にまで進んでいる研究もあります。また、脚本や狂言等、多様な表現方法をとっていることも特徴的であります。

ここに、地域プロデューサー養成塾の最初の修了生が生まれることになります。

修了生の皆さんが、自らの地域で地域プロデューサーとして活躍されると同時に、地域プロデューサーのネットワークが形成されることを願うものです。

おうみ未来塾運営委員会委員長・滋賀大学教授　北村裕明

★「おうみ未来塾」が掲載された新聞

京都新聞 1999.3.2

活動リーダー育成へ
6月からおうみ塾開講
淡海ネットワークセンター

朝日新聞 1999.3.3

市民活動の人材育成
「おうみ未来塾」一期生募る

★塾生募集
パンフレット

毎日新聞 1999.3.10

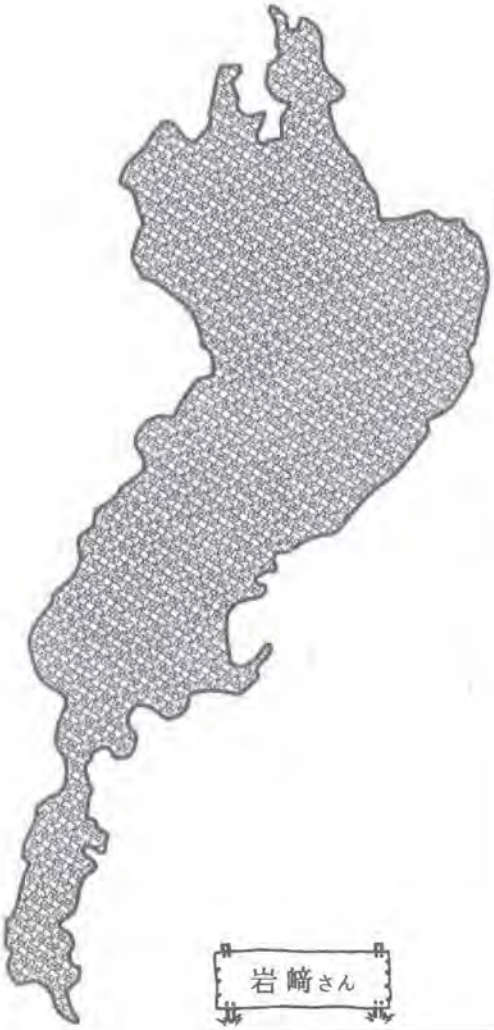
「おうみ未来塾」6月開設
第1期生を募集中

地域プロデューサーを育成
淡海ネットワークセンター

中日新聞 1999.3.11

おうみ未来塾 塾生募集
淡海ネットワークセンター 地域の課題研究

1期生応募の動機



びわ町

山東町

長浜市

松井さん

私は、国際交流ボランティア"タッチ"と言う7人の小さな団体で「小回りの効く国際交流」を目標に活動してきました。反面、大きな県域国際交流イベントの実行委員として企画・運営にも参画し"タッチ"の活動PRや資金確保を行ってきました。

この経験を活かして「地域プロデューサー」として効果的な「地域イベント」の持ち方について未来塾で学びたい。

松井　賢一　　東浅井郡びわ町

有澤さん

有澤一洋、坂田郡山東町在住

応募の動機：退職後の人生をどう過ごせばよいのだろう。そんな漠然とした不安の中でサラリーマン生活の終りに近ずいて来ました塾生募集の新聞記事で私は何かに塾生になって勉強すれば将来への指針といったものが得られるという気持になりました。特に高令化社会の中健康で生きがいのある生活を目指すリーダーになれればと思いました。

岩﨑さん

私は願う。かつての自分がそうであったように、環境問題に関心のない人への意識の向上を求めたい。己が知識を吸収し血肉化する。樹木の成長するがごとく、多くの枝に出来た果実を人とわかち合いたい。そのために最善の手法、論理を「おうみ未来塾」に学びたい。

長浜市公園町 8-8
岩﨑 弘一

氏名　辻　川　作　男　居住市町村　長浜市

応募の動機

頑張っても何となく不安で心が傷つき、人を押しのけ生きる事が求められる競争社会ではなく、自立した個人が相互に認めあい、尊重され、助け合う、真に豊かな暮しが送れる生活者本位の社会の実現が行き詰まりを見せる日本に求められていると思います。そこで地縁・職縁をこえ「志縁」で結ばれた市民社会の実現にむけ、汗を流すにはどうすればいいかを学ぶために応募しました。

辻川さん

彦根市

多賀町

秦荘町

愛東町

高木さん

高齢者と子供たちの交流の場所、心のふれあいの場所をどのようにしたら取り戻せるか、また新しい仕組みをこの塾で学びたいとおもった。
自分のまちをまず知りこと、県内のステキな取り組みをしているまちを知り自分の住んでいるまちにアレンジして、住んでいて良かったと言えるまちを創りたいと思い、未来塾の活動を始めたい。
小さな取り組みから、「自分たちの住んでいるまちがステキなまち」と言える仲間を増やして、まちを再構築したい

彦根市
高木有子

原田さん

犬上郡多賀町敏満寺222
原田亀雄

かつて近江に猿楽座が六座あった。こんな史実に基づき『他の五座の地域の人たちに呼びかけ、その復興を図り、年に一度は「びわこホール」で演じたい、今の世に新しい近江猿楽を根づかせ、滋賀の新しい文化を創造したい』こんな夢の実現の第一歩としてアクションを興そうとしておうみ未来塾に参加しました。仕事の都合で思うとおりに行動できず、残念ながら次の機会に持ち越すことになりました。

小沢さん

東京・日本橋横山町生まれ。10才のとき南東から関西に移り住み、五年間に渡来した韓代人仮智奉次の里上殿城古墳寺の三日米地に住む。
現存する10基の古墳公園の環境面整備を望み、そこに働きかけ、その有効利用と計画・工夫をする中に地域づくり（村おこし）の起点になればと雷鳴中。人間たちより仲間と対立から協調へと移行中。

百塚
須恵
たぬき塚
こうもり塚
10基塚

愛知郡愛東町上蛇地 ≪小沢 藤≫

苗村さん

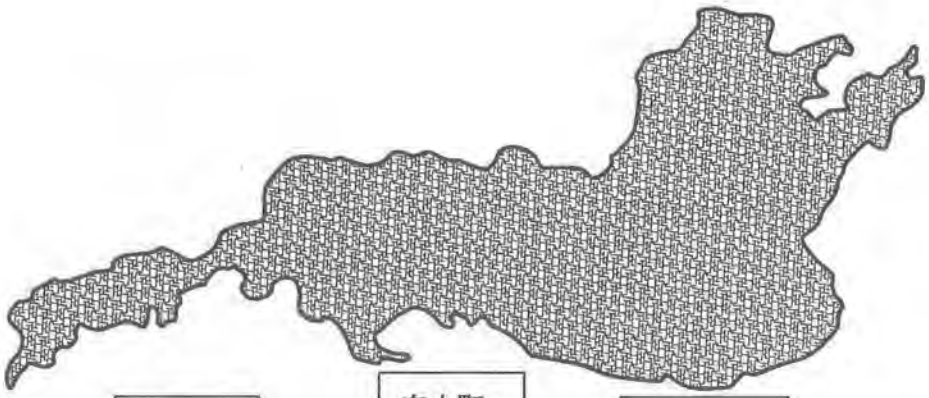
苗村まち子：愛知郡愛東町

① 活動の拠点・集う場所が欲しい!! ＝ ボランティアの自立

② 市街地のめだつ空店舗 ＝ 外国人が歩く町屋通りの活性

③ 地域に根ざした国際交流 ＝ イベント交流ではなく隣近所の異文化理解

（ひこね国際交流会UOECEの会員。会の設立より10年が過ぎ、上記のうつの事をいかに結びつけられるか？との思いで応募しました。）



水口町

安土町

五個荘町

西村さん

西村　菜穂子
（水口町）

「持続可能なアマチュアの芸術活動」「地域に根差した芸術活動」に取り組むために、いろいろな人と仲間になり、そこから、あらゆることを学んでいきたい。そして、今後の活動に生かしていきたい。地道にこつこつと活動していくためにも、多くのことを学びたい。

市田さん

伝統のある風土や町を受け継ぎながら
子供たちが生まれた所
育った所 住んでいる所が大好き
と思えるためには……
どのようにして伝えていくか
いろんな人達とネットワークを
取りながら 地域に参加していきたい

五個荘町　市田　椰良生

能登川町

井口さん

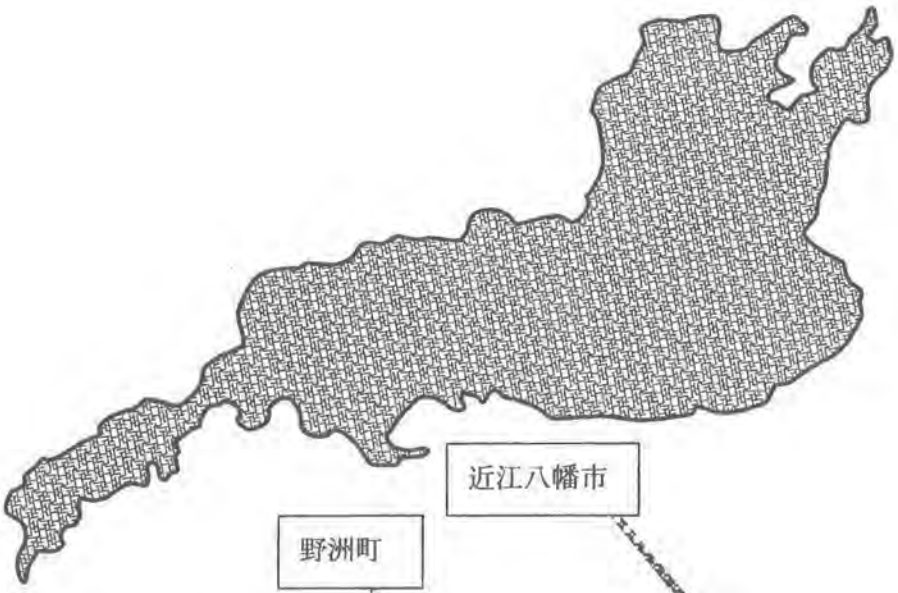
神崎郡能登川町佐野 781-3
井口 博之

素人の研究者にとって、思いはあってもその研究の方法が分からない、思いそのものもまとまりがつかない、研究成果のまとめ方が分からない、気力が失せる、仲間がいない、活動費用がない、発表の場がない、周囲の理解が得られないなど「今までの悩み」をおうみ未来塾に参加することによって解決していけると思う。と言う動機で応募しました。しかし、2年度目からグループ研究になったこともあり、自分が思う分野ではなく異なるものを学ぶべきと考え、今のグループに参画しました。仕事の都合などで思うように出席できなくて十分な活動が出来なかったことが残念です。

堤　良彦
安土町

自分の地域で市民活動団体の組織化が著しい。住民を主体とする組織づくりのむつかしさに直面しました。
パートナーシップ型の社会形成を学ぶべきだと思い応募しました。

堤さん



近江八幡市

野洲町

川瀬さん

森さん

野洲町　森　富　裕　子

時代とともに人の考え方や流れが変わってきたので
今の時代にあった社会性を学びたい。

今まさに地域コミニュティの時代。
家族の絆　地域の絆　自然との絆
で 人間性豊かな暮らしが出来る

"心のバリアフリー"
言葉の壁（森）

川瀬美智子（近江八幡市）

日高さんが学長ならさぞかしおもしろい塾だろうと応募したのがそもそものきっかけ。
「また、どうせ男ばっか集まるんじゃあないの。こら、女も入らなあかん」というのが２番目の動機。そして、市民活動の醍醐味のようなものをたくさんの人と出会って感じたいと思ったのです。

守山市

広実さん

広実　照美（守山市在住）

※応募の動機

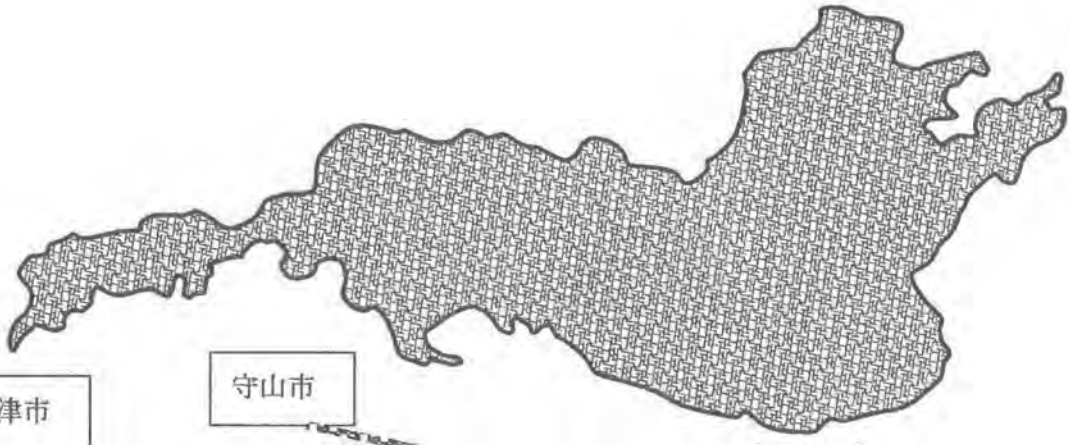
♪ネットワークの形成とまちづくりの取り組み

多くの人の理解と協力を得ながら、楽しさを味わいながら、活動する手法や人材を得る力を自分につけたい。
その為には分野を越えて様々な人達との交流を深め、情報交換の場が持て、私の力量不足を補う多くの学びの場がある未来塾に期待して。

私達は忘れかけています。
それは一昔前まであった
「友愛文化とミッション」を
今では地域に不満を抱き、
誰が地域を創ってきたのかを忘れ、
先人から受け継いできた良質な遺産文化を
再現すべく、共に語り合いたく応募しました。

近江八幡市　吉田正樹

吉田さん



草津市

守山市

金澤さん

おうみ未来塾って何？
21世紀になにかするところ？
ここへいけば地域プロデューサーと
いうものになれるわけ？
じゃあ地域プロデューサーって？
最先端を走る人のこと？
地域を動かすことのできる人？

草津市在住
地域通貨おうみ委員会
金澤惠美

久田さん

PROFILE

氏名：久田　君江
性別：女
身長：5．35feet
体重：116pond
原産：滋賀県
棲息：守山市
分類：大型ほ乳動物ヒト科
習性：雑食、冬眠
特徴：高所恐怖、方向音痴
特技：冒険、手話
好物：虎屋の羊かん
性格：好奇心の塊
動機：自分への挑戦
役職：ボランティア連協副会長
好きな言葉：LOVE　IS　ACTION

大津市

石田さん

㊀氏名　石田 和子
㊁居住　大津市
㊂応募の動機
PTAやこども会、自主サークル活動、そして行政への要求運動など、さまざまなことをとりくんできたが、活動へのゆきづまりや限界を感じていた。
これまでの活動を客観的に評価し、自分自身の新たなライフスタイルと指針をもつためく自分さがしに、「おうみ未来塾」に入塾した。

岡さん

岡　佑里子　（草津市）

知らない間に、身の回りに外国人が
たくさんいることに驚く
↓
自分は留学中に地元の人にいろいろ教えてもらった。では
今の私にできることは？！
↓
そうだ、学校の中の子どもたちは大丈夫で困ってない？
↓
いざ行動！！でも何かもっと体的にその手法を知りたい
↓
おうみ未来塾　参加。→ 色々をはみだすために、参加してみました。みなさんに会えてよかったなぁ。いつもそうやって言ってたっけ。

時代が変化するにつれ、人々の価値感も多様化しだんだんと地域の人々との連帯感も希薄してきたと現実に感じつつある中で、おうみ未来塾の案内を知り、この機会にもう一度、私なりに地域づくりのことを学びたいと思いました。

そして、この塾を通して
これまで知らなかった
新しい人との出会いの中で、
いい元気を頂こう、と期待したのでありました。

たかしまちょう
さわ たかひこ

澤 さん

高島町

岡崎さん

ネットワーク化と融合化による
PPKを目指した新しい地域おこしのための
コツコツ積重ねを !!

ネットワーク地球村・会員
電気自動車研究会・会員
マハーサマーデイ研究会・会員
関西総合医療研究会(NPO法人)事務局員
日吉台社協・事務局長
ケアクラフト002(自助具工房)
地域プロデューサー
Kスポ・レク倶楽部
日本レク協・インストラクター
おうみ健康教室
気の健康学士

(大津市日吉台・一期生 岡崎 一朗)

石垣さん

おうみ未来塾への応募の動機　　1999．3．8

〒520－0246　大津市仰木の里4－3－2－401
石垣公由

21 世紀を目前にして、これまでの大量生産，消費、大量廃棄の消費経済の持続性が無い事がほぼ共通の認識となりつつある現在、これからのライフスタイルや「価値観」の転換が求められております。また、滋賀県政や県民の「未来像」を描こうとする時、この様な大きな時代背景に基づく要求事項を考えずしては、成り立たないことと考えます。

そしてこれらの重要課題に対応しながら「持続可能な社会」を形成していく為には、国、地方行政、企業、市民の垣根を越えて自主自立に基づくパートナーシップを築いて行くことが、今最も需要なことではないかと考えます。

私がおうみ未来塾に応募しましたのは、上記のような「重要課題」に対しさらに多くの方々と共に研修を重ね、子ども達に良い環境を残したいと願ってのことです。

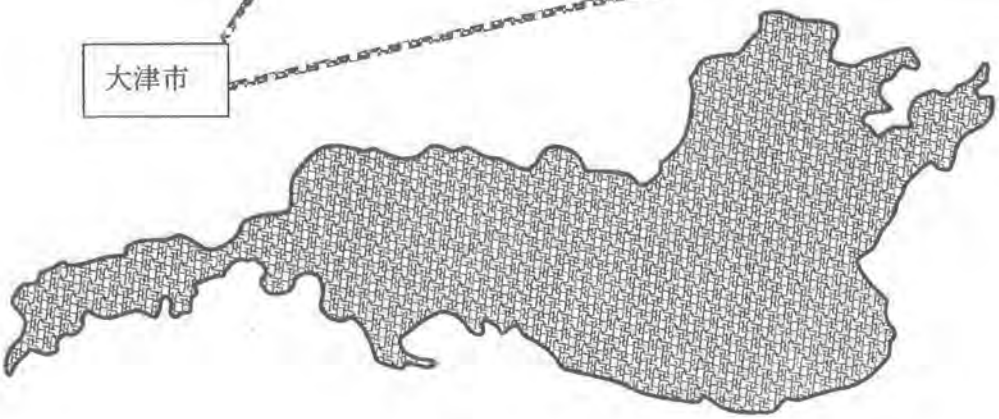
遠藤さん

「地縁」組織の成り立ちは当初は共通の目的が一致していたことで成立していたと思う。しかし地域のコミュニケーションがなくなっている今の時代に、子育てに関する地域の機能をどうしたら取り戻せるのか？「地縁」を再構築するキーワードは何か？少子化時代の子どもの成長を支援するためのしくみづくりを未来塾の活動の中から学びたいと思う。

そのことは、これからの高齢化社会になったときに、私たち自身が活きていくまちづくりにもいかせることだと思う。

大津市
遠藤恵子

大津市

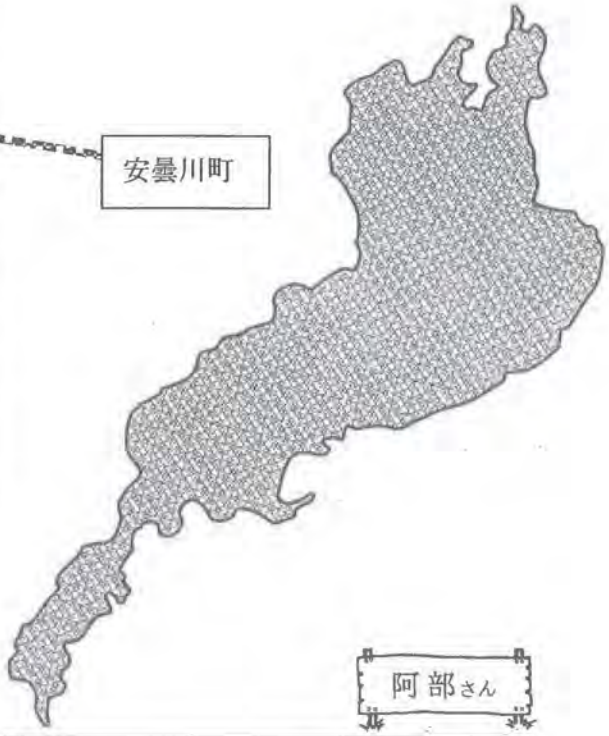


塾生の良きアドバイザー

琵琶湖ネットワークセンター事務局

安曇川町

来見さん



阿部さん

天川さん

今、思うこと

湖北の実家を出て大津市に来て早１２年、子どもの頃に野や山を駆けずり回って遊んだことが無性に懐かしく思われる、たまに実家に帰って野や山を見ているとそこには、子どもの姿はない。今も昔と同じ野や山なのに・・・。実家を離れて初めて分かる自然のありがたさ、人とのふれあい。そこには子どもを育む人、土壌があった。

未来塾を担当してみんなと話し、行動する中で体験することの重要性を再認識した。思いは、「この地域をよくしたい」この思いを大切に、これから行動しようと思う。

１期生担当　天川隆男

ネットワークセンターへ来てから、いろいろな方と出会いました。"未来塾１期生"の方は最初にお出会いしたこともあり、また、いろんな想いを強くもっている方が多く強く印象に残っています。これからも頑張ってください。(川勝六四)

川勝さん

メモ mail

１９９９

開講式（６．１３）

わくわく、どきどきの開講式。おうみ未来塾１期生２６名が初めて顔を合わした。開講式の塾長（日高敏隆さん）の話は「地域プロデューサーとは」。本当にここにいる人たちが地域をプロデュースしていくのかしら・・・

講義（７．２５／８．２２／９．４）

講義が始まる。最初は新鮮だった未来塾が回を重ねるごとに、お勉強の日々で色あせていくと感じた塾生は少なくなかったようだ。インターネット講座も開かれ、未来塾の塾生がお互いの顔もどんな人かもしらないけれど、メールのやりとりが始まった。

県内研修（１０．２～３／１０．３０）

県内研修で、「せせらぎ遊園のまちづくり　甲良町」と「朽木村新本陣　日曜朝市の朽木村」を訪問し、現地の人たちから話を聞く。宿泊をし、一晩ゆっくりとお互いに話し込めたことで、「とても良かった」、「やっと顔が見えた」という感想。幹事会も動き出した。３０日には、黒壁で有名な長浜を訪れた。

試行錯誤（１１月）

それぞれのグループで検討会がもたれた。県内研修でひとやま越したものの、これからの未来塾をどのように魅力あるものにつくっていったらよいかを話し合おうというもの。各グループでさまざまな意見が出され、試行錯誤の日々が続いた。

２０００

ワークショップ（1999.12.26／2000.1.29／2.19／3.18）

塾生がどんな人たちなのかが少し見えてきた。これが、毎田さんの企画力向上のためのワークショップを受講した後の何名かの感想だ。今までの講義では塾生どうしのやりとりが少なかったが、今回はクロスし、話し合いそれぞれの考えを聞く場があったことが大きかったのではないかと思う。研究に向けてのグループ分けもしなくてはならない、もう半年過ぎたという、あせりの中から光が見えた１９９９年の終わ

り。忘年会もほっと一安心。

1月は企画県民部長から「県の将来像」について講義を受ける。さらに、2月、3月と続けて毎田さんに講師として来てもらう。参加者が思うようにそろわない中、研究テーマをしぼり、グループ作りに向けての作業を進める。塾生の一人が抜けたいとのこと。幹事会でも悩みはつきない。

合宿（4．22～23）

グループに分かれての研究を深めていくことになった。もうここからは全塾生で動くということはほとんどなくなる。4つのグループができ、グループ名も決まり、本格的に動き出した。

目標発表（6．11）

未来塾第2期開講式にあわせ1期生のグループ研究目標発表会が行われた。
一年前は我々もあんなふうに緊張していたんだなとなつかしく思う。それぞれのグループ発表にテンションはあがりっぱなし。

先進地へ（7．15～16）

愛媛県内子町、双海町へ。素晴らしい自然と人との出会い。感動、感動！ネットワークも広がった。10名ではもったいない気持ち・・・

中間発表（10．1）

おうみ市民活動屋台村開催日に、中間発表会を実施した。運営委員からのきびしいコメントを聞いて、これでいいのかとチョット心配。

プレゼン技法（12．2）

暖かな日差しに誘われて，湖岸でのワークショップ。握り合う手、見つめ合う目に道行く人は冷ややかなしせん視線・・・

2001

旅立ちの日（3．11）

長いようで短かった2年間。留年したい人たちばかり？

青年会館のオリエンテーションでは

日時：２０００．４．２２～２３
場所：(財) 滋賀県青年会館
目的：各グループの研究計画書作り

＜1日目＞　　参加人数：２４人

１５：００～　「環境」　「バリアフリー」　「地域づくり」　の各グループに分かれて、今後約一年間の研究の方向性と具体的な計画作り（テーマ、目的、グループ名、研究の進め方、具体的スケジュール、予算等）を論議した。

１８：３０～　夕食（寄せ鍋）、交流懇親会

＊ この日の論議の中で、「地域づくり」のグループが、研究テーマと人数面から二分割された。

＊ 夜の親睦会では、事務局員４人を交え、酒の宴、話の宴に花が咲き、夜な夜なまで語り明かし合ったのは言うまでもない。特に、中国の高級酒「鬼酒」の魔力にとりつかれてしまった塾生のこぼれ話もチラホラ…。

＜2日目＞　　参加人数：１９人

９：００～　各グループの研究計画のプレゼンテーション

１２：００　以下のように研究計画が提案され、北村運営委員長からコメントとアドバイスを受けた。

○セブン・ドロップス：～環境を切り口にした地域づくり～
「水」について学び、地域の人々を巻き込んで地域づくりの仕掛けを考える。

○心のバリアフリー：～心のバリアフリー～
バリアフリーになっていない実態調査を通し、「心のバリアフリー」とは何かを市民に投げかける。（手段：劇）

○びわこのあまち：～この地域の未来の子どもが残れるか～
こどもたちが地域に残るために、どんな仕組みが必要か考察する。

○ブレークスルー夢デザイン：～金と人をどうつなぐか～
① 行政や財団の助成金補助金のあり方についての提言する。
②「地域通貨」の研究を進める。

＊この合宿を起点に各グループ研究活動がスタートした。

グループ研究目標発表会

日時：２０００．６．１１
場所：県民交流センター２０７会議室
目的：各グループの研究の内容や方向を発表する

おうみ未来塾第２期生開講式の後、第１期生の目標発表がおこなわれた。

これは、２年間の塾での学習カリキュラムで、１年目は講義スタイルの学習を行い、２年目はこの学習を基本として、塾生がそれぞれのテーマを定め、４つの研究グループに分かれて研究活動を行うもので、その研究の内容や方向を「目標」として発表するというものである。

財団理事長の國松知事をはじめ、日高塾長や北村運営委員長、各運営委員の方々や１期・２期塾生や一般参加の人たちの前で発表した。

それぞれのグループは、子どもに視点を置いたまちづくりを考える「びわこのあまち（琵琶湖の雨落）」、地域の活性化をめざした地域通貨によるまちづくりと市民活動団体の助成制度を研究する「ブレークスルー夢デザイン」、環境を切り口とした地域づくりを考える「セブン・ドロップス（７人のしずく）」と誰にもやさしいユニバーサルデザインをめざした地域づくりの「心のバリアフリー」がそれぞれの目標発表を行った。

発表の形式も各グループの個性を出して、語りかけやパワーポイント方式、オーソドックスな形式、寸劇による発表など、多様な表現での目標発表となった。

北村運営委員長の講評は、具体的な研究テーマが見えてこないことの指摘が行われたが、

１年前の開講式から比べると、塾生の１年間の学習を通じた討議の成果や変化は、誰の目にも明らかであった。こういった自らが学び自己を高めていくことは、これからの時代にふさわしい「地域プロデューサーの養成」に適ったものであると思った。

県外研修報告

日時：２０００．７．１５～１６
場所：１５日：愛媛県　内子町　１６日：愛媛県　双海町
目的：先進地である愛媛県内子町、双海町のまちづくりの現地研修を行い、「キーパーソン」とは何かを研修する。

参加者　未来塾々生９名、事務局１名（天川）合計１０名
塾生：石垣、遠藤、岡崎、金澤、澤、高木、広実、松井、吉田

講師　１．内子町：前内子町企画調整課長　岡田　文淑　氏
２．双海町：地域振興課長　若松　進一　氏

報告１．愛媛県　内子町　＜内子町の概要＞　（報告者：石垣 公由）

松山から一時間、南の山間部の内子町は、明治,大正時代に和紙と木蝋の生産により繁栄したが、特に戦後の経済成長からは取り残されて疲弊し過疎化が進むようになった。

こうした状況のなかで、内子町は「地域振興策」として、地方都市としての先進事例である「萩」「倉敷」「妻籠」「高山」などに学び、歴史的環境（まちなみ、むらなみ）保存をめざした。

① 視察の順路　（現地　１５日　ｐｍ２時３０到着後～ｐｍ５時）

木蝋資料館「上芳我邸」を出発点とし「内子座」を終点とする約１ｋｍの木造白壁の町並保存商店街を見学したのち再度木蝋資料館にもどり岡田前課長より町づくりの経緯説明をうけた。夜は「石畳の宿」で「えひめ地域政策研究センター」の皆さんとの懇親会。
平家ホタル観賞。

電柱・看板のないすっきりした白壁の商店街

②岡田前課長の語る辛口のまちづくりキーワード

１．内子町は引き算型まちづくり、不足消去法的施策である。
２．地域づくりに多数決は必ずしも正しくない。責任が不明確になる。
（町並み保存案は当初大反対）
３．従来の町づくり策は利益優先型で住民不在になる。
４．一般の「町づくりゴッコ」は自己満足型でしかない。
５．行政に「要求」する時代は終わった。
６．自分の世代だけの町づくりは無責任である。自分達の世代の損得でしか考えていない。
７．土、日、どれだけ地域の為に汗がかけるか？
本当に地域を愛する事とはどういうことか？

8．肩書きの無い人が本当の地域づくりのキーパーソンである。
9．任期２年の自治会役員が住民代表では地域づくりは到底無理である。
10．地域とはなにか、地域らしさ、地域のアイデンティティを真剣に探る。
11．自分がやる気にならないと他人は動かせない、知恵は浮かばない。
12．地域が他人を呼べる条件：他人様に自慢できるものを出来るだけ多く持つこと。
　a おいしい食事　b 安らげる宿　c 喜んで貰えるみやげ　d 本当の名所
13．美しい町づくり：欧州人から見て日本人は美を求める割には、醜に鈍感と言われる。
　ex：観光地の看板やゴミ、電柱やタバコの吸殻、空缶、ビニール袋
14．地域づくりの第一歩は「最低生活圏」に在住する確固たるキーパーソンの養成に始まる。

報告２．愛媛県 双海町 <双海町の概要>（報告者：岡崎 一郎）

愛媛県の中ほどに位置し、松山市から南西方向に約３０キロ行ったところにある。
瀬戸内海（伊予灘）に面した人口 5,900 人の町。基幹産業はみかんと漁業。
「しずむ夕日が立ちどまる町」のキャッチフレーズのもと、瀬戸内に「じゅーん」と音を立てて沈んでいくような美しい夕日が鑑賞できる町として、県内外に夕日にまつわる情報と町の話題を発信し、周囲の注目を集めながら、人と町の活性化を図っている。

① 視察の順序

「道の駅ふたみ」で若松進一課長に迎えられ、(30 分の遅刻で気まずい出会いになるところを、“こんな美人揃いでは、遅刻の小言は止めにして、みなさんようこそー” さすが名物男はやるなーのごあいさつ)「夕日のミュージアム」のすばらしいご案内をうける。

雨の日も夕日が観賞出来る夕日のミュージアム

「レストランタ浜館」で海の幸のお昼を頂いたあと、スペシャルサービスで若松邸の訪問となり、町おこしキーパーソンの実生活を間近に見せてもらい、奥様が急ぎゆでて下さった取れたてのトウモロコシの甘さと、つめたい麦茶のあたたかい接待にあずかって、一同感激して帰途についた。

② 若松課長から頂いた地域プロデューサーの要諦

1．率先垂範
　(夕日のミュージアムの代表者でありながら、早朝の掃除をかかさない。
　自分の信念を上司、県などに身体を張って貫く。地元の子どもの自然学習活動にも長年にわたって参画)
2．こだわりを持ち続ける
　(夕日のよさにとことんこだわる。
　「たかが夕日、されど夕日」夕日のコンサートはクラシックミュージック)

3．アイデアを大事にする。

地元にある物主義、（夕日・めだか・ほたる）

現場実践主義（思い込んだら命懸け。現場の情報や悩みを吸い上げ、アイデアを出し合ってトライ＆エラーを重ね、成功までねばる）

4．固定観念、負け犬根性からの訣別

（田舎歎きの十ヶ条、何もないことは何でもできるの開き直りの発想などマイナスの要素も危機感というエネルギーとし、小さな成功体験の積み重ねの相乗効果を生んでいる）

報告３県外研修の総括　愛媛県の代表的な「地域づくり」の事例から

今回の内子町、双海町両町の二つの地域づくりの事例では、興味深い共通点と相違点があった。

（共通点）ここでもキーパーソンの熱い「想い」が地域、人を動かす原動力である。
地域づくりに終点はない、常にリニューアルされていなければならない。

（相違点）岡田氏の理詰めの地域づくり施策と若松氏のロマン豊かな町づくり施策。

今回の二人のキーパーソンから学んだことから３つの私の実践課題を抽出して見る。

＊自分なりの哲学を旗印として鮮明にし、ねばり強くそれを貫徹する。

＊しかし学び続け、現場の変化する実態への適応を忘れない。

＊これしかないという考え方でなく、現場で動くことにより道は開ける。

（世阿弥の「念ずれば花開く」の改良版「ほんとに念ずれば花ひらく」を結びの言葉とします）

おまけ

研修の半年後今年１月21日付朝日新聞朝刊「夢に向かって走り続ける」若松氏の記事

「しずむ夕日が立ちどまる町」をキャッチフレーズにまちおこしを進める愛媛県双海町地域振興課の若松進一課長(56)が、日本一の夕日の町を目指した奮戦記「昇る夕日でまちづくり」を出版した。

四六判２５６ページ１５００円（税込み）アトラス出版（０８９－９３２－８１３１）

「石畳の宿」からさらに山の上にある神社へと珍しい屋根葺き橋

グループ研究中間発表会

日時：２０００．１０．１
場所：県民交流センター３０５
目的：グループ研究の進捗状況の発表

１０月１日の「みらい塾１期生グループ研究中間発表会」は、一般県民にも広く公開する意味から「おうみ市民活動屋台村（９／３０～１０／１開催）」の１コーナーとして行われた。各グループから熱のこもった発表があった。（詳細はグループ報告を参照）

運営委員からは、各グループのテーマはおもしろいのだがコンセプトや論点が不明確である。今後、テーマを解決するために現地での聞き取りや事例調査等をすることで問題点をより具体化すること等、少々辛口のコメントを頂いた。発表会後の懇親会では、「中間発表会に向けて塾生としてこんなにがんばったのにコメントがきびしすぎる・・」等々塾生の中ではコメントに対して不満の声も多かった。しかしながら、最終発表会に向けた闘志が生まれたことも事実である。

ところで、次の日の新聞（１０／２付・朝日新聞・滋賀版）を見てびっくり・・・

「地域限定エコマネーご存じ？」”大津でフォーラム”

との見出しであった。新聞記事の内容は”ブレイクスルー夢デザイン”グループの「地域通貨ってなに？」のフォーラムの内容のみが詳しく書かれていた。

この屋台村では、ＮＰＯ１３０団体が２日間にわたって発表や展示をおこなった。にもかかわらずその「屋台村」の文字は見つからなかった。ＮＰＯ活動は、新聞やテレビ等のマスコミに取り上げられたから評価されたとは必ずしも言えない。しかしながら、行政の補助金や市民からカンパを受けるとき、スタッフの確保やイベントの動員を行うときは、テレビや新聞で紹介されたＮＰＯ団体は信頼度が高くなるように感じている。

マスコミに取り上げられるのは、「活発な活動」や「市民により有益な活動」を行っていることも大切だが、「タイムリー（話題性のある）」な活動であることの方が最も重要である。これから世間が注目するであろう話題を少し先取りした活動が狙い目である。

今回の１３０ものＮＰＯ団体を押しのけ新聞記事を独占した”ブレイクスルー夢デザイン”グループの発表に拍手を送るとともに、１年前なら「介護保険導入」と相まって「心のバリアフリー」グループの発表が新聞記事を独占していたのではないかな？とちょっとくやしい思いをしている。ＮＰＯ活動は、マスコミに取り上げられることが評価されたことではない。むしろ、こつこつと地道に継続的に行われている活動の方が評価されるべきだと感じている。しかしながら、テレビや新聞に取り上げられることで社会に認められたり、活動の活性化や事業の拡大につながりその効果は大きい。

この２日間の屋台村では、何人かの新聞記者を見かけた。記者は「タイムリー・話題性」と言う観点から各ＮＰＯ活動を評価しているかもしれない。

私たちの「グループ研究」に関しても広く県民にアピールするには逆にマスコミの注目を集めるための「話題性」のある「研究テーマ」や「研究活動」を展開する必要があったのではないかとこの中間発表会で感じた。

プレゼンテーション技法

日時：２０００．１２．２
場所：県民交流センター２０４
目的：地域プロデューサーにとって必要なプレゼン技法を学ぶ。
講師名　　パートナーシップ・サポートセンター　　岸田　眞代先生

１ 学んだこと

（１）自己表現と印象交換

自己表現とは最も自分らしいところを自分らしく効果的にアピールすることであり、印象交換とはＰＲした人の印象を的確に表現することをいう。現代のような情報過多社会にあってこそ、かえってプレゼンテーション能力は、情報の的確な受発信や有効な時間活用、良好な人間関係の構築を図るうえで必要とされる。

そこで手始めに自己表現と印象交換について体験した。参加者１２名が２班に分かれ、まず各自それぞれ３分間で自己紹介をおこなった。３分間とは、概ね原稿用紙３枚分に相当し、基本的なことはすべて言える長さだそうである。各自３分間で、①自分の生まれ、②仕事の内容　③どういったことを考えているか　④自分の特徴などを話した。そのあと、印象交換として、握手しながらその相手の自己紹介内容について質問をおこなった。塾生として２年間を経たが、あらためてみんなの多様な生い立ちや考えを聞き感動した。

なお、講師はこの講座を室内で開きたい意向であったが、受講者が冬には珍しい小春日和の屋外でやることを主張したため、美しい琵琶湖畔にて比叡を望みながら行われた。

（２）ジョハリの窓

		自分が 知っている	自分が 知らない
他人が	知っている	明るく開かれた窓	気がつかない窓
他人が	知らない	隠している窓	暗い窓・閉じられた窓・未知の窓

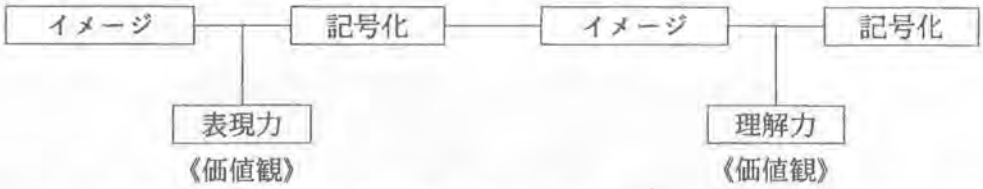
自己表現で窓を開ける

フィードバックで返してもらう

自分の事は案外自分では気がつかなかったり、他人が抱くイメージは自分と違う場合が多い。従って、自らを魅力あるものとして発信するためには、他人の批判や否定を受け止

め、自分をオープンにし、他人が自分を受けいれてくれる場所を可能な限り開けていくことが大切である。そのため、プレゼン能力を高めることは相互理解を図るうえで大切である。

（3）コミュニケーションの仕組み



コミュニケーションの３要素は、言葉・声・ボデーランゲージで、特に決め手となるボデーランゲージの構成要素としては、①表情②視線③しぐさ④相手との距離⑤ふれあいがあげられる。

コミュケーションの仕組みを体験するため、２班に分かれ、１つのイメージ図を人づてにつないでいく「伝達ゲーム」を行った。

（4）プレゼンテーション

プレゼンテーションは、導入段階（序論）・展開段階（本論）・終結段階（結論）の３部からなる。導入段階では、聞き手の注意を惹くこと・リラックスさせること・主題を先に言うこと・特にインパクトのある逸話を用意すること・聞いたらメリットがあることを言いひきよせることなどがポイントである。要は自信を持ってやるための準備期間といえる。次の展開段階は、積極的な説明、ダラダラしない主要な内容の的確な表現、強調点の設定などが重要となる。さらに、終結段階は、それまでの２段階ですでに８０％近くを表現していることから、残り２０％で話の内容を深いものにすることがポイントとなる。従って、言い換え・繰り返し・質問などの手法を用いると効果的である。また、比喩やたとえ話、比較、実例、統計などを用いることが話を魅力あるものとする。

2 思ったこと

プレゼンテーションとは自分の意図することを相手に伝え、理解してもらう事である。従って、プレゼンテーションは物事の専門的な知識や経験があるから成功するものではないし、言葉巧みに話す技術でもない。同時に、プレゼンテーションとはコミュニケーションそのものであることから、相手から共感を得られる信頼関係が構築されていなければならない。情熱と熱意で説得を続けても相手に拒否反応が生じるケースのほとんどの原因は、相手に人間性が認められていないことである。

信頼を得るにはどうするか。徳を身につけることである。豊富な知識も納得して説明しなければ単なる情報に終わる。説明とは単に相手に内容を伝えることであり、説得とは相手が説明を聞き、納得し、行動に移した状態をいう。その意味で、プレゼンとは単なる説明技術をいうのではなく、相手に喜びや感動を与え、相手に行動を起こさせることを指す。そのためには、日頃からプレゼン・マインドを身につけ、お互いの心が通じ合う共感の場づくりが大切であると思った。

グループ研究報告会・旅立ちの会

日時：２００１．３．１１
場所：県民交流センター

旅立ちの会では、それぞれのグループから、最終の研究報告をし、運営委員からコメントがあった。
その後、修了証と記念品が塾生に贈られ、日高塾長より「みなさんの今後の活躍を楽しみにしています。」という言葉があった。
最後に、今後の活動としておうみ未来塾第１期生「ちえの輪」の設立総会を行った。
この、「ちえの輪」を通し交流、親睦を図りながら、素晴らしい滋賀を築いていくことを確認した。

記念品

商品名　ハーティー・ラビー
（植物名：ホヤケリエ）

タイ原産の植物で男性が女性にプロポーズする際に愛のあかしとしてプレゼントすると、かなわぬ愛も成就するという伝説を持つ希少性の高い植物です。静岡県の浜松市のつだ地区など４地区が村おこし活動の一環として栽培しているものです。

センターではハート型＝心＝想いを育てる、育てて貰って行動に移してもらいたいという想いを込め送ります。

いい形で発表できた。
私自身成長した。
もてる時間を発揮することで変化していくことと、いろんなものを大切に思う心、それを表現し、伝えていくことがいかに大切であるかを学んだ。よかった。//（塾生）

塾長、運営委員、理事長(知事)コメント

―セブン・ドロップス―

・東近江水環境自治推進協議会と行動することで活動に広がりがもてている。
・狂言の発想もよかった。

―心のバリアフリー―

・回を重ねるごとに論点がしぼりこまれてきた。
・問題提起に芝居を使っていることを評価したい。

―ブレイクスルー夢デザイン―

・どういうコミュニティを作るのかを論点で深まっている。
・助成金については、各団体への補助金まで調べてほしかった。

―びわこのあまち―

・未来から現在を見つめる手法がおもしろい。
・研究成果を劇という手法で表現したことがすごい！

全体コメント

この未来塾をやって良かったと実感している。みなさんが、はつらつとして、それぞれの発見をされていたのが印象的だった。

中間発表以来、半年間で内容が深まった。また、想いが共有できて、論点が深まっていた。プレゼンテーションの技法が多様化していてよかった。

この時間とお金で、この知恵と発想力、市民の力はすごい。

新たな一歩

日時：　２０００．８．２７、１２．２、２００１．１．１３
場所：　県民交流ｾﾝﾀｰ　２０７
目的：　卒塾後の活動をどうしていくのか話し合う

２年間の未来塾の活動をとおして卒塾後をどうしていくのか塾生会で三回にわたって話し合った。その話し合いをするにあたって皆の意見をアンケートの形で集約した。

（１）未来塾での二年間で得たものは何ですか？
　未来塾へ入って良かったですか？
多数の人が「人との出会い」をあげていた。それは今まで知らなかった分野に視野が広がったこと、幅広いネットワークが出来たことなどが未来塾での成果と答えられている。答えた方全員未来塾へ入って良かったという声だった。

（２）この二年間で感じた疑問、苦労したことは？
２年間はとても忙しく、自分の活動の上に未来塾の日程を入れることが一番苦労したという多くの声が寄せられていた。その中で「地域プロデューサー」づくりとという塾の進め方に、それぞれの思いの違いがあり、それを埋め切れたのかどうかわからないと言う声もあった。

（３）卒塾後どのような活動だったらしたいと思いますか？
思いはそれぞれ違ったが、今後も街づくりやボランティア、研究活動、政策提言など、この２年間のネットワークも利用して活動していきたいと多くの声が出されていた。

（４）未来塾を今後も淡海ネットワークセンターが主体的に運営する必要があると思いますか？
　これは、はいといいえが半々だった。「塾の運営は自分たちでした方が良い」や「ある程度の時期がくれば塾生自身でやりたい」、「サポートしてほしい」等々の意見が出されていた。

（５）卒塾後にＮＰＯをはじめとする事業等に参加しようとお考えですか？
　あなたの周りに「まちづくり」等の活動する仲間が増えましたか？
　　これは両方とも多くの方がはいという答えだった。

以上のような集約をもとに、２つの提案があり、話し合った。

提案１　辻川作男さん

この２年間の思いより

自分を変えようとするとき、いろんな人々と知り合うことがよいきっかけになる。この２年間は、みんなと知り合え、自分を高めるよい機会になったと思っている。これまで

の効率化をめざした縦系列ではないネットワーク型の社会を作ってみたい。そのためには、コミュニケーションを深めたり、ボランティアに参加するなど、自分の生き方が、人の役にたつ社会を作りたいと思う。

そういったことから、地域の市民団体やＮＰＯが中心となった新しい市民社会を構築することを目的としたい。人の存在基盤は、あくまでコミュニティが基本であると思っている。

私のつくりたいイメージは

私たちはこれまでそれぞれの地域や団体で様々な活動を展開してきたが、このおうみ未来塾で身につけた「地域プロデューサー」としての力を発揮し、これまで以上に多くの人にお返しをしなければならない。

↓

地域プロデユサーは、

1　地域再生のために地域の人々とともに地域の課題を発見し、政策化し、実践することが求められる。

2　そのため、幅広い人材ネットワークを結ぶ事が大切である。

3　そして、社会を構成する行政、企業、市民と協働連携のもと政策を立案し、実践し、評価することが求められている。

コミュニテイの再生の視点を持ちながら、地域内外の英知を総合的に結集し、地域の問題や課題に対し具体的な解決策を提案する仕組みづくり

ＰＬＡＮ・DO・SEE・CHECKの機能を備え
まちづくりのプロデユースが担える機能

（仮称）市民活動シンクタンクを創設しよう

コンセプト 1　地域の市民団体や NPO とともに新たなる市民社会をつくることを目的にします。

コンセプト 2　市民活動団体や NPO など市民活動団体が事業を進めるときや政策提案を行うときなどに支援します。

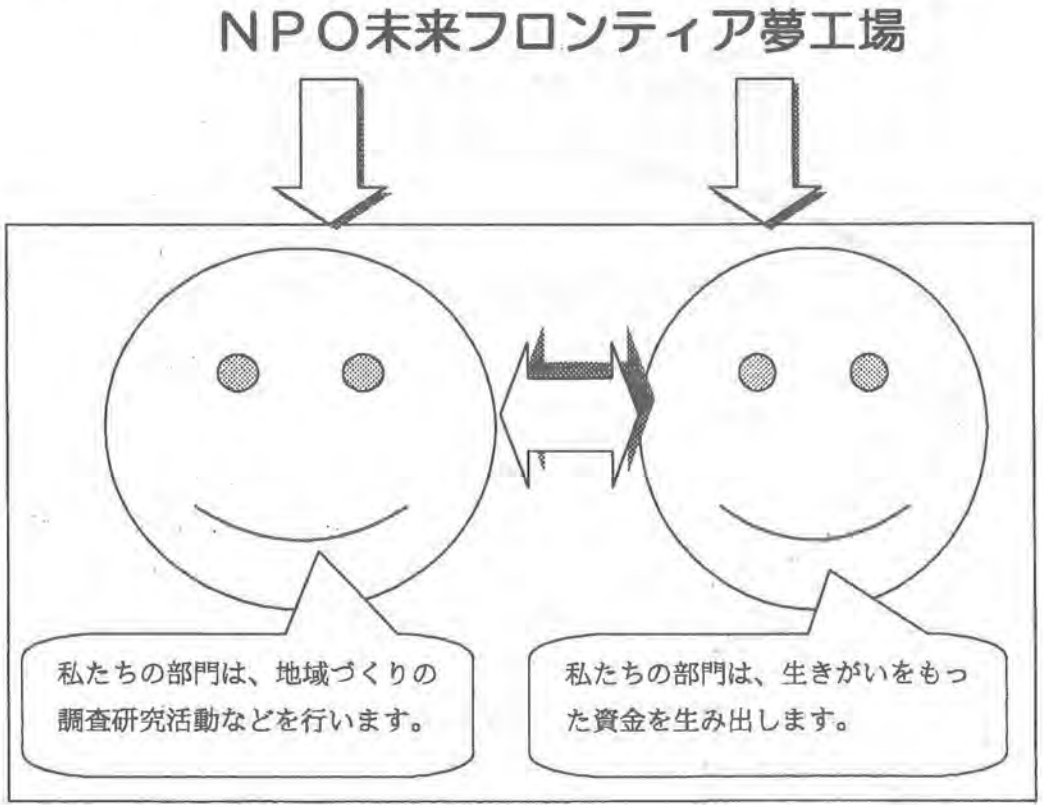
コンセプト 3　コミュニテイを基盤に、地域資産を大切にするとともに、行政や企業、住民とのネットワークのもと地域経営を基本にします。

提案2　澤　孝彦さん

アンケートの中にもあったようにこの２年間一番良かったのは仲間、人のつながりができたことだ。それが忙しいなかでもやってこれた元気の源・原動力だと思う。この２年間でつくったネットワークを大切にしたい。それでこれからは、それぞれが地域活動をやっている中で、気軽に相談できる情報交換の場を持つ場、もう一つはイメージでＮＰＯ夢工場の設立として新しい滋賀の地域づくり目指したいと思っている。こちらの方はこれからいろんな知恵を出して作っていきたい。

■（仮称）ＮＰＯ未来フロンティア夢工場のイメージ

当工場には、会員が生きがい、やりがいを生み出すための資金を生み出すための部門と、地域づくり、まちづくりの調査活動や政策提案を行っていく部門を設けます。



その結果、お互いに卒塾後は２つの提案は受けることとし、参加できる人は自由に参加する。新しい提案がある人はそれぞれに呼びかけて進める。という確認をした。

同窓会的位置づけの情報交換会の会は３月１１日の旅立ちの日に設立総会という形を取ってその時間を持つこととなった。

おうみ未来塾第１期生「ちえの輪」会則

（名　称）

１．この会の名称を「おうみ未来塾第１期生ちえの輪」（通称：「ちえの輪」）とする。

（目　的）

１．おうみ未来塾第１期生の交流・親睦、そして様々な地域活動に関する情報の交換などを通し、素晴らしい滋賀を築いていくことを目的とする。

（会　員）

１．おうみ未来塾第１期生で構成するが、希望があれば、誰でも参加できる。

（活動内容）

１．会員の交流・親睦会を行う。

２．会員が行っている活動の現場へ出かけ、学習活動を応援する。

３．その他。

（その他）

１．年会費を１０００円とする。

２．運営にあたる世話人を若干名おく。

おうみ未来塾１期生に関わって

１．はじめに

１９９９年４月、今まで市民活動／NPO に関わったことのない人間が淡海ネットワークセンターに配属された。

真新しいピアザ淡海の玄関をくぐり、２階の淡海ネットワークセンターへと向かう。そこには、琵琶湖が一望できるガラス張りの部屋があり、何と素晴らしい風景だと思ったのは３日間で、後は見慣れた風景になった。

仕事の内容は、新規事業のおうみ未来塾など。とにかく何も知らない、業界の人を誰も知らないの中で仕事がはじまった。

今までの仕事だったら、前任者の仕事を忠実にアレンジしてやってきたのだが、こればかりはそうはいかない。仕事の合間を見て、ブックレットなどを読みあさる。とにかく目の前に積まれたおうみ未来塾の申請書を読んで、一覧表を作ることからはじまった。

２．おうみ未来塾ってなんやねん

おうみ未来塾のご案内と塾生募集のチラシを見る。そこには琵琶湖がキラキラと輝くチラシ。何と、あなたも「地域プロデューサー」をめざしませんかの文字がある。地域プロデューサーってなんやねん。市民活動団体にはキーマン（キーパーソンの方がええんと違うか）がいて、これからの地域社会のありように豊かな発想を持ち、意欲的にチャレンジする人が育つ場として開設するもので、知恵を集め、意見を交換し、連携をすすめ、新たな活動につなげる人が育つところ。しかもカリキュラムの基本はあるけれど、塾生と相談して決めると書いてある、どうなるんや。わかるようで全然わからんというのがはじめの印象だった。

応募書を読む。７５人からの応募があり、それぞれ市民活動されていて、こんなにもいろんな分野があるのだろう。皆さん何と立派な事を書くのだろう。この中の何人かと２年間つきあうことになる。

３．いよいよ開講式

６月１３日の開講式には２６人の塾生が集まった。私も含めみんな緊張した顔をしている。これから始まるけれど、地域、活動分野、年代も様々な方ばかりだ。顔と名前を覚えるだけでも大変で、塾生にとっても同じ事、講義、オリエンテーション、グループディスカションと流れて行くが、お互い緊張していて腹のさぐり合いだったのだろう。せめてグループの中だけでも顔と名前を覚えてもらい、どんなことをしていて、どういう思いでこの塾へ来たのか分かるようにグループディスカッションをしたが、あまり効果がなかった。やはり、当初考えていたように懇親会をやるなどうち解けた雰囲気づくりを仕掛けていけば良かった。これが最初のつまずきである。

４．いちねんめ

７月から９月は毎月１回の２講義を入れた。なおかつインターネット講座を８月９月の講義の午前か午後に入れ、同じ場所で開催したことがいけなかった。学生時代ならともか

く、丸１日縛ることになる。黙って聞いているが、この時から塾生の間ではストレスが溜まりだした。というのは喋れないわ、隣の人は知らないわ、パソコンの画面で顔が見えにくいでムッツリ顔で帰っていく。開催場所の雰囲気づくりがいかに重要な要素の一つであるかを思い知らされることとなった。

１０月は県内研修の月である。塾生の希望により、甲良町グラウンドワーク、朽木村日曜朝市、長浜黒壁の３カ所で、うち甲良町と朽木村は１泊２日の宿泊研修となった。当初県内宿泊は予定していなかったのであるが、どうせなら宿泊したらとどうかと意見を出してみたところみんな乗ってきてくれた。夜遅くまで喋り、飲み次の日私だけ２日酔いで頭はガンガンするわ、司会をしなければならないわで散々だったが、塾生からはお互いの顔と名前が覚えられた、何をやっている人かよく分かったという意見が多かった。同じ釜の飯を食うではないが、この頃から少しずつ和らいできた。

しかしながら、全員参加ではなかったので不参加の人は依然として今までと同じである。

そこで、１１月には４つの仮グループに分かれているが、グループ毎に「これからの講義について」ということで会議を持ってもらった。これは一方的な講義のあり方をどうするのかということと、グループ員同志が知り合う機会にしてもらうという趣旨で開催した。

１２月には、ワークショップ「企画力向上」を行った。いままで一方的な講義でストレスがたまっていたのだが、みんなで作業を行うということで大変好評だった。しかし、２年目のグループ研究にあたり、テーマ出しとグループ分けをワークショップでやったのだが、まあ１回で決まるとは思っていなかったが、ある程度決まりかけてホッとしていたところ、予測したとおり「各自の思いが伝わっていない」ということで振り出しに戻りかけた。そこで緊急幹事会を開き次回の開催時にどうしようかと検討に検討を重ねた。それから３月のグループ分けにはいるのだが、地域づくりのグループが多すぎるので４月に合宿をしてグループ分けを行った。グループに分かれるときに、今までの自分の活動テーマで選ぶ人、今までの活動と違った分野のテーマで研究したいという人、この人と一緒にやってみたいという人で選ぶ人など様々だ。何にしても１期生は宿泊して話すことに苦にならない人ばかりである。まあこれが人を知ってお互いが理解し合える方法の一つに違いないが、事務局の私が言うのも変だが、マメの一言である。特に夜中までの夜なべ談義というかおしゃべり（アルコール付）は、人の気持ちを大らかにするのか、日頃の癒しの場となるようである。この頃から私もだんだんこの必要性が解ってきた。

５．にねんめ

いよいよグループ研究がはじまった。ここからは各グループが自主的に開催して研究を進めていく月に２回開催するところもあれば、１回のところもあり自由である。グループ研究をするにあたり、主任コーディネーターを付けようと思っていたが、塾生が「コーディネーターの考えに引っ張られる」ということから配置しないことにした。予算は各グループとも７万円で、１年間会議場所の確保から全てやりくりすることにした。もちろん各自の持ち出しがあったことは言うまでもなく、グループによっては助成金を申請するところも出てきた。グループ研究に入ってしまうと全員が集まる機会がないので、２ヶ月に１度は集まろうやということで行事を入れることにした。６月の目標発表会のプレゼンでは

パワーポイントあり、劇あり語りありで「これからやるぞ」という意気込みが伝わってきて知事も感激していた。１０月の中間発表会では６月からあまり経っていないので出せないと言う意見があったが、現に動いているところとそうでないところの差がハッキリと出てきた。この夜に運営委員と塾生の懇親会を持ったが、１つのグループを除いて他の３グループはとても厳しいコメントを聞くことになった。１つを紹介すると「現場が見えない」ということであった。日頃、現場を大事にする塾生にとってこれほどキツイ一発はなかっただろう。「なにくそ」と思ったグループもあれば「時間がなくてできなかった」と自分達で納得するグループもあった。

それから、各グループ怒濤のごとくグループ研究に没頭することになり、毎週集まって研究しているグループも現れた。あっと言う間の２年間。グループ研究に期間が短いという意見もあったが、なんとかここまでたどり着いた。この知縁で新たな活動を始めた人もいるし、これから同窓会的にも繋がりを大事にしたいということで「ちえの輪」が発足した。種が撒かれたと言っていいだろう。

６．おわりに

「可塑性のあるカリキュラム」、「塾生主体の塾づくり」をモットーにこの２年間、何も前例のない中から出発したが、全くの白紙からの出発だった。いつも頭から離れなかったのは、この個性のある人たちが心を１つにして２年間やっていけるのだろうか？月１回程度の講義や集まりで真に知り合ってお互いが分かり合えるのだろうか、事務局としてできることは何か？やりすぎると引っ張っているということで反発を買うという苦悩の日々だった。

出会う回数に比例してお互いのネットワークが広がったように思う。毎月１回幹事会・編集委員会に平日の夜集まってきてくれた人と月１回の講義出席の人とは、やはり語る回数、出会う回数が違う分、差が出てきたのは当然といえる。また、この塾に優先的に参加してくれた人とやむを得ず参加できない人とも明らかに違いが出てきた。塾に魅力がなければ参加者は減るということは当然であるが、参加してもらう雰囲気づくりを考えさせられる２年間であった。

今でも、この塾はノウハウや知識を与えられるものではなく、自らが聞き、考え、ディスカッションし、体験する中で自分のネットワークを作り、高めていくものだと思っている。しかしながら楽しさもなくては、一緒にやっていけない。市民活動も楽しい、充実感があるという自分に返ってくるものがあるからこそできるのであると思う。この楽しさが塾を運営する面で欠けていたと反省している。卒塾後もこのネットワーク、おうみ未来塾での経験を活かし、地域で必殺仕掛け人として活動されることを期待している。

最後に、私を塾生の一員として認めていただき、育てていただいた事に対し、お礼申し上げます。

おうみ未来塾１期生担当　天川隆男

びわこのあまち

吉田　正樹　（近江八幡市）
市田　椰良生（五個荘町）
苗村　まち子（愛東町）
来見　久美子（安曇川町）
西村　菜穂子（水口町）

テーマ「この地域に未来の子どもが残れるか！」

※ 目　次　※

1．本研究の背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
2．本研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
3．本研究の視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
4．研究対象の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
① 吉田正樹考察
② 市田椰良生考察
③ 苗村まち子考察
④ 来見久美子考察
⑤ 西村菜穂子考察
・「大切にしたいまちアンケート」の考察
・「滋賀県政論調査・滋賀県民意識調査」の考察
・NPO 法人天気村（草津市）との懇談考察
・県外研修視察より考察
：長野県飯田市
：岐阜県蛭川村「岩本博石館」
：長野県浪合村「トンキラ農園」
5．本研究の結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
6．未来塾生が「地域づくりのしくみづくり」をできえるか！・・・・・・47

研究テーマ 「この地域に未来の子どもが残れるか！」

未来塾 期生

びわこのあまちグループ

1. 本研究の背景

奇しくも私たち未来塾一期生は、２０世紀と２１世紀を跨いで、存在している。日本という国にとっても、明治維新以来進めてきた、国家意識の強い国民づくりの正に世紀末の仕上がりを望む年といえるかもしれない。

特に、この半世紀、私たちは何をしてきたのか、何を成し遂げてきたのか。戦後の荒廃から世界に奇跡を示した日本経済も閉塞状況にあり、数多くのものを代替に失ってきたのである。

それは、連綿と続いてきた日本人のよき文化・地域愛をはじめとする日本の故郷である。今、私たちは真剣に２０世紀に置いていくものと２１世紀に引き渡すものとをはっきり区別する必要がある。２０００年という大きな節目を迎えた今、ふと地域を見渡すと「何かが違う・このままでいいのだろうか」と私たちは気づくことがいろんなところにあるのである。

先日（2000.12.6）、IEA 発表の「国際数学/理科教育調査」で、日本の子どもの数学の成績は上位なのに、「嫌いだ！」という結果がわかったと報道されていた。

このことは、「ゆとり」「心の教育」等々唱えつつも、結果としては、戦後の学校教

育の成果であろう。戦後と言えばもう２世代に渡り、学校教育により「考え型＝パターン」をも教え込まれた結果、「自分で考えることをしない」訓練を受け続けてきたと言えるのではないだろうか。教育の場として、学校の他にも家庭・地域社会が存在していた。ところが、現在、人格形成の場であったはずの家庭・地域社会もが、この教え込み教育の場となってしまい、より加速されて、今は学校教育のしりたたき機能さえ持ってしまった感がしてしまうのは、私たちだけではあるまい。

近年特に、「ほんとうの豊かさを求めて」といわれ、流行にさえ感じる傾向にあるようである。“自然にかえれ！”といっては、オートキャンプ場が、日本中で大繁盛になったり、「ボランティア精神」と叫ばれれば、全国の学校現場にも「ボランティア体験」がやってくる。

とかく、日本中同じ波に乗らねばならないようである。しかし、無いよりはまし、形はどうであれ、とにかく何かを求めたいという思いの現れだと喜びたいし、そのエネルギーが存在することも見えてきている。これが、今の日本の姿ではないだろうか。

そこで、今私たちには,何をすべきかが、大いに問われるところである。

２．本研究の目的

現在、様々な社会現象の影響の結果として、実は、都市部だけでなく私たちの地域でも、世代間の自然な交流が減少してきているように思える。さらには、この減少してきたことを良しとし、また異なる世代に対し、理解できないと否定する傾向が見られることも多い様に感じる。

そこで,私たちは「この地域に未来の子ども達が残れるか！」というテーマをもって多くの視点から「どう生きるのか！」を考えていくこととする。

さて、この研究を進めるにおいて、メンバーで、①は吉田②は市田③は苗村④は来見⑤は西村が目標を掲げ考察をする事にした。

① この地域に未来の子ども達が残れるための「してもいい競争・してはいけない競争」を明確にすること
② この地域に未来の子ども達が残れるための「地域おこしのネットワーク」を明確にすること
③ この地域に未来の子ども達が残れるための「隣近所の異文化理解と国際交流」を明確にすること
④ この地域に未来の子ども達が残れるための「楽しい、おもしろいという共存」を明確にすること
⑤ この地域に未来の子ども達が残れるための「バックアップ体制」を明確にすること

以上のことを目標として、生態系を含めた未来の子ども達に先人から受け継いだ伝統や習慣・文化・自然の恵みを意識・認識することで、「地域文化をよく知り、

誇り、品格を持って生き暮らせる、良質な社会環境」の姿を確立さす仕組みづくりを考察する。

3．本研究の視点

地域とは自然とともに、同じ空間に生きるもの達の社会であり、先人達から受け継いできたもの、子孫から預かっているものであり、社会的・文化的・経済的な生き様を総称するものと位置付ける。

そして、残しておかなければならない文化は自然風景とともに、さらなる住んでいる所を愛する人達が互いに連携をもちなが暮らせるためには、どんな仕組みがあるのか何が必要かを、見つめ考えていく。

子どもとは人間の子どもだけではなく、生命をもつあらゆる生物をはじめ、経済活動から生まれてきている子孫と考える視点を持つ。

4．研究対象の考察

① 「してもいい競争・してはいけない競争」を明確に進めるにおいて、「２１世紀の日本の姿をどのように考えていくのか」［日本はどのように変わったのか］を考察する。

①-a 「２１世紀の日本をどうのように考えていくのか」

日本の２１世紀の姿をどう考えるかということで、まちづくりの必然性過去の有効性・外発的地域づくり・内発的地域づくりとの関連性などを実証的に論ずることで、２１世紀の日本の姿のあるべき姿を示唆できる。

開国の維新期に日本が鎖国をといたときの、日本の印象は「美しい国土と安全な社会」とあり、日本を訪れた外国人の目に映った「日本の姿」であった。

しかし、現在では、往時のように閉じた世界には戻る事はできず、今や諸外国と深く関わりあいを持つ、開かれた日本とならなければならないのである。そして、同時に環境・安全・情報問題等を考える時代の到来であり、いいかえれば「経済・モノ」に内在する固有の価値を評価、見つけ出す事が大切である。したがって、美しい自然景観・美しい地球という共通感覚をたかめ、同時に「自然との調和」と「社会の安全性」［情報の共有］を自覚的に示すことが課題ではないか。

では、この課題の「２１世紀の日本の姿」とは、日本人の暮らしをひときわ魅力あるものにすることである。（＊）環境の保全と安全の確保は、日々の暮らしにおいて求める基本的な事である。（＊）自らが自らの生き方に誇りを感じ、日本人の暮らしの生活環境が国を越えて訪れる人々に魅力ある美しいものと印象を与えることが大切である。（＊）過去の有効な実績から考えると、戦後の日本は欧米に追いつこうという目標を持ち資源と技術を輸入し、付加価値をつけた「モノ」を輸出し、他に類例のない経済発展をなしとげてきたのである。しかし、現在今やこの目標は世界に通用できなく、ある意味での内外需要バランス型の地域づくりができるかが２１世紀のテーマの一つともいえるのである。そして、また、ある部分ではすでに欧米に追いついており、次の日本の次の時代への指標が見えにくくなっているのではないか、これからは、「日本のフロンティアは日本の中にある」と考えるべきで、先進国に学んでそれに追いつく事だけではなく、現日本社会自らの中に世界中に誇れるものをさがしだし、今後必ずくる IT 化の中で人間としての喜びをどこに求め、どんな対応ができえるかが大切であり、仕組みづくりの環境整備の確立が必要である。すなわち、「多くの人々が日本という国に住んでみたいと思える国」をつくることが、「２１世紀の日本のあるべき姿」であり、それは、「世界に誇れる暮らしぶりの実現」ではないか。

①-b［日本はどのように変わったのか］

日本は大量生産、大量消費、消費は美徳という時代の中で個性や人間性までもを見失ってしまっている事は誰もが認識している。これが、２０世紀後半の日本人の姿であった。

２１世紀がはじまった今、私達はあらためて先人達が、培ってくれた「匠」や「知恵」を再認識・掘り起こし、各個人が「日本とは、日本人とは何か」を問い直す必要がある。

日本には「身土不二」「土産土法」という生活文化がある。この文化の中にある知恵・教えを私達は見失ってきたのではないだろうか。衣食住に季節感を取り入れ、家事を子どもに手伝わすことなどを生活の中に入れることが、どうして出来なくなったのだろう。家族揃って「旬の食」を囲むことは最も文化の伝承ができ得、家族の絆ができる事でもある。また、大量生産時代の「モノ」のあふれる時代の２０世紀は［顔の見えない製品］ばかりであり、「作り手の顔が見えなかった」のではなかったか、これからの２１世紀は個々の「おこない」について「こだわり」という言葉を念頭におくべきである。私達の文化がこれ以上画一化しない為、いま、「踏み止どまり、社会の効率・豊かさについて時間をかけて問い直すことが必要な日本の姿」である。そして、いま、私達の周りには、自分のしたいことが、なんでも簡単に早くできる仕組みが数多く、便利で快適な余暇時間があるのである。また、インターネットの普及等により、「買い物スタイル」が大きく変わってしまい、地域

文化から遠ざかろうとしているのである。このようなことで、私達の生活は本当に豊かになったのだろうか、いつから、「快適や便利」ということに意識するようになったのか、意識をしたぶんだけ、心のゆとりや「モノを見る目」を失っているのである。かつての子ども達は、祖父母や父母が造るもので文化の伝承を受け継いできたのである。それは、竹馬・紙飛行機・折り紙等であり、これを使って遊び、その中で家族の絆をはじめとする自然の「とおとさ」を感じ、心を受け継いだのである。「自分で何かをやる。なにかを創る」ということはこれからの日本に大切であり、今、この精神が必要になる日本と変わってしまったのである。

以上から、目標である「してもいい競争としてはいけない競争」を明確にする。

いま、私達の周りには地球環境問題・食料問題・人口問題・エネルギー問題など多くの課題が見えていて、その解決策を見いだし実行していかなければならないのである。過去の有効実績を見ると、「してはいけない競争」をあらゆる所において実行し経済発展と共に富を得てきたのである。しかし、これからの２１世紀は、実行する過程において、従来の価値観の転換や社会システムの変化が必要となるのである。「ヒューマニズムと効率主義・働き甲斐と生き甲斐・会社と家庭・個人と全体」というような二つの価値観がこれからも併存してはいくが、どちらかを偏重するのではなく、相互に融和をさせながら「人間と自然」が調和する社会の実現が必要になってくるのである。あるものの見方ではあるが、ある人が「わがまちには大きな病院がある。」と自慢げに話したとする、この人は「大きな病院」を自慢しており決して内容を自慢しないのである。この内容というのが、「人間が人間に与える効果」であるはずのものが、規模・投資額で自慢するのである。本来の社会評価は「私の病院は、他の病院には規模では及ばないが、心温まる病院スタッフが００人いる」ということを自慢する事が大切である。これこそが、「してもいい競争」である。元来、規模投資額等での競争評価というのは、「してはいけない競争」であると誰もが認識していたのであるが、いまでは主流の考えになっている。「この地域にこどもは残るか」を考える時、この「ものの見方・考え方」が大切である。先日テレビで、ある中高生のフリートーキング番組「大人よ黙って聞け」を見る機会があった。この中である高校生の意見に「人生はお金が大切である」と主張していた。理由は「お金があればマフィアにたのんで嫌いな人を消すことができるから」と話していた。日本の教育もここまで来たか。また、「自分ではなにも考えなくてもいい、マスコミにのっていればいいのだから」という意見があった。誰がこんな時代にしたのか、私達は真剣に次の世代のあるべき姿を考えなくてはならない。「言葉での地域づくりはもういい」「学者的発想ももういい」と警鐘がなっているのではないか。今改めて「競争」という言葉の意味を真剣に考え「してもいい競争」を考えねばならない。

また、急速に民間非営利団体の組織化が進んでいる。「みんなが必要としているのに、誰もやっていないことを、命令されてやるのではなく、やりたいと言った人

が主人公になってやる。」これが、非営利団体の精神と位置付けとすると、２１世紀のしてもいい競争というのは、非営利団体の誕生へのプロセスそのものが、「してもいい競争」となるのではないか！

②　「地域おこしのネットワーク」を明確にするために「農村文化の変遷」を考察する。

②-a　　「農村文化の変遷」

日本文化は、元来農耕を基盤とした生活文化である。農耕に関する四季の年中行事や苗代作りをめぐる農耕儀礼や田の神や氏神の郷の祭りは、水利慣行を基盤としていた。また、祭祀組織には年齢に基づいて年齢集団を作り、祭りに参加することが一人前の条件とされた。氏神祭祀や講や農耕儀礼、年中行事は、信仰生活の中で村人みんなの親睦的な要素がふくまれていた。

郷祭りや講など農村文化をささえてきた基盤は、近年大きく変化していくことになる。農業を生活の基盤とする農家が急速に減少し兼業農家が増え、高度経済成長期に入ると農業が生活維持のためのすべてではなく、サラリーマンが増え農村文化を大きくゆさぶることになった。村の組織も時代とともに変わってきているが、氏神祭祀を受け継がれてきたことは、家としての誇りと人々が信仰生活を親睦活動の主たる場であると認識し、神社仏閣をこころのよりどころとしているためである。

家が参加の単位としていた伝統的な信仰生活は、時代とともに個人参加型の、村を越えた行事参加に移ることになるのである。

②-b「地域おこしのネットワーク」

近年、個人の価値観は複雑多様化し、物質経済的なものを求め、暮らし良い地域に移り住む人が多くなってきた。

氏神祭祀や講など村人が必要としてきたコミュニケーションは、家が参加の単位としてきたが、個人参加型の村を越えたコミュニケーションをもつことが必要となってきた。日常生活、なかでも青年会、婦人会、子ども会など年々衰退減少が起こっている。これは高度成長期以降、ライフスタイルの変化や社会的潮流により今の時代に即していない

ためである。しかしながら、今、人々はこれではいけないと気がついてきている。それは平均年齢が伸び、いかに生きるか、自分らしさを発揮できるかが、生きがいにつながるからではないか。自分から発信できる人が増えてきたことも確かである。

ではどうしたらネットワークができるかというと、まず地域の中で自分の居場所を作ることである。そして地域間の交流をもつことにより、人と人のつながりができ、その中から地域の良さを再発見できるのではないか。ただし、これは行政とともに行うというよりも、あくまでも個人で発信することにより、いろんな人達が集まって来るようになる。また住んでいる地域を愛し、癒しの場を作りどう生きるか、自分らしさを発揮できるとネットワークが出来ていくのではないか。

実際に行うとなると、「癒しの場とはどこなのか」という疑問が出てくる。これはその地域に住んでいる人が、一番大切に残しておきたいと思う所なのではないだろうか。たとえば、樹齢何百年という木だとしたら木の下ということにもなるし、池の場合とか山であるかもしれない。建物という観念にとらわれず、癒しの場を捜し出すことによって地域を知ることになり、人材を見つけ出すことにもつながるのではないか。

今、未来の子ども達に残しておかなければならないものが見えてくるに違いない！

③　「地域に根ざした、真の国際理解のあり方」を考察する

世界のグローバル化が進み、またＩＴ革命と日本政府も声を高くしている。近年情報による世界の距離は急激に縮まり、誰もが興味や関心のある事は、簡単にどこからも情報が入手できる。私たちの住む地域には居住する外国人が年々増えて、道路や標識にもいくつかの日本語以外の標識が目にとまり、一見、国際的な地域あるいは町に見える。

居住の目的は、仕事、学問など多様であるが果たして私たちは、彼らをどのくらい理解また関心を持って生活をしているだろうか？違和感をもったことは無いだろうか？

テレビや映画の画面を通して、物事を非常に正確に理解する事ができるようになった今日でも、表面に出ないところで、日本人以外の国の人に感覚的に、「異和感（この場合この文字を使いたい。)」を感じている人が多いのは残念なことだと思う。

国際交流グループによりそんな異文化の架け橋となるため、イベントや会合が行われているが、どれも殆ど一過性のもので、テレビや映画で見るのと同じで、匂いや温度などが、伝わってこない。つまり本当の国際交流は、相手の事を理解するのに必要なそれぞれの、国の生活文化、伝統習慣を知る事から始まると思う。

これからは他の国との交流に無関心で済むはずがないし、海外から多くの訪問者を迎える事も確実に増えている。さてそれでは、匂いや、温度が伝わる異文化交流・理解はどのような方法が望ましいのか、或いは、あるべきか？

常にお互いが平等で、共存していく事がとても大切なことだと考える。同じ地域に住むのであれば、最低限この事を心にとめて日常を過ごす必要がある。改めて国際的感覚や世界人などと言わなくても、子どもの頃から自然に意識の高い環境の中で育てば、立派

な世界人に成長すると確信する。そのような環境とは今の段階では、いきなり隣近所付き合いと言うところまでは及んでないと思う。

やはりまずは“集う場”が不可欠である。

あちこちの町屋の商店街が、大型店舗に吸収され、今まで先人により築かれた、歴史深い城下の町並みが時代の流れとともに消えつつある。同時に先人によって培われた地域の伝統習慣・文化も消えるのではと不安になる。日本人の画一化嗜好で古い事への貴重さが損なわれ、逆に城下町を訪れた外国人に、その貴重さを指摘される。経営上の問題も考慮に入れなくてはならないとしても、何とか生き残って欲しいと願わずにはいられない。

これからは改善に重点を置くのではなく、今までのものを慎重に検討し、伝統・文化習慣を伝承することは、次の世代に地域を意識させ愛着を生み出し、活性化に繋がるのではないか？地域の過疎化、商業、農業にしても過疎化が進めば、地域の伝統的な、例えば歴史に富む城下町、農村、漁村、山村の祭りなど、独特の文化が消える事にもなり不安は高まる。外国の人たちに誇れる長年培った伝統行事、習慣は、先人が早くその重要さに気づき、是非次の世代に繋いでいかなければならない。

外国の人たちと地域を共有し、文化を比較できる事は、自分の地域を見直し意識する事であり、これは真の国際交流であると信じる。日本の文化は海外に誇れる、特徴のある文化であることに誇りを持ち、維持する事の大切さを強調したい。

“集う場”が不可欠であると述べた事に戻れば、暖簾一つの“来る人拒まず”、正にバリヤフリーの町屋は、国際交流に最適な“集う所”であると思う。

国際交流グループのメンバーとは限らず、町屋の人々と居住する外国の人々が、或いは外国の旅行者が自由に集う、老若男女がテーマや日時場所を決めずに雑談をしたり、情報の交換、文化交流、生活上のアドバイスを与え合ったり、匂いと、温度が伝わる交流が可能ではないだろうか。

世界に情報を発信し、たとえ小さな町屋が並ぶ商店街であっても、外国人観光客に魅力のある地域に負けないほどの国際理解と交流を望めば、外国人観光客の誘致は難しい事でもない。

一般的に観光は景観や建築物などを対象とされる。しかし実は培った文化、例えば生け花、着物の着付け体験、そろばん、お習字、お袋の味クッキング、町並みガイド、地場産業見学等も地域観光であり、交流体験の場にもなり得る貴重な資源である。外国旅行で美しい景色をみて感動する喜びも否定できないが、それ以上にその土地の人々とのふれあいは、旅人の心に深く長く残るものである。自分達の生活する地域を愛し、誇りを持って地域文化習慣を育む姿勢は、力強い姿であり、後に続こうとする子ども達への教育だと思う。子ども達にきちんと誇れる文化を認識する教育を満たす事は、他国の文化と自分達の文化を比較させることができ、当然他の国にも関心が高まる。

生きていく地域を認識し、互いに尊敬しあう国際感覚を身につけ、共に分け合う事で更に真の地域に根ざす国際理解と国際交流となる！

④　「楽しい、おもしろいという共存」を明確にするために「キラキラする瞬間」というものを考えてみたい。

改めて、地域とはどのようなものかを考えてみると、地域の姿はまさにその地域の地形・地理風土・歴史と関わる、住み人の生き様によって形作られてきたし、今後も形成されていくものであると考える。だから、その持続のためには新たなコミュニティーの確立も必要であろう。私としてはおもしろい楽しい等々の思いをもって繋がり、拡がる、それぞれにとって"居場所・生き所"があることが大切だと考えている。

最近、環境学という名称で人様にお話することが増えてきた。たいていは、生き様を意識して話を進めるのだが、その中では，江戸時代の江戸の人々の生活を語ることが多いのだ。その江戸の人々が、それぞれの意志をはっきりもって生きてきたことを、改めて語っている。１９世紀までの私たちの先祖は、今で言う地域を中心とした地理・歴史・文化の中で暮らしていたのである。そこでは、国とはその地域であり、他国とは他の地域のことでありえた。その上で、大いに他国と交流していたという多面的な豊かさや、まさに人間として生きていた人々の時代であったことを、私自身語る中で再認識している。

さて、現在のことを考えてみればどうだろうか。時間に追われ、流行の中で真ん中を急ぎ足で歩いている私たちがいるのではないだろうか。少々疲れ気味で、自分で考えることをしんどいと感じる人が多いのではないか。みんないっしょという曖昧さの中で無意識でも、いいとこ取りをしようという雰囲気が存在することも確かであろう。しかし、「おもしろくない」「むかつく」「しんどい」、でも、「チョット違ってたい」「何かしたい」という思いも、ちらついて見えるように思うのは私だけではあるまい。だからこそ今、みんないっしょの発想をやめて、それぞれの発想をもち、その発想を互いに絡めていく過程の中で、自己実現していくことのスリル的なおもしろさに目覚める時であると思う。初めは、少しガンバッテ！。始めてみると、自己発信することが逆に、コミュニティーの一員としての自分に気づくことになり、同時に共に存することの楽しさ、豊かさを実感することにもなるのだと考える。そして、楽しい・おもしろいという感性を、何回も研ぐことによって、初めて自分の周りの関係、「環境」がみえてくるのではないかとも思

うのである。

つまりは、今、「自己実現のできる人・２１世紀を生きぬく人間」づくりを目指す「関わり」が、必要だと考える。

さて、そのための仕掛けを考えてみよう。何も特別な仕掛けはいらない。「○○体験を！」なんて、頑張らないでいい。まずは、今ある組織を借りてみよう。多くの人にとっては、今ある組織が安心感があるらしいからである。テーマは、どんなことでもいいのだが、いつものくらしの中のテーマがいい。雑談の続きで入っていける気軽さがいいと思う。大切なのは、その企画発案段階から関われる場を設定することであろう。そして、“おもしろい”“楽しい”をキーワードにして、わいわい言いながら、ステップアップしてみてはどうか。

たとえば、ステップ１（自分のまちのいろいろを、自分で見つける。）ステップ２（たくさんの人に出会い、いろんな人といっしょにそれを見つめ直す。）ステップ３（しっかり、じっくり、たっぷり、語り合い、思いをもつ。）ステップ４（その思いを公にする。実現する。ここがしんどいけど、いいところ！）ステップ５（新たな人もいっしょに、その思いを本物にしていく。何を本物にするか！大いに語ろう。）というふうに。自分の思いを声にすること、他人に聞いてもらうドキドキ感、自分の思いを人と関わる中で実現する経験は、人生の宝物である。その中で仕掛けられることで感性が澄んできて、変化にも敏感になっていくおもしろさを体験していくのではと思う。そうして個人の意志表現方法を鍛えたら、きっと楽しいだろう。子ども会で、今ある組織で、始めてみたら、学校で始めてみたら、今ある組織が生かせるはず、生きてくるはずである。

またそのためには、実に温かい評価があることも大いに役立つだろう。昔なら、近所のおばあちゃんおじいちゃんの存在である。その点、３世代が暮らす地域は嬉しい。一声かければ、そのチャンスに恵まれる時が多いのだから。しかりを受けるときも無いことはないが、たいていの場合、誰もが誉められてうれしいと思い、感性の錆を落とせるのである。そう考える。

おもしろい！楽しい！をどんどん体感させるのは、私たち大人の責任であり、まさにこの体験は、私たち大人に一番必要であるのはもちろんである。前の世代からの多くの伝承が途絶えてしまっている私たちの世代が、意識して繋がりを創っていく役割を担う時である。そして、そのことを一番楽しんでいい世代なのだとも思っている。

いろんな繋がりの中で、その人と人の共存の場・感性の共存・時間の共存の場の中にあるシャッターチャンス、“キラキラする瞬間”を、それぞれが自分自身で、またお互いに見つめたら楽しいだろう。自分たちで繋いでいくという、語り合いの中で出来つつある自分たちの心の“居場所”を、私たちから見つけていくこと。そして子ども達にももちろん探し当ててもらいたいし、近い未来の世代にもその“キラキラする瞬間”の楽しさを繋げていってもらえたらと、期待する。

⑤　「バックアップ体制」を明確にするために「対等」について考察する

未来の子ども達のことに思いを馳せることにあたり、今の子ども達を取り巻く状況はどうか、考えてみる。少年犯罪（これは、マスコミ等のせいで凶悪な犯罪の低年齢化が進んでいるように見えてしまうが、実際はそうではなく、トータルの数は確かに増えているが、殺人等の凶悪な犯罪の数はむしろ減っているそうだ。しかし、犯罪が起こっているのは事実である）、幼児・児童の虐待、学力低下・・・などなど、不安材料を数え上げると切りがない。

こうしたことにできるだけ子ども達が巻き込まれないようにする、また、万が一巻き込まれたとしても、後々のサポートなどを保障していくこと、どの子ども達もみんなが健やかに育つようバックアップしていくことが、今の大人たち、あるいは地域に求められていることではないだろうか。

では、今の大人たち（もちろん、自分も含めて）や地域にそのような力があるかどうか。ゼロではないが、まだまだ不足しているだろう。今ひとつ、自分に自信が持てない大人があまりにも多い。これでは、子どもに夢を持て、希望を持て、と言っても無理な話である。では、少しでも自信回復につながるような動きを起こせるようには、どうすれば良いのか。

まずは、ひとりひとりが、自分の力でできることは、とりあえずやっていくことから始めてみる。「えっ、そんなこと？」と思われるかもしれない。ごく当たり前のことのようであるが、しかし、いったい、どれだけの人がこのことを実行していることだろう。

「できない」と自分を落胆することなく、みんなが生き生きと活動できるような体制づくりが必要となってくる。それから、得意分野があれば、能力を発揮できるような「対等」な姿の地域づくりをもっと推進していくべきであろう。

以上の見解を定める一方策として、大切にしたいまちアンケート(2000年10月1日実施)滋賀県県政世論調査及びNPO法人天気村（草津市）、飯田市・浪合村（なみあいむら）視察により考察する。

先ず初めに、2000年10月1日開催のおうみ屋台村会場にてアンケート調査を実施した。アンケートの目的は湖東、湖南、湖西、湖北の大人と子どもに「あなたが、今後大切にしたいもの」として下記の項目を含む複数の項目を掲げ、選択してもらった。その集計の結果以下のようなものが挙げられる。

＊　原風景である琵琶湖、農村景観など。

＊　地蔵盆、祭り等地域の行事。

＊　お宮さん、図書館、公園。

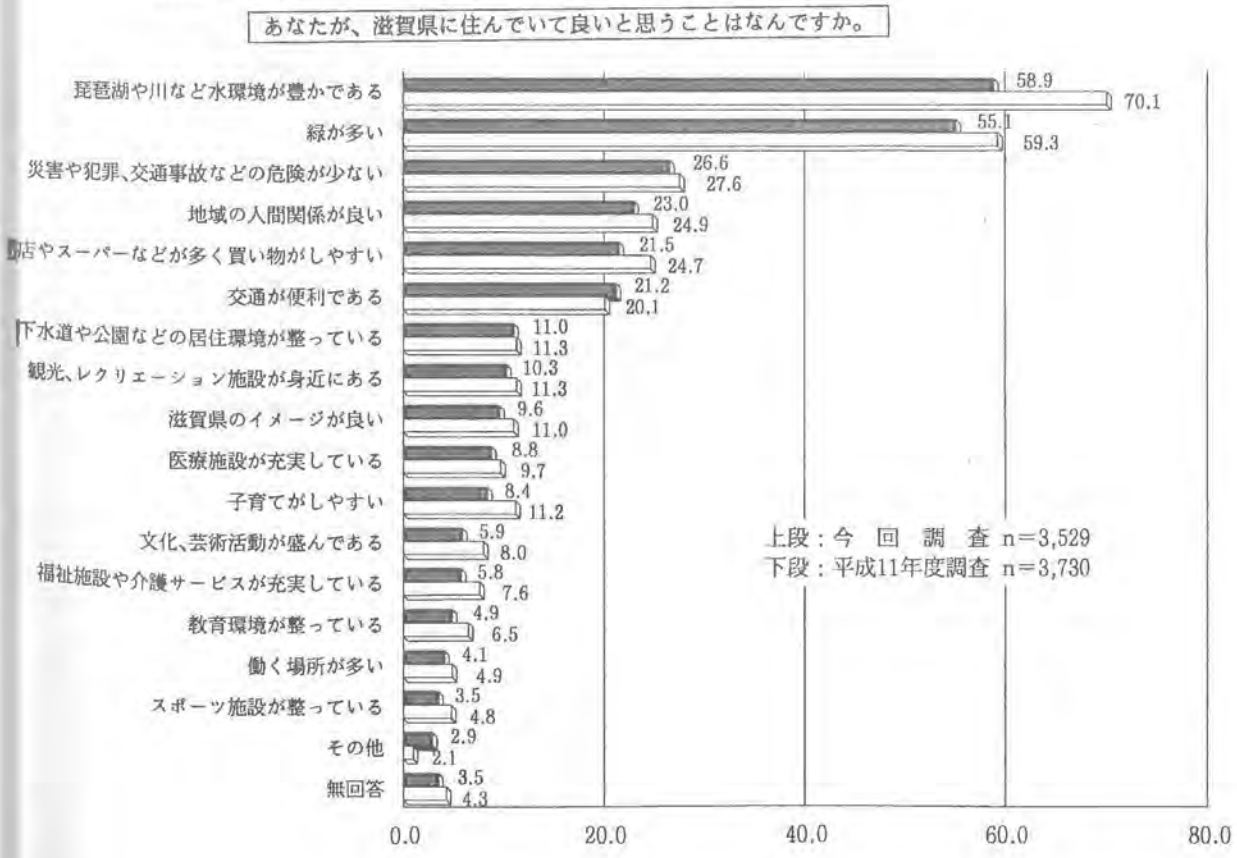
＊　子ども会、寄り合い、近所付き合い。

地蔵盆がこの中に含まれている事に注目したい。

意外にも、ある意味での神社仏閣の機能は現代社会の癒しの場となっていることが推測される。また地域コミュニティーの崩壊を危惧することから、再コミュニティーの確立のために寄り合いグループ作り、しいては近年各地域で建設されてきた図書館での新たなる癒しの場の創出が伺える。

この癒しへの人びとの想いは琵琶湖をはじめとする田園風景を欲するものと同じであると思う。

次に滋賀県政論調査・滋賀県民意識調査によると



＊　滋賀県への想いに水環境、緑が挙げられる。
＊　滋賀での生活において地域文化以外は不満が多く県土の基盤が弱い。
＊　「滋賀県に住みつづけたいが上位」をしめているが、反面「交通が不便である」についても上位である。

以上から、滋賀の環境の良さが、滋賀県への居住意識と連動しており、地域文化により魅力を感じている。

幼い頃の自然はもっと身近でありました。家の近くには木や草の生い茂った空き地があり、そこには、ビワの木から実を取って食べたりツクシを摘んだりし、近くには小魚やザリガニのいる川や昆虫がたくさんいる草地もありました。そして、取って来たザリガニやカマキリの卵から無数の子が生まれ出た瞬間の驚きは今も記憶に鮮やかであります。
木の葉の音や日の光など、自然の中には聴覚や視覚などの五感を刺激する材料は豊富あり、脳の発達に好影響を与えるのであります。
子どもが感性豊かに育つ上で［自然に触れる］体験が大切なのは疑いがないのであります。しかし、現在の子ども達を取り巻く環境を考えると身近な所にはみつけられないのであります。

子ども達の環境を考え直そうと１９８７年に子ども・大人・障害を持たないに関係なく子ども達の周辺に起きている問題解決に色々な方面から関わる任意団体［天気村］が設立された。
今回おうみ未来塾「びわこのあまち」と天気村の関係者と［子育て地域問題］のテーマを持ち懇談会を開催した結果は次のとおりであった。

＊　自然と触れ合いながら子ども達がのびのびと安心して遊べる場所が欲しい。
＊　土と触れ合い自然を慈しむ子どもを育てることを目的とする。
＊　現社会が忘れかけている大地の恵みのプロセスから、慈しむと言う感覚を持たせる。

びわこのあまちの県外研修視察を長野県飯田市および浪合村と岐阜県蛭川村で開催した。
まず、県外研修視察を計画するにあたり、家族同伴での研修視察とした。これは、これからの未来塾生が家族の協力のもと行える仕組みの一つとしての位置付けにもなった。
はじめに、長野県飯田市での視察についてであるが、研究を進めるにあたり、視点をかえて［住む人を増やすことに重点をおいた橋南第一地区の再開発事業］の視察をおこなった。
はじめに、飯田市の概況と事業概要について
飯田市は長野県南の拠点都市であり、中央、南アルプスに抱かれた伊那盆地に位置し、南北を天竜川が貫いている。人口１０万７０００人を有する城下町である。
おもな市の特徴は以下である。
＊　５０年前の大火を間逃れた建物の歴史がある。
＊　２０数回を数える人形劇フェスタがある。
＊　夏の音楽祭
＊　りんご並木が物語る文化芸術

再開発事業については、江戸時代に町屋が並んだ市街地は空洞化の波にさらされここ３０年間約１８０００人いた居住者が、約３ｋｍ離れたバイパス沿いの大型店に流れていくのに危惧を持ち再開発事業実施となった。
事業計画内容等は以下である。
＊１９９３年に飯田市が設定した区域は、約１．３ｈａ（権利者３３人）である。
（１９９７年に計画区域を０．４ｈａと０．９ｈａに分け段階的に施行する方針決定）
＊対象地域全域での着工にこだわらず権利者の合意が出来た部分から着工する手法を採用する。（全国初である。）
＊市は住民の声を吸い上げる受け皿役である。
＊権利者全員の同意・再入居の原則の確立。

その他にも多々あると考えられるが、一番重要なことは「自分も住むとなればいいものをつくろう」、権利者が当事者意識を持ち主体的に取り組んだことではないか、この考え方は、まさしく、この地域に子どもが残るかであり、事業実施計画において、一番大切な事項である。いいかえれば、「住民の合意形成を図るソフト事業を柱に無理をしないこと」ではないか。
そして、飯田市全体をとおして感じることであるが、官民協同で工夫を凝らしたワークショップを重ねて理念を学習し試行錯誤を繰り返して合意形成をしてきた手法は他に類を見ないし、何が飯田をして飯田を越えさせたのか。たぶん、「人づくり」であろう、理念を行動する人・形にする人、そして、キーパースンの思いが熱く感じる所であった。

次に岐阜県蛭川村にある「岩本の博石館」について紹介する。

この「岩本博石館」は、民間の石屋の社長が次世代へのメッセージとして、石屋の技術の粋を結集した、エジプトクフ王のピラミットを１０分の１で再現し、コレクターで所有している鉱石を展示した「博石館」を建設し、地域おこしをはじめている所である。

そして、地域の雇用拡大・特産品開発を担った地ビール事業・「ここしかない館」の地域農産物販売所の建設をはじめ、近い将来開設されるであろう「石の学校」等など、必ず来る未来の人たちへのメッセージとしてのソフト・ハード整備も着実に行っている。

また、自然との共生への視点から、有機農業・無農薬栽培にも取り組み、あらゆる視点から現代社会状況分析を行い、メッセージとして子孫に伝える仕組みづくりを計画実行している所である。

この計画実行も「この地域に子どもが残るか」への手法の一つといえるのである。

「地域」には文化を共有して継続する仕組みがあるが、この地の事業展開は新しい文化の創出による地域づくりの仕組みであり、「人づくり」であると考える。

研修地の最後として長野県浪合村（なみあいむら）「トンキラ農園」を紹介する。

人口１０００人に満たないこの浪合村は「浪合学校」として全国に有名になったところで、村内全域を「波合学校」と位置付け「ふれあいづくり」をコンセプトにしたまちづくりを展開している。今回の研修宿泊地として、この村にある「トンキラ農園」を選び中山間地の地域づくり（このまちに子どもが残るか）を体験する事とした。

まず、このトンキラ農園についてであるが、「水車で穀物をつく音色がトンキラ」ということから命名しており、村の入会地に伝統建築物を再築した、山間地のコテージ農園である。基本的には農作業を行うことを条件に宿泊許可が出るところであるが、今回の視察研修スケジュールでは時間的余裕がつくれず、ご理解をいただき自炊宿泊を行った。

このトンキラ農園の成り立ちについてであるが、村の入会地に隣接する土地所有者が出資を行い、（平均年齢は６０歳をこえる）山間地域の「農山村文化と食の伝承」を行うことを目的に誕生した施設である。あくまでも、中山間地の文化・食を意識しており、「そば」をはじめ、「りんご」・「ぶどう」・「山菜」「いわな魚」等を食べさせ、隠れた食の台所である。また、「大学のゼミの隠れた地」にもなっており、自然宝庫としての位置付けもあり、星の観察においても、国内有数地の一つである。

この、浪合村もやはり、「文化と食」をコンセプトにおき、まちづくりを展開している。「人を呼ぶのではなく、来たくなる仕組みづくり」の継続を内向きにしているのである。

以上から、アンケート調査及び県民意識調査などにもあるように、自然というキーワードが伺え、次世代には先人から受け継いだ遺産として、良質に受け渡す仕組み作りとして特定非営利法人組織が考えられる。また安心して遊べる場の創出は、都市化に伴い仕組み作りが必要であり、行政での政策課題である。

5．本研究の結論

以上のように地域考察を行っていくと、今からほんの少し前には、社会に人を育てる仕組みがあったのである。

そして、必然的に受け継いできた文化が人を育て、他に類を見ない経済成長とある意味での富を得たのである。

２１世紀に入り、人はあらためて一人では生きて行けないと悟り、地域というものを、体裁よく作ることはもうダメであると認識したのではないか。

また、これからの私達が将来的に目指すことは、世界に誇れる暮らしぶりであり、持続性のない暮らしぶりは変えなければならないのである。

それは、今までの社会や経済の流れは快適性の追及にあったが、これからは持続性になるのではないか。このことは、快適性よりも持続性を上位においた考え方を持ち認識することにより、生物の多様性をはじめとする生態系を大切にすることになるのである。

認識の原点についても再認識がいるのではないか。「人間にとって、生物にとって、良い環境、良い地域とは」とよく言うが、そのときの「人間・生物」は何を指していうのかであり、だぶん、まだ生まれていない「人間・生物」たちのことは指していなく、念頭にないのではないか。それは、よくないことである。過去も現在も未来も含まれるのであり、「何が必要かをよく見据える事」が大切である。

以上のように見つめて来ると、未来の子どもが残れる地域とは、癒しのある居場所が存在するコミュニティーであると言える。

過去 100 年近く今まで続いてきた、空く事のない利便性の追求を止め、21 世紀は人間も含む共存社会の実現に向けて、それぞれ自らネットワークを作り上げていく社会であるのだ！

連綿と受け継いできた先人の伝承文化再構築の必然性が意識つけられることにより、未来の子孫は良質な社会を伝承するであろう。

6．未来塾生が「地域づくりのしくみづくり」をできえるか！

21 世紀に繋ぐ地域プロデュサーを目指すという目的のために、この２年間、未来塾に集まった塾生たちである。

多いに語るため、塾は存在意義があったのであり、塾生から拡がるネットワークの成長を求めたのが本来の未来塾の姿であると思う。

互いの信頼関係を築く過程のなかで語れる塾の姿が見えてくるべきであった。

必然性のない地域づくりへの参画をするには、一息考える余裕が必要であり、むしろ都市化が進んでいる地域へのハード的な心の対話ができる、仕掛け作りが優先されるべきである。

今後は、“生き欲”を大いに語る未来夢塾として、立ち上げてはどうか！

そして、様々な地域にそれぞれの居場所が姿を現したら、本当に楽しいのではないか！

その為に大いに語ろうではないか！

ブレイクスルー夢デザイン

岩崎　弘一（長浜市）
井口　博之（能登川）
石田　和子（大津市）
金澤　恵美（草津市）
高木　有子（彦根市）
辻川　作男（長浜市）
原田　亀雄（多賀町）

テーマ　まちづくり経営　－金と人をどうつなぐか－

研究の概要

第１部　地域通貨を考える

第１章　なぜ今地域通貨なのか・・・・・・・・・・・50
第２章　地域通貨とは何か・・・・・・・・・・・・・52
第３章　地域通貨先進事例の研究について・・・・55
第４章　地域通貨の課題について・・・・・・・・・61
第５章　地域通貨の今後・・・・・・・・・・・・・・63

第２部　助成金について

第１章　なぜ資金が大切か・・・・・・・・・・・・・72
第２章　資金調達の知恵とは・・・・・・・・・・・・73
第３章　こんなにある助成制度・・・・・・・・・・78
第４章　望まれる助成制度・・・・・・・・・・・・・80

研　究　の　概　要

1　研究の背景

世界の経済大国になった日本。しかし、経済的な豊かさを追い求めることに夢中になり、美しい自然や景観をめでることや人との心のふれあいを培うことを忘れてしまった日本人。同時に、東京一極集中やグローバリゼーションのなかで、ややもすると地域の大切な資産から目をそらし、「大都市」を規範とした画一的なまちづくりを志向しがちであった。

しかし、地球環境問題や資本による地域の疲弊化、コミュニティの崩壊など社会の行き詰まりを打開するため、人々は今、環境や文化など市場では評価されにくいものの社会的に必要なものに着目し、地域の資源、特に人的資源を掘り起こし、人とひととの信頼に基づく支え合いの地域づくりを進めようとしている。

このような動きの中で、人とまちを元気にしてきている「地域通貨」の機能と役割が注目を集めている。

また、阪神・淡路大震災の経験を通して、ボランティアや市民の柔軟で自発的な取り組みが、社会を支えるにあたり、大きな力を発揮することが明らかになった。その後、多様で多元的な活動をおこなう市民やＮＰＯの飛躍的な発展にともない、地域づくりの新たな担い手として着目されるとともに、法整備を含むその位置づけと役割が明らかにされつつある。

2　研究の目的

本研究の目的は、次の二点である。

（１）　地域通貨がまちづくりで果たす効果と役割を明らかにする。そのため、地域通貨の歴史と現状の考察を中心に、課題と可能性を探る。

（２）　助成金制度の現状・活用の実態を調査・分析するなかで、市民・ＮＰＯが助成金を活用するにあたりどのようにすればいいかについて、資金調達の知恵や情報収集の方法、申請書作成のポイントなどを中心に検討する。

3　研究の方法

地域通貨については既に多くの図書が発行されていることから、まず諸文献の調査とともに、ＮＨＫ放送ビデオを見て地域通貨の概略について研究をおこなった。また、県内のあるシンクタンクが同時に研究を進めていたことから、各種研修会にも参加するとともに、多くの人と議論を深め、認識を共有するため、地域通貨に関するフォーラムを開催した。その詳細な内容については別冊記録集に委ねるとして、国内でも先進事例である「千葉ピーナツ」と「草津おうみ」の事例発表に加え、大学教授と金融機関系シンクタンクの研究者を交えたパネルディスカッションは興味深いものとなった。さらに事例研究として宝塚

と草津を視察するとともに、草津おうみを実際に使用している人の体験談も聞いた。

助成金についての研究は、まず、県や県内市町村の事例をヒヤリングなどで調査をおこなった。また、民間の財団などはホームページや図書を通じ調査した。申請の方法などは講演会に参加し、助成財団担当者から話を伺った。

第１部　地域通貨を考える

１　なぜ今地域通貨なのか

(1)現代の貨幣の問題点とは

(a)利子について

「利子目的の貯蓄こそが経済の停滞をもたらし、様々な地球環境問題や社会問題を起こす原因である」。１９９９年５月、ＮＨＫの番組「エンデの遺言」に込められたメッセージは、人々に大きな衝撃をもたらした。そのなかでエンデは、何の担保もなく信用のみで成立している「変動相場制」のもとで、利子が利子を生んでいく現代貨幣システムを批判し、世界の二割の人口が八割の富を独占し、発展途上国などの自然や人々の生活を犠牲にしている現実を強調していた。さらにエンデは、「必要な事は、もう一度貨幣を実際になされた仕事や物の実態に対応する価値として位置づけるべきだということです。そのためには現在の貨幣システムの何が問題で何を変えなければならないかを皆が真剣に考えなければならないでしょう。重要なポイントは、たとえばパン屋でパンを買う購入代金としてのお金と株式取引所で扱われる資本としてのお金は、２つの全く異なった種類のお金であるという認識です」と、お金の問題点を鋭く語った。

お金には普通三つの機能があるといわれている。交換手段機能、価値保存機能、価値尺度機能の３つである。お金の値打ちを図る物差しである「価値尺度機能」はさておくとして、問題は、交換機能と保存機能という相反する２つの機能を同時に持つことである。つまり、使った貨幣より、貯めたり貸付けた貨幣のほうに値打ちが増える現象が生じる。何にでも交換できるというお金の流動性を人に貸すことは、今享受できる利便性を放棄することである。利子をその利便性の放棄に対する報酬として考えるなら、利子は当然との考えもあろう。しかし、本来奪い合う性格を持つ利子は、経済的相対関係のなかで結局自らを痛めることとなるのである。貨幣を体内の血液に例えるなら、生命の維持に血液の循環が必要なように、貨幣も絶えず「交換」という形で社会に循環していなければならない。逆に言えば、循環を妨害する保存機能に対しては、それに見合ったコストの負担が求められねばならないのである。

(b)資本としての移動

ささやかな利子を期待して貯蓄した金は、地域を豊かにするではなく、資本へと変化することで、貯金した個人の思惑や地域、国さえも無関係に様々な事業に使われ、利益を求めて移動していく。１９９７年のタイの通貨危機に見られるように、今や世界の金融シス

テムは、労働の成果と自然を含む価値高い資源を、貧しい国から富める国へと移す道具となっている。世界を巡るマネーは３００兆ドル。これに対し、各国の国内総生産の総合計は３０兆ドル、世界の輸出入高は８兆ドルに過ぎないといわれている。本来人間社会を豊かにするはずの道具であった貨幣が、利が利を生む商品として売買されるマネーとなり、逆に人々の生活を苦しめるのである。

地域経済でも同様である。大型店や大企業など外部資本の存立の基準は豊かな地域の創造にあるのではなく、利益優先である。そのことはそれらの撤退で寂れたまちの例が証明している。また、全国展開のコンビニがそのまちの顔であった商店街を破壊し、地域から資本を収奪するなど、本来地域の成長の担い手であるはずの企業が逆に地域経済の循環性を失わせ、地域経済を破壊するのである。

農業もそうである。本来暮らしと一体であった農業は、農産品販売において顔の見えない全国市場を相手にし、生産と消費の循環が分断されたことから大きく変化した。今、化学肥料による画一野菜の増産主義から脱却し生態系や環境の破壊を防止するため、地域産の農産物を確実に地域が消費し、消費者と生産者が顔の見える関係を構築することが求められている。

このように、今を生きる私たちには、限られた地球と地域の資源を大切にし、外部資本に振り回されない地域の独自性を尊重した地域主導による活性化が求められている。

（２）コミュニティが崩壊する

かって日本には「結い」や「講」あるいは「隣組」といった制度があった。しかし、戦後の高度経済成長期の中でこうした助け合いの仕組みは薄れてきた。高度成長時を境に、職場第一主義により、四季おりおりの祭りや行事、食など暮らしに根付いた数々の生活文化を失っていった。こういった職域コミュニティの異常な発達や核家族化の進行により、家族や地域でのつながりが希薄化し、高齢者や子どもの世話、暮らしの環境など、本来地域や家族の助け合いで行ってきた様々なことをすべて個人が背負うこととなり、過剰なストレスや寂しさ、不安のなかで精神が荒廃し、「１７歳の殺人」など考えられない問題を生じている。今、再び人とひとの信頼に基づくコミュニティの再構築が求められている。

（３）地域通貨への着目とは

このように、グローバリゼーションがおこした地球環境問題、資本による地域の疲弊化、コミュニティの崩壊といった社会の行き詰まりを背景に、地域の独自性や多様性を尊重し、信頼に基づく支え合いの地域づくりを進める媒体として地域通貨は誕生した。

既に世界の各地では、地域通貨をもとに地域活性化にむけた様々な取り組みが行われている。地域通貨によるコミュニティの構築や経済循環の促進に加え、地域通貨の寄付による非営利団体の支援、貸付や商品売買などでの使用による職人や商店街、有機栽培農家といった地域資産への支援である。こういった方法により、たとえばアメリカ・イサカでは、

地域通貨を８００万円程度発行し、２億円以上の経済効果をあげていると言われている。

すなわち、今求められているのは、地域で必要なものは地域で生産し消費する「地産地消」の具現化や地域を基盤にした新たな産業興し、伝統工芸やまちなみの保存、そして環境保全など様々な地域が抱える課題を解決していくコミュニティの再生である。それは、従来のハードやインフラ整備に偏したまちづくりではなく、人とひとがつながりによって構築されるコミュニティを基礎にしたまちづくりである。そのためには、お金を崇拝の対象から自然や生活に密着した信頼のものとし、これまでの「プラスの利子システム」という社会に負荷をかけ、生産活動を支配しようとするシステムを変更することが必要となる。その意味で、地域資源を掘り起こし、多様な価値を認め支えあう関係を大切にして発展してきている市民主体の地域通貨が、地域活性化の呼び水となる可能性に大いに着目すべきではないだろうか。

2　地域通貨とは何か

（1）歴史と背景

（a）世界の地域通貨

地域通貨はLocal currencyを訳したもので、1983年から世界の各地で誕生した。

例えば、地域内の経済循環を構築するために、カナダのバンクーバーコモックス地方でマイケル・リントンが始めた「LETS(Local Exchange Trading System)」やコミュニティの再構築を目指して1985年から始まったアメリカの市民運動家エドガー・カーン博士により考案された「タイムダラー(Time Dollars)」、1991年「富を地域で循環させよう」とコミュニティ活動家のポール・グローバーを中心に導入された「イサカアワー」。そして、カナダ・トロント市の中心部の一角(セントローレンスマーケット周辺)で１９９８年から流通している「トロントダラー」(導入時からトロント市長が公の場で支持を表明)などがある。なかでもトロントダラーは、100以上の商店などで使用することができ、商品券とは違い一割相当額がコミュニティ機関を支援する目的に活用される仕組みになっている。

地域通貨の起源は、イギリスのチャネル諸島のガーンジー島で1816年に発行された「State Note」である。ナポレオン戦争によって被害を受けた島が、利子のつかない紙幣「State Note」を発行することで、建物や水路などの整備にあたって島民の労働の対価として支払うなど島の建て直しを図った。また、ロバート・オーウェンが、1832年から1834年までにおこなった「労働貨幣(Labour Exchange Notes)」も地域通貨の一種だと捉えることができる。「労働貨幣」とは、イギリスのロンドン・バーミンガムなどで自ら生産した生産物を労働交換所に持ち込み、財の生産に要した労働時間に等しい「労働証明書」を受け取るというシステムだった。

1916年にシルビオ・ゲゼルにより「自然的経済秩序」が発刊された。ゲゼルは「お金は老化しなければならない」というテーゼを立て、「お金は経済活動の最後のところでは、再び消え去るようにしなければならない」とも言っている。例えていうなら「血液は骨髄で作られ、循環し役目を終えれば排泄される。血液の循環により初めて肉体は機能し、健康が保

たれる。お金も経済という有機組織を循環する血液のようなものだ」と主張した。24 歳でアルゼンチンに移住し、実業家として成功したゲゼルは、通貨政策の混乱により経済がインフレとデフレを繰り返し、国民生活が破綻に瀕している様子を目の当たりにし、貨幣制度と社会秩序とは深い相関関係があると考えた。

そこで、ケインズの「一般理論」の中でも高く評価されている「自由貨幣」という新たな貨幣制度を提案した。自由貨幣運動の盛り上がりとその影響を受け、1930 年代の世界恐慌下で雇用対策と貨幣不足の解消のため各地で地域通貨が発行された。その中のひとつが 1931 年深刻なデフレ下のドイツ・ジュヴァーネントルヘン地方において、貨幣保蔵が引き起こす不況に対抗するため発行された地域通貨「ヴェーラ」である。それには、循環を促すため、通貨として保有した場合に価値が実質的に減価する機能が付け加えられていた。ヴェーラは法定通貨と額面上等価で発行されるものの、額面どおりの価値を維持させるために毎月、紙幣の 1%に相当するスタンプを交換所で購入し貼付する仕組みになっていた。これはある種のマイナス金利である。一般的に消費を喚起する目的でマイナス金利政策を実践しても、貨幣として退蔵(タンス預金)され、マイナス金利の適用を容易に逃れてしまうため、その実効性がほとんど期待できないと言われている。しかし、ヴェーラの場合は発行も流通も限定された通貨であったことから、却って循環を促進したと言われている。

1932 年にケインズの「一般理論」を世界で最初に応用したのがオーストリア、チロル地方のヴェルグル(woergl)である。そこでは、当時 5000 人しかいなかった町の 400 人が失業していた。通貨が循環しないことこそが不景気の最大の原因だと考えた当時の町長ミヒャエル・ウンターグーゲンベルガー(Michael Unterguggenberger)は、1932 年 7 月、町議会で地域通貨の発行を決議する。そして、町が事業を起こし失業者に職を与え、「労働証明書」という紙幣を与えた。「諸君、貯め込まれて循環しない貨幣は世界を大きな危機、そして人類を貧困に陥れた。労働すれば、それに見合う価値が与えられなければならない。お金を一部の者の独占物にしてはならない。」この目的のために、ヴェルグルの「労働証明書」は作られた。「貧困を救い仕事とパンを与えよ」と裏面に書かれたこの紙幣は、非常に早い勢いで町の取引に使われるようになり町の税収も増えた。重要なことは「回転することでお金は何倍もの経済活動を行える」という事実であった。この場合もお金が回ったのはマイナス利子だったからである。すなわち、お金は月初めにその額面の 1%のスタンプを貼らないと使えない。言い換えると、月初めごとにその額面の価値の 1%を失ってゆくため、手元にずっと持っていてもそれだけ損をするので、誰もができるだけ早くこのお金を使おうとする。この「老化するお金」が消費を促進することになり、経済が活性化したのである。

(b) 日本の地域通貨

17 世紀初頭、伊勢神宮の神職に就く土地の豪商が預かり手形として発行し、自治組織「三方会合」が管理にあたった「山田羽書」に日本の地域通貨の原型をみることができる。「山田羽書」は日本の紙幣の元祖ともいわれ、その後、江戸時代に幕府正貨の慢性的な不足を背景に商人が中心となり、244 の藩札が発行された。これらも地域通貨の一種としてとらえることができる。

近年では、1973 年に始められた「ボランティア労力銀行(大阪代表　森脇宣子)」や 1981 年東京都練馬区にある「暮らしのお手伝い協会(1996 年閉会)」、加藤敏春氏が「エコマネー：ビッグバンから人間に優しい社会へ(1998 年 9 月日本経済評論社発行)」で提唱した「エコマネー」、さわやか福祉財団が推進している「ふれあい切符」のようなものもある。1991 年に生活クラブ生協神奈川は「バーターネット」と呼ばれる実験を行い、結果として、175 人の参加組合員の中で、物を消費するだけでなくお互いの労働を交換し合うことに取り組んだ。

1999 年に入って、千葉まちづくりサポートセンターの「ピーナッツ」や地域通貨おうみ委員会(当時は草津コミュニティ支援センターおうみ事業部)の「おうみ」が発行されるなど各地で実験や導入が図られるようになった。

（c）地域通貨の特徴とは

こういった地域通貨には次のような特徴がある。

① 国の信用力によるものではなく、顔の見える地域内において人とひととの信頼関係を前提として用いられるものであること。

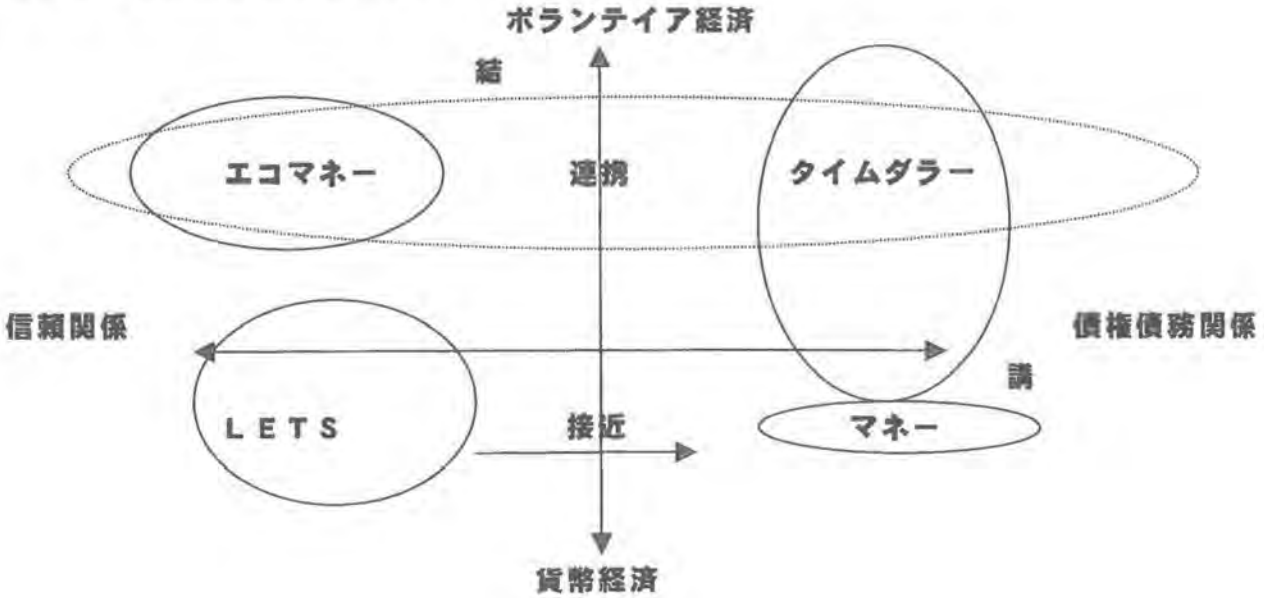
② システムとして利子というものは存在せず、信用創造機能（金融仲介機能）はないこと。

③ 富の蓄積機能はなく、投機の対象としたり貯金しても何の意味をもたないこと。

④ 市場を介さず、人とひとが直接に顔の見える限られた地域や特定の範囲において、生活に必要な財やサービスなどと交換されるものであること。

⑤ 国民通貨との交換性はないこと。

また、各地域通貨は、コミュニテイの再生に関しては共通であるが、エコマネーの位置づけを縦軸にボランテイア経済か貨幣経済か、横軸に信頼関係か債権債務関係かをとって分類すると次のとおりとなる。



また、地域通貨の発行方法と特色をまとめると次のとおりである。

紙幣型	① 匿名性があり誰もが現行通貨と同じ感覚で使える ② 個人間取引の際に簡単にやり取りができる ③ 紙幣発行の条件の明確化、発行量の管理が必要
通帳型 （交換リング方式）	① 個人の信用保証の連なりにより構成される ② 第3者が信用創造することはない ③ 元手がゼロからでも交換が始められる ④ 口座残高などの管理が必要 ⑤ 通帳は本人の自主管理
小切手型 （手形方式）	① 主発行で自分が責任を取る ② 範囲はとどまらない ③ 期限はない

3　地域通貨先進事例の研究について

（1）宝塚エコマネーの実験について

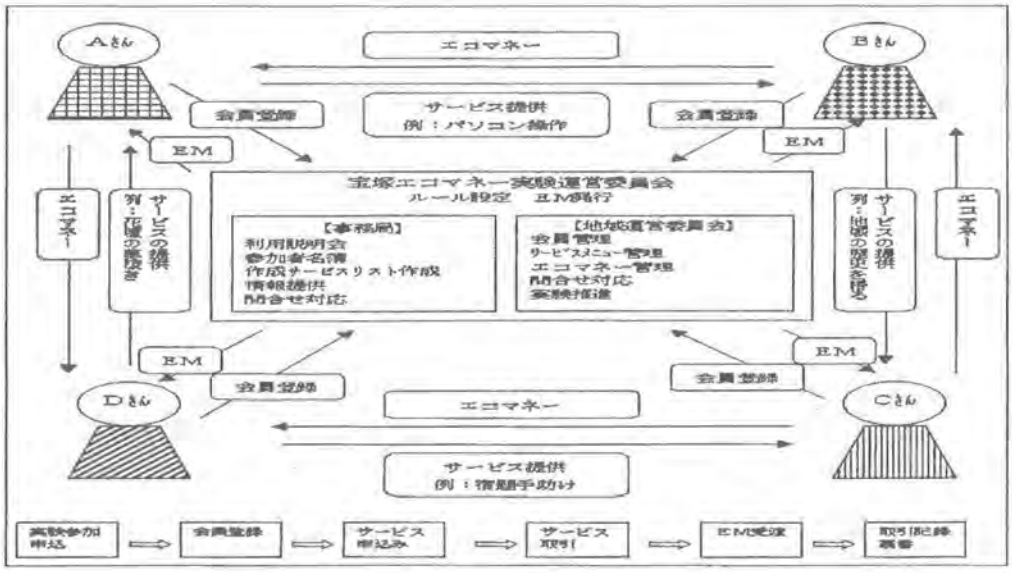
お話を伺った方　　宝塚ＮＰＯセンター事務局次長　山本　麗子さん

（a）実験の背景と目的

宝塚市では、市内全域の小学校単位でまちづくり協議会が設立され、これまで市民主役によるまちづくりが積極的に展開されてきた。しかし、新住民と旧住民の構成比率によって地域のあり方に大きな差が出ていたり、地域ごとでまちづくり活動への温度差があるなどの問題を克服するために、多様な人材の参画を促し、協議会を充実することが大きな課題であった。そこで、地域で気軽に声を掛け合える関係づくりを促進するため、日本各地で試みられているエコマネーを宝塚に導入する実験が行われた。

（b）宝塚エコマネーの概要

発行主体	宝塚エコマネー実験運営委員会
呼称	ＺＵＫＡ（づか）
単位	1000ZUKA、100ZUKA（ありがとうの気持ち） 時間基準(30分＝1000ZUKA)
配布	実験開始時配布枚数 1000ZUKA－10枚、100ZUKA－10枚
交換	破損時、裏書き満了時
再交付	エコマネーの手持ちがなくなった時(10枚)
兌換	円との交換は不可
裏書	サービス受渡し時：日時、名前、会員番号、サービス内容
流通範囲	実験参加まちづくり協議会のみ



実験期間
２０００年８月１０日～同年１０月１０日

参加団体
６団体
会員数１８９人

(c) 特　色

宝塚市は、「スマートガバメント」という政策目標のもと、ＮＰＯ活動やエコマネーの導入など、市民が公益を担う仕組みづくりに対し、積極的な支援を行っている。そのため、今回の実験も市の強い意向が感じられた。たとえば、市内全域のまちづくり協議会を通じ、市内全域に一斉かつ平等に参加を呼びかけられたことや、エコマネー運営委員会に市が加わっていること、サポート組織には、市以外にＮＴＴ、野村総研、日本システムなどが参加していることなどに表われている。

また、今回の特色の一つは、サービス運営面でＩＴ化を進めたことである。これは、「達人リスト」などのサービス情報を参加者がリアルタイムで検索、閲覧、予約、決済ができるよう、ペーパーと併用した情報通信システムとして構築されたものである。また、パソコンを活用できない人のために、キヨスク端末が市内公共施設５箇所に設置されている。

宝塚エコマネーの交換対象は個人間のサービスのみで、物流は非対象である。また価値評価はすべて時間系で、「３０分＝１０００ＺＵＫＡ」とされている。発行は無償で、１０００ＺＵＫＡと１００ＺＵＫＡを各１０枚ずつ参加者全員に交付されている。また、流通範囲は、参加したまちづくり協議会内とされている。

(d) 感　想

参加者からは、「使うのが楽しくなったこと、市民相互の能力を通じた仲間づくりが可能になったこと」などのプラスの評価があったそうである。また、参加者同士出来る能力を通じた連帯感が生まれたことやリタイヤ人材、潜在人材など多様な人材を発掘できたことも大きな効果とされている。一方、マイナス評価として「手続きが複雑、近所に会員がいないのでサービスが受けられない、知らない人に頼むのは勇気がいる、サービスの需給調整機能がいる」などの声があったとのこと。また、ボランテイア経験の長い方の一部に

は、今までなくても出来たことにあえて使う意味が分からないことや金額で評価される事への抵抗があったと聞く。

今回の宝塚市の場合は、実験であることから、初めから市内全域のまちづくり協議会に参加を呼びかけられたが、立ち上げとして地域共同体のみへの着目でよかっただろうか。環境や福祉などの市民活動団体から進めるのも定着をめざす一つの方法ではないだろうか。

運営委員に企業・行政・市民が参加していることは、パートナーシップの構築には画期的である。しかし、専任１名、ボランティア２名といった事務局体制やＩＴ化経費などのコストを今後、誰が負担するかは大きな課題である。

また、地域でつながりの持ちにくい人への対応やサービスの需給調整、地域通貨の円滑な循環、クレーム処理などをおこなうため、コーデイネーターの育成・設置は不可欠であると感じた。

（2）千葉ピーナツについて

事務局所在地	千葉県千葉市稲毛区 1-21-16　CASA FELICE203 号
運営主体	千葉まちづくりサポートセンター
発行単位	Pea：千葉県の特産品ピーナッツ(Peanuts)をもじったもの。 1 時間の働きを 1000Pea とする。
活動開始時期	平成 11 年から試行
活動範囲	当初 NPO の内部だけで流通する紙幣を発行していたが、現在は新しく商店会を巻き込んだ活動に拡大するため準備実験中
会員数	NPO 会員 60 名から開始。現在仕組みの再編中につき未定。
サービスの仕組み	当初は紙幣を、NPO 活動に参加したボランティアに対して発行し、流通を計画した。現在の方法は、Peanuts Club 会員（Amigo：仲間）が発行する「大福帳」を媒体として 1. 町内活動への参加者には 1 時間 1000Pea を支払う。 2. 商店会の「仲間」である商店は、定価から一定の割合(任意で設定)を Pea で受け取る。 という交換によって Pea を循環させようとするもの。
記録方法	「大福帳」という一種の通帳に財・サービスの提供者と被提供者の両者がプラス・マイナス両方を記載。
特徴	「大福帳」に期限を設け、さらにプラスの蓄えは 1 ヶ月で 1%目減りさせて、新しい「大福帳」と交換する。取引ごとに「アミーゴ」といって握手してスキンシップを高める。プラスの蓄えを 1 ヶ月に 1%目減りさせるので、交換の活性化が期待される。
今後の課題と思われる点	「仲間」と呼ばれる商店会会員をどれだけ獲得できるか、また、Pea を稼ぐ機会をどれだけつくれるか。

ＮＰＯ法人として、まちづくりの支援事業に取り組んでいる千葉まちづくりサポートセンターが、商店街と地域の活性化を目指して始めたものが地域通貨ピーナッツである。千葉県特産のピーナッツにあやかって、通貨の名称を「Pea（ピー）」とし、その単位１Pea を１円とする仕組みとなっている。

会員には、町内でのボランティア活動などをおこなうことに対し、サポートセンターから１時間１，０００Pea が支払われる。この Pea が、地域通貨の加盟商店では割引券として使える仕組みになっていて、各お店が任意に表示した割合の範囲内で価格の一部を Pea で支払うことができるのである。たとえば、お酒２，０００円のうち５％の店頭表示なら、１００円相当を Pea で支払い、残り１，９００円を円で支払う。この場合、商店主の通貨台

帳には「プラス１００ピー」、利用者のそれには「マイナス１００ピー」と記入し、お互いに相手の名前の所にサインをして「アミーゴ」と言って、握手をして取り引きを終えるルールとなっている。いわば、スキンシップを楽しむわけである。

形態としては、大福帳（通帳形式のカード）方式で、最初はゼロから始まる。カードが一杯になったら、裏面がハガキ形式になっており、切手を貼って運営事務局に送る。手数料を取って回収したものをまた送り返す。地域で「ピーナッツ」を流通させるため、サポートセンターがブースターポンプの役割をしている。

「ピーナッツ」の特色は、使用の用途が限定されていない。また、「ピーナッツ」はものを計る尺度、交換するための手段であるため、財を貯える手段は持っていない。したがって月に１％ずつ減価し、早く使い流通を促進する仕組みになっている。ちなみにこの減額分は運営経費に回るとのことである。

（３）草津「おうみ」について

（ａ）「おうみ」誕生の経緯

滋賀県草津市のＪＲ草津駅から歩いて５分のところにボランティアグループや非営利組織の活動拠点「草津コミュニティ支援センター」がある。この支援センターは、草津地域の様々な市民活動をサポートする目的で1998年５月に、全国でも珍しい「公設市民営」として設立された。

「公設市民営」のため開設当初から、市民による自主運営を成立させるため、登録団体（24団体）はすべて共同事務局としてセンターの運営当番などを義務づけスタートしたが、なかなか定着せず、センターはいつも閑散とし、玄関やトイレは汚い状況が続いた。

こうしたなかで、センターの運営をスムーズにしようと導入されたのが「おうみ」であった。こまごまとした事務から清掃まで、今まではすべて登録団体の会員たちのボランティアで行われてきた。その労力に対し「おうみ」を支払うことで、自発的なボランティアをさらに促そうという発想である。たとえば、センターの掃除をしたら「4おうみ」、受付窓口業務をした場合は「5おうみ」という具合にである。

そして、この「おうみ」でセンターの利用料金を支払うこともできるようにした。このねらいは、功を奏して、センターには人が集い、コミュニケーションが図られ、利用率も高まる結果となった。

（ｂ）「おうみ」の仕組みと実際

センターの利用料金制度からスタートした「おうみ」は、目的や用途に応じて、電子おうみ、紙幣おうみなどの形態も試行錯誤を重ね、現在、名刺サイズの「コミュニケーションカードおうみ」へと新生された。

発行主体も2000年10月から草津コミニュティ支援センターおうみ事業部から「地域通貨おうみ委員会」へと移行・独立した。

①　コミュニケーションカードおうみの形態

現在、「1おうみ」と「10おうみ」の2種類が発行されている。

1おうみ・・・琵琶湖とカイツブリ(牛乳パック再生紙)

10おうみ・・・草津川の桜と近江富士（葦紙）

《表》には、おうみは「お金」ではありません。

コミニュテイで循環することによって、環境・伝統・文化、
そしてボランタリーな活動など、社会的に必要とされながら、
市場では成り立ちにくい価値を支えていく道具です。
あなたの「ありがとう」の気持ちを形にしてみてください。

と、「おうみ」の理念が記されている。

《裏》には、「おうみ」の利用歴が記録できる。いつ、誰から、どんなサービスを受けたのか、を記入することで、人とひとの「こころ」が寄合うミニ伝言板のような温かな心配りがされている。いずれも、環境負荷にやさしい大豆インクを使用しており、ここにも発行主体のこだわりが見える。

② おうみの使い方とおうみの流通を促すために

おうみは換金できないが、1おうみ＝100円の社会的価値に相当する。おうみの発行は、おうみファンドへの寄付（100円の寄付＝1おうみの換算）によってのみ行われる。
おうみの使い方は2通り。

○個人間のサービスのやりとり

○地域通貨おうみ委員会の企画・事業への参加

おうみの流通・循環を促進するためのさまざまな工夫をいくつか紹介する。

(ｱ)達人リストへの登録とサービスのやりとり

入会の際、メンバー登録と同時に、達人リストなるものを作成する。たとえば、「パソコン教えます」とか「家の掃除します」など自分の特技・得意分野、他のメンバーに対して提供できるサービスと他のメンバーから援助を受けたいサービスの双方をリストにする。「お年よりの話相手します」や「おふくろの味分けてください」などユニークなメニューも並ぶ。これらは、すべて一覧表にし公表され、その後は、メンバー同士の話し合いで値段を決めてサービスをやりとりする。

(ｲ) メンバー同士の出会いの場をつくる

毎月開催されるおうみマーケットでは、家庭菜園で取れた野菜や手作りのケーキ・リサイクル品などの交換・買い物を楽しむ事ができる。また、ワークショップへの参加なども体験できる。

(ｳ) 地域の農業を支える

地域の農家と提携し、低農薬で安全な野菜を「おうみ」で購入できる。その代わり農作業が忙しい時期にメンバーはボランティアで農家を手伝う。その際、農家は作業のお礼に「おうみ」を払う。まさに、生産者の顔と消費者の顔が見える関係である。
そして、規格品外が中心だが、野菜はほぼ毎日提供されていることからみても、少なからず、地域の産業を支え、励ましている。

（エ）地球にやさしいリサイクル《循環》システムの輪に入る

環境分野でのおうみの活用は、今後県内環境団体と連携し、次のようなことに取り組んでいく予定とのことであった。

市民グループや消費者が集めた牛乳パックを環境問題に熱心な団体である、環境生協に「おうみ」で買い取ってもらう。そして、それを原料として作ったテイッシュペーパー「おかえりテイッシュ」を「おうみ」で買い取ることにより、相互のリサイクルシステムを構築することなどである。また、地域の共同作業所で梱包された廃食油石鹸「びわ湖石鹸」購入へと新たな展開も始まっている。

このように、メッセージ性・社会性の強い商品を取り扱い、循環させることは、「おうみ」の信頼性と自立性を高めていくことにもつながっている。

（オ）賛同事業所の拡大と「おうみ貸し出しシステム」の新設

事業所の社会参加やエコロジー志向の流れの中、「おうみ」の理念と志を応援しようとする事業所も現れてきた。

i　滋賀京阪タクシーが、料金精算時のサービスとして「おうみ」を導入

ii　草津シネマハウスで映画入場料割引サービスを開始

加えて、団体への「おうみ貸し出しシステム」が新たに実施される。「おうみ」のシステムを丸ごとその団体の運営・運用に使える権利を１年間貸し出す。ただし、「おうみ」のミッションにそぐわない場合は不可となる。団体間のより高いモラルと信頼性が求められる取り組みである。

このシステムの導入によって、大津・守山市内にまで「おうみ」のネットワークを拡大することとなる。

（c）「おうみ」参加者の声ヒヤリング

【Ｔさん】

①参加のきっかけ

草津コミュニティ支援センター主催の講座を受講するなか、人間関係ができ参加した。

②参加の状況

○マッサージ・名刺印刷・タイプ打ちを達人リストに登載

○現在８５おうみを保有。これは会員の平均保有額より少し高い額である。

③おうみを使用するケース

○アンケート集計のサポート・会議室使用・コーヒー

○おうみマーケットでの使用

④良かったこと

○人間関係が広がった。

○参加者の中に信頼感が生まれた。

○ユニークな取り組みで、全国から注目を浴びた。

⑤課題

○知らない人には依頼しにくい。

○お願いできる人は、みんなの依頼が集中し多忙となるため頼みにくい

○使う場が少ないため、あまり循環できていない。

○通常のサービスや売買では使えないので一般の人に受け入れられない。

○円との共存をどうすべきかわからない。

【Nさん】

①参加のきっかけ

○草津コミュニティ支援センターの仕事を担当することとなり、その対価として受け取ることから関わる。

②参加の状況

○センター業務から得ている。

③おうみを使用するケース

○チラシ配布のサポート・食事作り・団体への寄付

○おうみフリーマーケットでの使用

④良かったこと

○人間関係が広がった。

⑤課題・意見

○仲間を増やさないと一部の循環で留まる。

○達人リストの頼み勝手が悪い。

○あくまでボランティアツールであり、ミッションを理解する人を増やすべきで、その趣旨を超えた単なる量的拡大には反対だ。

○子育てや環境など特定の理念のもとで運用すべきだ。

4　地域通貨の課題について

地域通貨の実践的な面での基本的な課題として、

（1）発行基準と日常的な管理をどのようにするのか
（2）物質面と人材面の循環をどう保つか
（3）地域資源との協力をどう図るか
（4）運用主体と運営方法をどう確立するか
（5）ミッションに合ったシステムをどう整理するか

などがあるといわれている。そのうち、特に検討したことを以下に述べる。

（1）運営主体は誰がふさわしいか

多くのもののなかでも、とりわけ通貨には永続性と信用性が必要である。官の持つ特色

は組織としての継続性と性格としての公益優先性である。したがって、長いスパンの継続性や信用性からすると、行政が地域通貨を運営したほうが効果的かも知れない。しかし、国が持つ権威でなりたつ名目通貨「円」の限界を克服するため、信頼と連帯の証として各地で地域通貨が誕生した経過からすれば、行政による「上」からのやり方ではなく、地域通貨を通じ理念型の新しい社会を切り拓く主体が担うことこそ最も効果があるといえる。

一方企業はどうであろうか。世界的には企業が発行する地域通貨もある。しかし今日、社会的責任を厳しく問われる企業においてさえも、その存立基盤はまず企業利益の優先である以上、企業利益に繋がらないことを期待するのは無理がある。また、経済のグローバル化にみられるように、いまや国すら無関係に世界を動く資本に対し、市場原理を離れた共生の理念を望むのは難しい。

その意味で運営主体は、地域通貨の意義を理解し、地域通貨で新たな社会を構築していこうとする意志を持った市民主導による行政・企業等が連携したＮＰＯ等の市民活動団体こそ最もふさわしいと言える。しかし、そのためにはたとえば宝塚市の実験にもあるように、参加脱退者情報や「達人リスト」などのサービスメニューのリアルタイムなメンテナンスやメニューリストの電子化、情報検索方法の工夫などに加え、それらをおこなう人件費など、事務機能を確実なものとするためのコストの捻出が課題となる。

（２）どの範囲が適当か

地域通貨の流通は、どれくらいの範囲がふさわしいのか。信頼に基づく範囲でのみの使用なら、その空間は閉鎖的とならざるを得ない。逆に匿名性が強くなると地域通貨は単なる国家通貨の補完物となり、信頼や共助といった本来の意味を失う。

ところで、地域通貨は簡単に普及するのだろうか。「信頼や連帯を理念とする新しい社会の枠組みを作ろう」との意識を有する人にはいいが、地域通貨に「円」と同様の考えしか持たない人にはそう簡単に受け入れられないであろう。

また、受け入れられたとしても実際うまく循環するであろうか。「草津おうみ」の例からすれば、達人リストに名前があがっていても実際は活用できないでいる人が、半分以上いるとのことで、顔見知り以外での循環はそう簡単ではない。したがって、循環させるためには会員相互のニーズを調整するコーディネーターの設置や循環を促す仕掛けが必要となってきている。

地域通貨の大きな役割の一つは、先進事例で明らかにされたように「コミュニティの再生」である。ある意味でコミュニティとは無償の助け合いが行える仲間が集まる場である。宝塚の例にあるように、ボランティア精神の強い方には、金額換算システムへの抵抗やあえて通貨を使う根拠を見いだし得ないのも事実である。

したがって、当面、地域通貨はあまり親密でない人とひとを繋ぐものとして、その目的や利便性によって、一つの関係に固定されるのではなく、多様なグループが重なり合った形で使用されていくと思われる。その意味で真にコミュニティが再生されたなら、地域通貨の役割も終了するものとも言える。

（3）地域通貨で問われることは

地域通貨は、通貨の三機能のうち交換手段に特化したものである。そのため、参加した者自身が通貨の循環範囲のなかで「何が提供できるか」「どう信用していくのか」を明らかにしなければうまく機能しないと言える。そうでないと通貨が特定の者に偏在するいわゆる「通貨長者」問題が発生する。地域課題や自己目標を明確にし、積極的に仲間にコミットメントして、頑張る人に地域通貨が集まりすぎて、何も出来ないと思いこみがちな人や積極的に仲間にコミットメントしない人には地域通貨の恩恵が行き渡らないであろう。また、千葉ピーナツのように、商業振興に地域通貨を使う場合にあっては、消費者のニーズからかけ離れた商品はいくら地域通貨を使っても売れないであろう。こだわりがないものやきちっと社会貢献を訴えることが出来ない商品や商業者に対して、地域通貨が効果的とは思われない。

このように、地域通貨システムは、経済的利益のみの追求や組織の肩書き、財産・地位に関係なく、自らが属する共同体をどう考え、どのように関わり自分は一体何が出来るのかを問う、いわば「個人の概念」や「人の生き方」の確立を求める過程であるとも言えよう。

（4）その他の課題について

その他地域通貨が持つ法的な課題は次のとおりである。

- 紙幣類似証券取締り法
- 前払い式証票の規制などに関する法律(ﾌﾟﾘﾍﾟｲﾄﾞｶｰﾄﾞ法)
- 出資の受入れ、預り金及び金利の取締りに関する法律
- 消費税
- 労働法や公正取引などに関する法律
- 税処理の必要性

5　地域通貨の今後

（1）地域通貨のながれ

地域通貨は、1980年代以降になると世界各国で約2000以上、国内でも約30～50の地域で導入されるに至っている。アメリカでは、「納税のためのドルとのレートをはっきりさせ1ドル以下の価値のお札をつくらない」というルールさえ守れば誰だってお札を刷っていいのだそうだ。イギリスではブレア首相自らがLETSを推進し、オックスフォード市のそれに対する財的・人的支援は際立っているといわれている。また、フランス(SEL)では地域通貨の発行にあたり、政府がコストの20%を負担する制度があると聞いた。ニュージーランド、オーストラリアでも政府機関が設立を積極的に支援しており、地方自治体がLETSの可能性に着目しその育成に力を入れ始めている。さらにタイではカナダ政府の資金援助によ

り、現在地域通貨の実験プロジェクトがはじまっているという。日本ではどちらかといえば財やサービスの交換というよりも、助け合いや福祉活動のためにウエートがおかれていたので、現在でもその傾向は強いようだ。東京大学のある教授は「確かに非貨幣的な相互扶助関係がすでにあるところに貨幣的関係が導入されると、かえって既存の人間関係が崩れる恐れが出てくることは否定できないが、逆に過疎化の進む中山間地域のようにコミュニティの存続すら危ういところでは、すでに相互扶助関係が随所で破綻しており、むしろ地域通貨を導入することで互恵のシステムを復活させることができるだろう」という。

（2）地域通貨への期待とは

これからの地域の発展は、これまでの近代化論にみられたように、経済を動かす要因たる私利を追求する経済人におくのではなく、人権や生存権を大切にし、真に豊かな暮らしを送る生活者のあり方に置くべきであろう。

考えれば既に人々は、これまでのように経済的利益や効率を優先する社会を拒否し、自然環境との調和や文化遺産の継承に重点を置き、多様な価値観を認め交流する共生社会を目指そうとしている。何故なら、人間の幸福は物財の増大にあるのでなく、自立に富む精神の豊かさ、見返りを求めぬ他者へのいたわりと人により生かされる自分の心の中にこそあるからである。その意味で地域通貨は、これからの社会においてどのような役割を果たすのであろうか。

多くの事例では、

福祉分野・・・話し相手など心のケアといった介護保険の対象となっていないサービス提供・子育て支援・障害者外出サポートなど

環境分野・・・ごみのリサイクル活動・環境清掃ボランテイア活動・森林保護活動など

教育文化・・・ボランテイアパソコン教室・伝統芸能の継承・保存など

といった多様な分野での使用が進んでいる。

また、１０月１日に開催したフォーラムへの参加者アンケートから地域通貨への期待を拾ってみると、次のとおりである。

○第１次産業との連携

○自治体だけでなく、企業・市民が連携した廃棄物関係に使ってはどうか

○コミュニテイビジネスの立ち上げのためのファンドとして使う

○酒ビンのリユースシステムに活用する

○身近な人が持つささやかな能力を活用するために必要。老人の生きがい対策などにもいいのではないか

○子ども本位にすればいいのでは

○歴史文化や環境の保全や自治会活動と連携させると良い。

回答の多くが助け合いや地域の再生、活性化、環境問題の解決といったことへの期待であった。深刻化する地球環境問題への対応と地域の活性化を同時に進めるためには、経済的に自立した地域社会での生活とそこでの経済循環を構築することが求められる。同時に欠かせないのが資金の循環である。その意味で、地域通貨は新たなコミュニティビジネスを生むのではないだろうか。

コミュニティビジネスとは、「地域内を中心に、地域の住民によって、地域の課題や福利厚生の充実に向けて展開される事業」のことである。このコミュニティビジネスに期待できる効果は、①地域内での密接なつながりを生むこと　②共生型社会の理念による新しい雇用の確保により地域を活性化すること　③地域力を高めることなどである。

これまで、市民活動団体は多くの場合、「金銭所得＋心の満足度」という対価の範囲で活動するに留まったため、新たなサービスの提供を継続させる資源の獲得は困難であった。地域通貨は、この心の満足度を数字で明らかにするとともに、顔の見える範囲でのクローズな通貨であり、地域内で生産されるサービスを交換する手段であることから、コミュニティビジネスの理念と合致する。

具体的なコミュニティビジネスの支援策の一つに、地域通貨による寄付が考えられる。ビジネスを立ち上げようとする者に地域通貨で出資や寄付を行い、必要な経費を地域通貨で支払うことで新たなビジネスが生まれる。また、すでに横浜や伊丹などで市民バンクが登場しているように、利子のつかない地域通貨を基金に融資することなどでコミュニティビジネスの支援が可能となる。

このように、コミュニティの一員として相互に助け合っていることを実感させる地域通貨は、これまでは相互扶助や共生など抽象的な営みであったものを、人々を結び合う目に見える「助け合いの関係」として浮き彫りにしていく。その意味で、行政の助成や無償ボランテイアに頼ることではなく、「ありがとう」の範囲のなかで金を介在し雇用を発生させ財を循環させようとするコミュニティビジネスの支援は、地域通貨にふさわしい役割といえよう。

（3）新しい社会を築いてゆくひとつの道具として

地域通貨は、新たな社会づくりにどのような役割を果たすであろうか。地域通貨とは、コミュニティにおける人間の人格的自立と尊厳を基礎に、相互の信頼関係のもとで合意形成された一つの交換システムであるといえる。また、投機や蓄蔵の支配から人々を自由にし、大量生産・大量消費型の社会から「地産地消」の人間らしい社会環境を作り出す道具でもある。そういった観点から、今後の地域通貨への期待を次の３点にまとめた。

（ａ）　まちづくり経営への経済的効果として有効

地域通貨は、利益をめざし、世界的な動きをみせる国際金融資本の荒波から地域や生活を守り、生活圏レベルでの経済を活性に導くものと期待できる。グローバリーゼーションの波が逆に人々に地域の重要性を認識させた。地域

の活性化をこれまでのように工業や農業、商業などの縦割りではなく、「人とコミュニティ」を基本に総合的に進めるうえで、「人を循環」させる機能をもつ地域通貨は、経済的に有効な手段であると考えられよう。

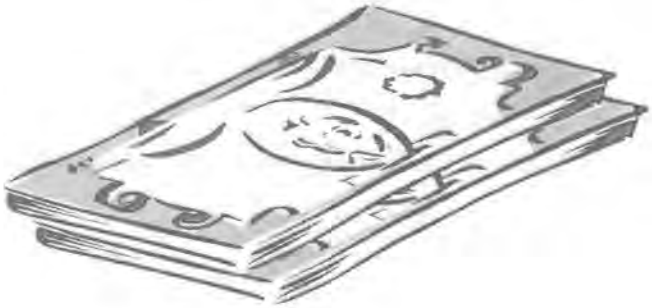
（b）　まちづくり経営への社会的効果として有効

地域通貨は、福祉や環境、文化など市場で評価されにくい価値をコミュニティで流通させるための手段であり、生活者が主役となるまちづくりに欠かせないものといえる。何故なら、地域通貨には、人とひとの信頼に基づくコミュニティとサスティナブルで生活環境を重視した地域社会を同時に構築する可能性を有するといえるからである。すなわち、「経済成長」ではなく、「社会正義」を視点に、人間本位の真に豊かな価値に満ちた社会の構築に有効な手段となると考えられよう。

（c）　地域通貨の可能性について

地域通貨は、住民自治による草の根まちづくり経営がコミュニティソリューション（地域の問題解決）を生み出す母体であったことから、コミュニティをベースに、知恵・労力・金銭などを相互に交換する道具として、地域の持つ人材・能力・パワーを最大限にいかすことができる可能性を秘めている。金儲け以外何の意味を有さない「こと」を無くし、「経済の進歩」ではなく、「人間が進歩」する世の中を構築するうえで地域通貨の果たす役割は大きいといえよう。

なくてもいいもの――地域通貨。しかし人にとってなくてはならないもの――「信頼」。地域通貨は環境や福祉、教育、文化などお金で表しにくいボランテイア経済を対象に、構成員の信頼関係のなかで流通する。地域通貨の普及に必要なことは、「地域通貨を流通させることで地域を魅力あるものとしよう」と思う地域の人たちの強いコミットメントとコンセンサスであろう。何故なら、地域こそ人間が生活する限りずっと存在し続ける生活の単位だからである。



参考資料　　国内編・地域通貨概要一覧

No.	名称	所在地	運営主体	表現単位	活動範囲	記録方法
1	グループだんだん	愛媛県関前村	グループだんだん	サービス３０分を１点とし、チップで交換	村内３島のうちの岡村島	リーダーがサービス提供の日時、チップ数を記録する。
2	ボランティア労力銀行	本部／大阪市	ボランティア労力銀行	１時間１点の労力点カードを発行。	202 四部を展開する全国ネット	各支部が４ヶ月ごとに労力交換報告書で点数(カード)のやりとりを本部に報告する。
3	NALC	本部／大阪市	特定非営利活動法人ﾆｯﾎﾟﾝ･ｱｸﾃｨﾌﾞ･ｸﾗﾌﾞ	サービス１時間を１点とし、預託される。	全国に 55 の活動拠点	会員全員が時間預託手帳を持ちサービス内容、日時などを記録。活動拠点は預託台帳に点数を記録管理する。
4	西伯町あいのわ銀行	鳥取県西伯町	西伯町社会福祉協議会	サービス１時間を１点とし、預託される。	西伯町内	あいのわ銀行のパソコンで一括管理 残高明細書を発行する
5	松山市地域福祉サービス事業	松山市	松山市社会福祉協議会・地区社協	サービス利用料 100 円を１点とし、預託できる。	地区社協の管内	地区社協事務局が台帳で事務処理する。
6	金谷町福祉サービス銀行	静岡県金谷町	金谷町社会福祉協議会	福祉サービス１時間１点預託、奉仕活動は半日１点とし、記録される。	金谷町内	公共施設など町内 11 ヶ所の端末機に自己申告。本人の「たすけ愛カード」にも点数を記録する。
7	さわやか愛知	愛知県大府市	特定非営利活動法人福祉サポートセンターさわやか愛知	サービス１時間１点の時間預託か現金受け取りの選択性	大府市近隣	ケアワーカーが活動謝礼明細書に毎日記入してコーディネーターに提出、追記締めで現金支払いか時間預託する。
8	まごころサービス	香川県高松市	香川県老人福祉問題研究会	サービス１時間１点のタイムストック(時間貯蓄)か現金受け取りの選択性。	香川県内	協力者の月次活動報告書・介護日誌をセンターで集計。なお、全国 41 団体の預託点数は、日本ケアシステム協会で管理(本部・高松)する。
9	おうみ	滋賀県草津市	地域通貨おうみ委員会	2 種の「おうみ」紙幣を発行。	草津市周辺地域	最初は被提供者が価値を決める方法をとっていたが、現在は９０分で１０おうみのお礼を目安にし、自分が発行者という手形方式機能をあわせもつ。個人間取引なのでコーディネートした場合しかわからない。
10	くりやまエコマネー	北海道栗山町	くりやまエコマネー研究会	3 種のクリン紙幣を発行。	くりやま町内の運用試験参加者間	交換手帳に日時、内容、価格などを記入する。
11	ピーナッツ	千葉市	千葉まちづくりサポートセンター	通帳上の通貨 Pea を発行。1 Pea は１円に相当。	千葉市内	「大福帳」という通帳にモノやサービスの提供者と被提供者がプラス・マイナス両方を記入する。

世界各地域通貨の分析表

	国民通貨	地域通貨					
		30年代(ex. ヴェルグル)	WIR	Toronto Dollar	Ithaca Hours	LETS	Time Dollars
発行単位	US $、マルク、円	シリング(労働証明書)	IWIR＝1スイス・フラン	1カナダ・ドル＝1トロントダラー	時間、Hour =10$	1グリーン$(国、システムによってことなっている)	サービスの時間、1時間＝1タイムダラー
発行主体	中央銀行	中央事務局	WIR銀行、取引当事者	中央事務局	イサカアワーズ委員会(中央事務局)	取引当事者、メンバー	取引当事者、メンバー
貨幣の特徴	不担保通貨、紙幣	担保通貨、紙幣	ミューチュアル・クレジット	担保通貨、紙幣	不担保通貨、紙幣	ミューチュアル・クレジット	ミューチュアル・クレジット
流通範囲	国内、一部世界中	地域内、町・村	スイス国内の中小企業コニュニティ	地域内、トロント市内	地域内、イサカ市内	LETSの貨幣コニュニティ内	タイムダラーの貨幣コニュニティ内
評価・詳細	投機の対象、利子を生み出す、全国規模	1シリング＝1オーストリア・シリング、劣化する	国民通貨を計算単位として用いている	カナダ・ドルとの交換で取得できる。ドルとの交換性あり	委員会によって、発行量が管理されている	最も広く普及している地域通貨システム	固定したレートを採用している。12時間あたり1タイムダラー
財・サービスの値付け方法	市場により決定	市場により決定	市場により決定	市場により決定	交渉による値決め／市場により決定	交渉による値決め	労働1時間当たり1タイムダラー
主な利点	本位貨幣	主流の経済上での、地域内の貨幣の循環を生み出すのに優れている。	最も成熟した地域通貨システム。規模がもっとも大きい。(取引総額約1500億円＜98年＞)	ユーザーにとって、国民通貨と同価値であり、交換性があるため、使用しやすい。	紙幣を発行するため使用しやすい。	国民通貨とグリーンドルの単位がなどしいため、値付けしやすい。手元にクレジットがなくても取引できる。	一番単純なシステム、平などな価値付け、手元にクレジットがなくてもと引きできる。
名目利子率	プラス	マイナス(ヴェルグの場合、1ヶ月に2%の減価)	プラス(スイス・フランの利子率よりも低い。約50%)	ゼロ	ゼロ	ゼロ	ゼロ

地域・コミュニティ経済振興 ←→ 相互援助促進

汎用貨幣 ←→ 特定目的貨幣

おうみ未来塾フォーラム地域通貨ってなに？会場アンケート結果抜粋

実施日　２０００年１０月１日（日）午後１時から

場　所　県民交流センター３０５号室

【参加者総数　７９名　　アンケート回答者　４７名　　回収率　５９．５％】

1　回答者の年齢構成

年　齢	人　数	構成比
１０歳代	０人	０％
２０歳代	５人	１０．６％
３０歳代	１３人	２７．７％
４０歳代	１４人	２９．８％
５０歳代	８人	１７．０％
６０歳代以上	７人	１４．９％
計	４７人	１００％

2　地域通貨をこれまでご存じでしたか

回答区分	人　数	構成比
よく知っている	８人	１７．０％
少し知っている	３５人	７４．５％
知らない	４人	８．５％
無回答	０人	０％
計	４７人	１００％

3　地域通貨についてどのようにお考えですか

○新たなコミュニケーションのシンボルになると思う

○地域通貨を通じ、特別な資格や技術がなくても人のニーズを満たすことに気がつくことで生きがいを感じることが出来るのがいい

○地域通貨は心の豊かさを預金するものと考えたい

○循環型社会を構築し、持続可能な社会へつなぐ重要なツールである

○有償ボランティアの対価として参画する人の間での「しるし」として使われるものだと思う

○新興住宅に住むものにとっては、地域通貨によって助け合いが復活し、地域がいきいきとしたものになればと思う

○地域活性化へのインパクトが大きい

○心の交流にいかしてはどうか

○本当に地域通貨が地域資源を生みだし、人や心を発掘できるのか

○コミュニティを構築するには有効な手段と思う
○埋もれた人的資源の再発掘が可能となると思う
○田舎の商店街にお客をつなぎ止めるためにはどうしたらいいかを考えるとき、地域通貨は効果があると思う
○コミュニティの再生の手段としてはいいが、誰が実施するのかなど実施主体を考えると簡単には出来ないと思う
○地域の発見や人的資源の発掘、人とひととのつながりの強化などが可能となるツールではないか
○地域のエネルギー循環の効率化が図れる
○地域通貨の利用の範囲と用途をどう決めるかが大事である
○環境や福祉など用途を絞り活用すべきだ
○地域社会内の流通の促進につながると思うが、地域通貨がこれからの複雑なコミュニティにどう対応できるかが難しい
○地域通貨の需要と供給のバランスをどう調整するか

4　地域通貨をどのように活用すればいいか
○第１次産業との連携
○市民活動センターの運営に使う
○自治体だけでなく、企業・市民が連携した廃棄物関係に使ってはどうか
○コミュニテイビジネスの立ち上げのためのファンドとして使う
○地域の活性化
○酒ビンのリユースシステムに活用する
○物価に左右されず変動しない通貨として地域を元気に出来る利用方法（学生の家賃、福祉環境保護など）
○地域の資源のあり方によって様々な活動の仕方がある
○経済的なインセンティブとして買い物時に仕掛けがいる。商品券替わりに使うと問題があるのでは
○身近な人が持つささやかな能力を活用するために必要。老人の生きがい対策などにもいいのではないか
○地域にはいろんな能力を持っているが宣伝するほどではない人やちょっと助けてほしい、教えてほしい人がいるのにどうすればいいかわからない人がいる。その媒介になればいいのでは
○子ども本位にすればいいのでは
○いわゆる長者問題をどう扱うか・通貨数が多くなればなるほど現在の貨幣と同じになる
○アートコミュニティにいいのでは
○祭りや盆踊りなどの模擬店でプレ流通させる
○歴史文化や環境の保全、自治会活動と連携させると良い

【地域通貨の引用・参考文献】

■「エンデの遺言」

河邑厚徳・グループ現代編（2000）（NHK出版）

■「ＬＥＴＳ」

野村早恵子（2000）さわやか福祉財団編『地域支え合いのきっかけづくりー地域通貨』（愛媛県保健福祉部）

■「地域通貨の有効性についての考察（２）」

泉留維(2000)　『自由経済研究』（ぱる出版）

■「村上龍、金融経済の専門家たちに聞く」(メール編：第87回目)

■地域通貨おうみ委員会資料

アーバンネット(宮城県仙台市ほか)

http://page.freett.com/urbannet/

エコマネーネットワーク

http://www.ecomony.net/

地域通貨おうみ委員会(滋賀県草津市)

http://www.kaikaku21.com/ohmi

くりやまエコマネー研究会（クリン：北海道栗山町）

http://www.mskk.gr.jp/ecomoney/

ゲゼル研究会

http://members.xoom.com/cf1998/

ＣＯＭＯクラブ(東京都多摩市)

http://www.como.gr.jp/

さわやか福祉財団

http://www.sawayakazaidan.or.jp

Ｉｔｈａｃａ　ＨＯＵＲＳ(米国ニューヨーク州)

http://www.lightlink.com/hours/ithacahours/

舎慮夢ヒュッテ(長野県南安曇郡穂高町)

http://www.ultraman.gr.jp/~shalom/

第3回わくわくワークショップ全国交流会

http://sv1.pavc.ne.jp/wakuwaku3/

タイムダラー・ネットワーク・ジャパン(愛媛県越智郡関前村他)

http://www.timedollar.or.jp/

宝塚ＮＰＯセンター(ZUKA・兵庫県宝塚市)

http://kansai.ne.jp/zukanpo/

千葉まちづくりセンター(ピーナッツ:千葉県千葉市)

http://www.jca.apc.org/born/

つれてってカード(長野県駒ヶ根市)

http://www.shinkin.co.jp/akaho/html/f_turete.htm

第２部　助成金について

１　なぜ資金が大切か

（１）　ＮＰＯの課題として

都市政策の権威、法政大学名誉教授田村明先生によると「地域経営とは地域内の資産を活用し、地域目標を達成する一種の経営である」とされる。すなわち地域経営とは、地域を一つの経営体と見なし、地域資源を再発見し、それを地域の内発的発展に活かしていく戦略のもとに実行していくマネジメントである。

これまで地域経営の構成要素は、行政や企業と考えられてきた。しかし、阪神・淡路大震災の経験のなかで、自主的な取り組みをおこなう市民にも公益を担う力のあることが明らかになった。その結果、多様で多元的な取り組みをおこなう市民とそれを支え連携しながら施策を進める行政とのパートナーシップによる地域づくりがにわかに着目されるにいたった。

また、農村における「結い」や都市下町の「路地」社会のような顔の見える生活共同体が高度成長のなかで消滅するなか、今日、コミュニティの範疇には、従来の地縁的共同体に加え、ボランティア団体などの「志縁」的グループなどが重層的に存在するものであるとの認識がなされるにいたっている。

同時に、社会の意思決定構造が、これまでの中央一極集中から、住民の身近なことは身近なところで問題解決を図ろうとする「地方分権」へと変化しつつある。地方分権の狙いは住民の自己決定権の拡大である。自己決定には選挙や住民投票を通じた方法もあるが、それらは行政サービスの供給の範疇を超えるものではない。むしろ自己決定権の拡大は、市民活動団体の自発的で自己責任に基づく活動にこそ大いに期待がもてるといえる。

こういった時代背景のもと、今後社会におけるＮＰＯの役割は大きなものとなろう。しかし、ＮＰＯ法人はボランティア団体と異なり、自己責任が原則であり、いわば企業のようなアカウンタビリティが求められることから、組織や財政などの管理技術が必要となる。特定非営利活動促進法の成立や寄付金の優遇税制の発足など、ＮＰＯを取り巻く環境は一定の前進はあったものの、人材を雇用し、継続的な活動を展開するにあたり、活動資金をいかに確保するかは大きな課題といえる。

（２）　ＮＰＯの活動資金とは

ＮＰＯはどのような資金を調達しているのであろうか。アメリカのレスターソロモン教授の調査によると、アメリカでは団体の４１％が政府系補助金や委託費、３２％が民間の寄付、２７％が料金や会費収入となっている。特にアメリカでは寄付金の８０％が個人寄付となっている。

一方、日本の場合、ジョンズ・ホプキンス大学の調査によると、政府系補助金や委託費

が４５．２％、２．６％が民間寄付金、５２．２％が料金・会費収入となっている。

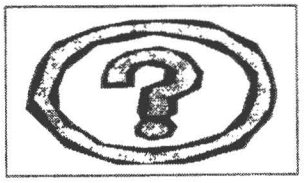
公的補助金の比重の高さは、ＮＰＯが企業や政府と連携した公共性を有する存在であることを物語っている。今後、パートナーシップ型行政の推進を図るうえで、地方自治体を中心にＮＰＯ法人への支援策が積極的に設けられるものと考えられる。

会費収入は、最低限の運営を担保する資金として理想的なものといえる。外部の状況に左右されない運営基盤の確立を図るためには、賛助会員や事業収入などを増やすことは組織の安定化と継続化に重要である。

寄付金は、現段階では低位にあるものの、これまでの税を通じた公共サービスシステムではなく、直接寄付や労働を非営利組織に提供し、社会的サービスを受益しようとする方式は、個人の負担と公的サービスへの需給の新たなありかたとして今後広がっていくと考えられる。よく日本は、欧米に比べ「寄付の文化」がないと言われるが、税の優遇措置がないため統計上数値が出ていないだけで、阪神・淡路大震災における１７００億円の寄付金にもみられるように、かなりの寄付が行われているものと予想される。その意味で優遇税制創設の持つ意義は大きい。

ただ、優遇税制は一つのきっかけにはなるが、経済状況が悪化しているときは、優遇税制はあっても資金は集まらないであろう。一方、不況下でも阪神・淡路大震災以後の地震や噴火などの災害に対し、市民から多額の寄付が寄せられているのも事実である。このことから、優遇税制や経済状況に関わらず、人々の「共感」を得ることで寄付は集められるのであり、むしろそのことこそ、その団体の社会的評価へと繋がっていると言えよう。

2　資金調達の知恵とは



（1）情報を早く集めること

資金を調達するためには、情報を早く仕入れ、応募することが最も重要である。ＮＰＯ法の成立以来、多くの団体が助成金に応募する反面、経済不況や低レートのため助成金が減少している。トヨタ財団など知名度の高い財団助成金は、かなりの狭き門となっている。その一方、かなりおいしい助成制度があまり知られていないため、競争率が低い場合があり、穴場探索も重要である。また、不況とはいえ、フィランソロピーやメセナ活動による企業の社会貢献が徐々に浸透してきているため、新しく助成活動を開始する企業もある。また、既存財団でも環境や介護など、時代潮流に沿ってプログラムのスクラップ・アンド・ビルドが行われる場合がある。いずれにしても早く情報を仕入れ、初期の段階で申請するのが得策である。

（2）どういう情報が必要か

基本的なものとして、行政・財団・企業など助成機関の名称、住所、電話などに加え、助成プログラムの内容を入手することである。また、応募要領や申込書の様式などについては、市販やホームページによって得られる助成団体のリストなどから個別に調査する必要がある。また、行政関係についての情報は、法律や条例、要項などに定められているが、

今のところ国の関係分は、市販図書やホームページで、地方の場合は、地域振興やコミュニティ担当セクションあるいは直接、事業担当窓口に聞くのが効率的である。特に、財団や企業などは行政補助のような「広く・薄く」ではなく、助成要項に掲げた「使命」に応じた団体に「絞り・厚く」交付するため、一層情報収集が大切である。

助成リストや行政の条例・要綱などには一定の情報が登載されているが、応募方法が公募か非公募か、公募であっても地域や対象者が限定されていないか、助成金の１件あたりの限度額や総予算額、申込受付期間、選考基準、最近の応募状況などいわゆる「傾向と対策」の調査が必要である。さらに、助成金の受領時期も支払い時における借金の有無に関わるため重要である。前金で交付するところや必要に応じた部分払い方式、完了後領収書の提出をもって支払うなど様々である。特に、行政系は一旦支払った後の精算払いが原則であり、申請から支払いの期間に相当の日数がかかる場合が多い。

（３）情報の入手は

助成情報の入手先として、一番充実しているのはホームページである。主な団体のホームページとしては、

1　財団法人助成財団センター　http:www.jfc.or.jp/
　　８００件に及ぶ情報ストックを誇り、わが国最大のデータベース。
2　シーズ＝市民活動を支える制度をつくる会　http://c-s.vcom..or.jp/
　　最新情報を読みやすく掲載している
3　日本財団　http://www.nippon-foundation.or.jp/
4　財団法人トヨタ財団　http://www.toyotafound.or.jp/

また図書としては、

1　財団法人助成財団センター発行「助成財団募集要覧」
2　公的資金活用研究会発行「助成金・借入金活用ガイド」
3　わこやま自立生活情報室発行「助成団体要覧」
4　全国社会福祉協議会発行「社会福祉事業関係助成団体要覧」

などがある。

（４）　申請に備えて

（ａ）助成先の調査

助成申請先の団体が、これまでどのような助成をしたか、過去の助成先と助成内容について調査する必要がある。調査のポイントは、まず助成先の地域分布はどうかである。オールジャパンなのか特定地域に偏在しているのかによって確率が違う。

次に助成内容が事業助成か物品助成なのか、また当初助成か運営助成なのか、さらに助成金限度額の多寡もポイントである。

なかでも、行政補助金は税金が原資であるため平等・公平が基本で、内容にリスクがあるものは非対象となりやすい。また、県内市町村の条例・要綱をみても額は５０万円程度までであまり大きな補助金は少なく、出し方も１／２とか２／３などの補助率があり、自己財源が必要となる。

（ｂ）　構想の重要性

まずは工夫が必要である。助成機関は金額がわずかでも社会に役立ち、人々に喜ばれることを期待している。したがって、単にお金がほしい、物がほしいと訴えるだけでは効果は薄く、「助成することにより何がどう変わり、将来どのように活動が展開されていくのか」がポイントとなる。すなわち、助成申請団体がどのような使命でどのようなテーマで活動しようとしているのかを明確にすることである。

また、助成金のスタンスとして行政関係補助は公平・平等に重点が置かれる一方、民間財団などは実験的、先駆的な案件が重視されやすい。実験的とは、成果が予測できないが、やることで新たな道が開けると考えられる事業であり、先駆的とは、文字通りどこもやっていない、一定の地域内では初めて取り組む事業であるものをいう。

また、助成によって直接・間接を含めどれだけの人に役立っているかもポイントの一つである。説明文は簡潔に、また予算は市場価格を十分調査し、妥当性のある金額の積み上げも大切である。

（ｃ）その他のポイント

その他、申請のポイントをトヨタ財団の場合で検証すると次の通りである。

①事前に検討すべきこと

- ●民間助成財団の特性（行政の「補助」や企業の「寄付」との違い）をよく理解する。
- ●助成財団に関する情報機関（助成財団センターなど）や情報紙・誌（『助成団体要覧』、『助成財団』、他）にてニーズに対応可能な財団を事前によく検討する。
- ●それぞれの財団における「助成の趣旨」をよく理解する。
- ●募集方法や募集時期（期間）をきちんと把握する。
- ●できれば、選考の仕組みや基準についても把握する。
- ●計画案を簡潔な形でペーパーにまとめてみる。
- ●「財団」の門戸を叩き、担当者などとコミュニケーションを図る。（電話や手紙だけでなく、できれば担当者に会う。）
- ●疑問点や不明な点については、よく整理し、まとめた上で、タイミングを考慮に入れながら連絡する。
- ●以上を踏まえたうえで、助成を希望する「計画」の内容について十分な検討や見直しをおこなう。（この場合、「第３者」的な視点を導入することは重要）
- ●「内容」のみならず、これと対応する「実施スケジュール」や「予算」についても十

分な検討をおこなう。

②応募・申込みにあたって注意したいこと

●（応募書類などの）「申込書」への記入に際しては、それぞれの項目にしたがって簡潔・明瞭に書き込むこと。

●応募する計画については以下の点に留意する

（ｱ）助成の趣旨に適ったものであるか。

（ｲ）「応募書式」としての要件を満たしているか。（すべての必要項目にきちんと応えられているか）

（ｳ）計画の内容に先駆性・独創性が感じられるか。

（ｴ）計画の実現性があり、且つ、その成果の広い波及が見込まれるか。

（ｵ）現時点における計画の実施が、時宜に適ったもの（社会的に必要とされている内容）であり、今後の発展などのために重要な契機となるものか。

（ｶ）計画遂行に際しての適切な人材を確保できているか。

（ｷ）計画に対応する実施のためのスケジュールや予算編成が適切に図られているか。

（ｸ）他の財源（行政による「補助」や企業の「寄付」など）が得にくいものであるか。

●申込期日（応募用紙の提出期限など）は絶対厳守のこと。（「遅れ」は論外）

③その他、留意したいこと

●日頃から「応募書類」のような書式に記入する訓練をおこなうこと。

●たとえ「助成」が得られなくとも「ヤル」「ヤリタイ」という強い意気込みを持っていること。

●仮に、結果が「ダメ」になったとしても、「チャレンジ精神」を失わず、何処が悪かったかを見出だす努力を行い、次回に向けての参考とすること。

●「財団」に関連する情報には常に“アンテナ”を張っておくこと。

●日頃から、財団関係者との接触を何らかの形で試みること。

（５）　具体的な事例

ここで、湖国２１世紀記念事業県民活動補助事業に申請し、採択された事例を見ることにする。

内容は環境問題で、湖国２１世紀記念事業「いのちと水の対話」のテーマに沿っている。計画案は、極めて簡潔でわかりやすい表現となっていて、しかもすべての必要項目にきちんと応えられている。また、環境問題の大切さを人々に訴えるため、創作狂言を用いるなど手法も独創的である。同時にワークショップなどにより、環境保護運動を継続的な活動として展開しようとの心意気が伺える。

また、ヒヤリングがあったと伺ったが、ＮＰＯには今後きっちりとした企画とうまく相手に伝えるプレゼンテーション能力が必要となる。

さらにチャレンジ（実践・交流活動）

県民活動参加（支援）申請書

私達は、湖国２１世紀記念事業に自らの活動で参加したいので、申請します。

申請日：２０００年９月３０日

テーマ区分	**1. 水とくらし**　2．水と技　3．水と大地　4．水と未来世代
活動名 (活動地域)	環境創作狂言から気づく水とくらしへの思い ―美しい水とくらしの憧れからネットワークづくりへ― （蛇砂川上流から西の湖周辺）
活動目的と企画概要	■活動の目的と応募理由 ★セブン・ドロップスでは、グループ活動のテーマを「環境を切り口とした地域づくり」とし、蛇砂川上流から西の湖周辺までにおいて生活する人々を対象にして、水とくらしに関する調査活動を展開してきた。 ★これまでの活動を振り返えると、根本的に変えていかなければならないことは、地域で生活する人々の意識を変えていくことが、一番大切なことであると再認識した。 ★今、地域では従来のような地縁組織や自治会・学区単位を中心としたコミュニティが希薄化し、その影響などから生活者一人ひとりの日常生活から起こる環境への配慮も失われつつあるのが現状の姿であると考えられる ★今回の２１世紀事業は、地域の人々が毎日の暮らしの中でおこる身近な環境問題についての気付きと、また、その気付きをさらに大きく展開していくためのネットワークづくりを行っていくものである。 ■企画概要 ★地域の一人ひとりに環境への気付きをもってもらう仕掛けづくりとして、「奏でる・語る・鑑る」流域フォーラムを開催する。 ★この流域フォーラムの「鑑る」については、環境をテーマにした創作狂言をつくり、日常生活から起こる環境への気付きをもってもらう手法としていく。 ★狂言は人間の生き様を風刺する手法であり、私達の日頃の執着や悩みの本質を見る側に気づかせ、反省と明日への思いを見出してもらう古典芸能である。 ★現在の環境問題は、生活者自身の生きざまやライフスタイルが大きく関係している。従って、「わかっているが、止められない」という悲しい人間の性を風刺表現するのは、将に狂言の得意とするところである。 ★また、この環境創作狂言から気づく人々の「美しい水とくらしへの思い」をさらに、大きく展開していくために、地域交流と環境学習のプロジェクトを動ごかしていくための仕掛けづくりとなるワークショップを開催していく。
活動期間	2000年１２月１９日～2001年１１月１８日
申請する支援金の額	300万円(2000年度 50万円　2001年度 250万円)
活動グループの名称と事務所	
代表者の氏名、住所	
連絡責任者の氏名、住所等	

3　こんなにある助成制度

（1）滋賀県内市町村の支援制度の特徴

平成１２年６月に県内５０市町村を対象に「ＮＰＯなど市民活動支援にかかる調査」をおこなった。その主な状況は次のとおりである。

① 対象団体　基本的に自治会を対象とするものが多かったが、彦根市や近江八幡市などでは市民３～５名以上で組織された団体や自治会にとらわれないまちづくり協議会などを対象にしたものもあった。各市町村における自治会のありかたやまちづくりの状況によって差違があろうが、これまでの自治会が行き詰まりを見せるなか、新たな社会貢献の担い手として、ＮＰＯなど自治会以外の団体が期待されることから、多様な市民団体を対象にした補助金の充実が望まれる。

② 補助対象事業　自治会対象のものとしては、道路改良・河川愛護・除雪機購入・街灯設置・交通安全・防災などの生活関連のものが多かった。また、生ゴミ対策、資源回収など環境関係の補助金も多くみられた。ユニークなものとして、「彦根市新世紀まちづくり事業費補助金」は、多様なまちづくり市民活動をその対象としている。具体的には地ビールの研究、ケナフ栽培と環境活動への実験、地域情報の発信、人材マップ作成などである。また、甲良町などでも「地域づくり支援推進事業」として、ユニークな事業への支援が行われている。近江町では対象団体は自治会であるが、住民主体の「夢いかし事業」に対する支援策が設けられている。近江八幡市では市民のまちづくり団体である（財）ハートランド推進財団を通した情報支援、相談活動、助成活動が行われている。なかでも人づくりを目指した「八幡塾」の開催や地域資産の再発見である八幡再発見事業、まちづくりサロン事業などに加え、「まちづくり奨励事業」として地域の文化振興や社会福祉活動、環境事業、農山村活性化事業などへの助成が行われている。

③ 補助対象期間　通常単年度を補助期間としている。ただ、５カ年を限度にした継続対応のものもみられた。

④ 補助額など　ハード部門では１０００万円のものもあるが、ＮＰＯや自治会などの市民団体向けのソフト事業では、最低で１万円、最高１００万円、平均５０万円といったところである。また補助率としては、小さい金額の場合１０／１０の定額もあったが、通常９／１０～２／３の範囲のものがほとんどで、比較的２／３のものが多かった。

（2）滋賀県の支援制度の特徴

７月２４日（月）、滋賀県庁が揺れた日。

我がブレークスルー夢デザインのかしまし（やかまし）娘３人が、県の支援制度、特に「助成金制度」の実態調査に乗り込んだ日である。市民活動団体の資金繰りに活かせる助

成制度がどれだけあるかどうかを自分たちの足で確かめてみた。

○　説明はわかりやすく丁寧だったか。○資料提供してくれたか。○窓口担当者の言葉遣いや対応の仕方、お茶が出されたかどうかなど、3人の厳しいチェックの目が光った。（担当者のみなさま、お騒がせしました。）

時間の制約もあり、訪問したところは、県民情報室･地域振興課・県民生活課･市町村振興課・湖国21世紀記念事業協会である。

ヒアリングでの情報収集のほかに情報冊子2冊「湖国のまちづくり2000～助成制度と表彰制度～：地域振興課」「個性輝く自治活動支援の手引き：市町村振興課」、そして、いくつかの申請案内と申請書を収集することができた。ここでは、県単独事業（32）に限って傾向を探ってみた。

①事業主体：　市町村、商工会議所、自治会などを対象とするものが大半である。直接NPO･市民団体などを対象とした主な助成制度は、以下の6つであった。

○県民文化活動奨励事業（文化振興課）
○子育て自主グループ広域ネットワーク形成促進交付金（児童家庭課）
○湖国21世紀記念事業「水といのちの活動募集」（湖国21世紀記念事業協会）
○夢発見エコ交流～手作り企画募集～（エコライフ推進課）
○市民参加型森林づくり活動支援事業（琵琶湖環境部）
○しが女性のネットワーク事業（男女共同参画課）

②対象事業：ここ3～4年の間に、従来の施設整備中心の助成から市民団体への運営補助や活動支援へと対象となる事業に変化と広がりがみられる。たとえば、「しが女性のネットワーク事業」のような学習、研究調査活動への支援や「子育て自主グループ広域ネットワーク形成促進交付金」のように市民活動のネットワークを広げる手助けをする事業への支援、「夢発見エコ交流」「水といのちの活動募集」のように、市民の企画力･アイデアそのものを活かすための支援などがそうである。

なかでも、平成12年度に募集された「夢発見エコ交流」には、150件の応募、「水といのちの活動募集」には、1次募集に応募数48件・採用12件、2次募集の応募数63件･採用41件にものぼったことからみても、市民活動団体への助成策のニーズは高い事がわかる。

③課題：1、市民が情報を得やすくするために、総合的な窓口の開設が必要。
　　2、申請のノウハウや細かなアドバイスを提供する相談窓口の充実が必要。

（3）民間の支援制度の特徴

財団法人助成財団センターがおこなった「１９９９年における日本の助成財団の現状」を参考に調査した。

まず助成金額であるが、助成総額は約５００億円で、１件あたりの年間助成金額は５０００万円未満が７０％以上を占めている。ちなみに日本で総年間助成金額が多い財団は、「中央競馬馬主社会福祉事業団」である。

助成金の応募方式だが、「一般公募」「募集先限定」「助成先限定」「自主事業」の４つに

区分した場合、「一般公募」658件、「募集先限定」532件、「助成先限定」201件となっている。一般にわが国の財団の助成プログラムは規模が必ずしも大きくなく、募集や応募に当たって各種の条件や資格などの制限を伴うことも多いため、応募者にとってはアプローチが容易とはいえない。

次いで事業形態・事業分野の分類と特徴であるが、まず形態を大きく「助成、奨学、表彰」の3つに分類した場合、研究助成が425件と圧倒的に多い。さらに、派遣、招聘、会議、出版などの研究関連の助成プログラム数は800件に対し、公演・展示、事業プロジェクト、組織運営支援、施設・備品支援など、文化、福祉、市民活動などの事業プロジェクトに対する助成は278件で、両者を比較すると後者は前者の1/3強に過ぎない。近年市民活動などへの助成に対する需要が増えてきていることからみれば、事業プロジェクトへの助成が徐々に増えてきているとはいえ、まだまだ充分とはいえない。

助成事業の分野別で見ると、最も数の多いのが「科学・技術」「医療・保健」で、この自然科学系の分野のみで約半数を占める。教育が第2位にあるのは奨学金をここに含めているためで、奨学金を除く学校教育や教育研究などへの助成プログラムは104件となっている。

このような分析から、現在の日本の大多数の助成財団が、日本の科学・技術の振興と、人材の育成に重点を置いて助成を行っていることがわかる。

4　望まれる助成制度

最近、県や県内各市町村、各種財団などにはかなりの範囲をカバーする市民活動助成金が設けられている。しかし、活用状況となるとまだまだである。ＮＰＯが今後、社会の大きな役割を果たすうえで事業化を通じた継続的な組織の確立が求められているにもかかわらず、各種支援策の情報入手方法が解らなかったり、活用方法などに慣れていない団体が多い。そのため、単なる助成策を設けるだけでなく、【相談→学習→体験→助成・投資→評価】といった入口から出口までの一貫した総合的な支援体制が必要と思われる。具体的には、相談窓口や支援機関の設置である。その意味で、「淡海ネットワークセンター」のようなＮＰＯ支援機関が調査研究・相談といったシンクタンク機能を高めるべきであろう。

また、助成機関としては、各ＮＰＯ団体が自らのミッションを広くＰＲできるよう、支援にあたっては企画を公募し、マスコミでの情報発信を含む公開審査で対象団体を選定するとともに、助成、融資、人材派遣などのきめの細かい支援を実施していくべきであろう。

特に、立ち上がり直後の実績のない団体にとって、事務所機能を持つことはかなり難しい。その意味で、学校の空部屋の無償貸与や商店街空店舗の斡旋と時限的な家賃補助など事務所機能を持つための支援なども必要である。

また、市民基金や市民バンクなどの基礎資金の造成にあっても、民間寄付金や行政補助はもとより、県内全ＮＰＯやまちづくり団体が協力して資金を生み出すシステムを開発することも重要である。たとえば長浜の黒壁や草津のおうみ、近江八幡の八幡堀、甲良町のグラウンドワークなど、県内の先進事例を学びにくる全国からの視察者に対し、視察者1

人３００円程度を市民基金造成資金として協力いただくのも一つの方法ではないだろうか。年間視察者が１０万人として、年３千万円、３年で約１億円の基金となろう。これをもとに、滋賀県のＮＰＯのネットワークと活動がさらに進展し、魅力あるまちづくりに繋がれば多くの人の協力をえられるのではないだろうか。

また、行政改革の一環のなかで、これまで行政が提供していた公共サービスを積極的にＮＰＯへ委託していくことで、ＮＰＯを財源的に強化するとともに、社会的評価を高めることとなる。したがって、行政は可能な限り、ＮＰＯへのアウトソーシングをおこなうべきである。

地域通貨や地域振興システム、カードシステムなどを、コミュニティの振興や商店街振興、コミュニティビジネス、地域農業の振興などに使用した場合、一定の割合をＮＰＯサポートセンターを通じ、地域のＮＰＯやボランテイア団体に還元する方法も検討に値する。要は、地域を豊かにするアイデアや意欲を持った人や団体が生活の心配をせず働ける仕組み作りを支援する制度をいかに設けるかであろう。

心のバリアフリー

岡 佑里子(草津市)
岡崎 一郎(大津市)
川瀬 美智子(近江八幡市)
久田 君江(守山市)
松井 賢一(びわ町)
森 富裕子(野洲町)

テーマ　心のバリアフリー

目 次

1. 目 的……83

2. 活動報告
A 高齢者……83
・その実態
・脚本を書くにあたって
・脚本「朗読劇 目指せ！PPK」
・まとめ
B 在住外国人……86
・在住ブラジル人Aさんの話
・在住ブラジル人Bさんの話
・脚本「外国人 5話 オムニバスストーリー」／作者の思い
C ジェンダー……91
・「家族経営協定」を取り上げるにあたって
・浦谷 勝子さんの話
・脚本「ジェンダー問題を考える」

3. これから……96
グループとして
個人として

1. 目 的

地域活動を進める時、ぶつからざるをえない様々な問題の根っこにある「自分の心のバリア」を多面的に見つめ自分の周辺の問題解決に新しい視点を持つきっかけとする。実態調査を通じ、その背景を分析した上で一般市民にわかりやすいストーリーに脚本化し、「心のバリアフリー」とはなにかを市民に投げかける。表現手段は劇とした。

《例》

高齢者、在住外国人、ジェンダーなど

…と、ここまで決めるに至るのにも時間がかかりました。心のバリアフリーグループはどこに入って何をするかがはっきり最後まで決まらなかった人たちが集まって出来たグループだったからです。それぞれの思いを持ちながら形として、言葉としてはっきり表わすことが出来ず、結局、高齢者の問題や介護の事に詳しい人や、外国人の子どもたちに関わって活動を続けてきた人、ジェンダーにこだわる人の接点として、このグループが誕生しました。このグループ1人ひとりの知恵の活用法を構築し、それを活用する過程を通じて、バージョンアップを計ろうとしています。とくにハード面でのバリアフリーは進みつつありますが、ソフト面は進んでいません。みんなが住みやすい社会にするため、ソフト面からも考え、訴えていこう、それを簡単な劇に仕上げ、たくさんの人に考えてもらおうという企画を立てました。

2. 活動報告

A 高齢者

・ その実態

私たちの年代では、高齢者はその地域には無くてはならない存在であった。今もそれは変わりないと思う。ところが、高齢者にとってはだんだん住みにくい時代になってきているのではないだろうか？　地域の中でも高齢者が持てる役割がだんだん少なくなってきているのではないだろうか？　ゆとりある文化、といった事業に先駆者として役割をお願いしたらきっとやさしいものができるのではないだろうか。伝統的なものにも先駆者の大事な役割があるように思う。また、心のゆとりを持つには昔からある伝統的なものは今のうちに先駆者から受け継いでおく必要があると思う。それが文化の伝承につながるのではないか。高齢者とはそれだけで生きた証が残る。家庭にあっては家の柱である。その存在だけでその家の重みがある。家族が一丸となって何かを行うときその力を発揮するのも高齢者である。21世紀になって20世紀に残しておくべきだったと気がついても先駆者は、もうこの世にいないかもしれない。高齢者自身も先駆者として伝えるべき事柄を若い人に伝えておくべきである。若者とのコミュニケーションの場に同席して発言すべきである。しかし、残念な事に現在は高齢者が元気なうちに自分自身でバリアをはってしまっているのが現状である。

・ 脚本を書くにあたって　　久田 君江

お年寄りとかかわって早10数年

悲しい、寂しい、かわいい、憎たらしい、おぞましい…

沢山のいろんな人生を見詰めてきた

話題には、事かかない　しかし、そこには
問題があった
余りにもリアルすぎるのじゃないか
余りにも露骨すぎやしないだろうか
無い知恵を絞り、考えぬいた結果
舞台を「あの世」へもって行った
これなら書ける　だって行った人は帰って来ないもの
具体的に、わかりやすく、冗談ぽく真面目に
次からつぎへとシナリオは進む
時間、登場人物、短いセリフ
制約が一杯、言葉を削っていくのに少し苦労

・ 脚本

「朗読劇　目指せ!PPK」

PPK…ピンピンコロリの略

登場人物
松井→痴呆老人。特別養護老人ホームで死亡。要介護認定5
川瀬→脳梗塞のため左半身マヒ、失語。病院で死亡。要介護認定4
岡　→痴呆老人。病院にて死亡。要介護認定4
岡崎→PPKで自宅死亡。要介護認定「自立」

ここは、俗にいうあの世の世界。あの世もこの世も同じです。ちょっと覗いて見てみましょう。

松井:ニュース、ニュースやで。
川瀬:何？　なっ、何よ。
松井:今度来るのは、若い子らしいで。
川瀬:若いのか…かわいそうに。
岡　:男の人?　女の人?
松井:それがなぁ、ピチピチギャルや。
岡崎:ええなぁ。
川瀬:あほ！　男は死んでもこれや。情けないわ。
岡　:そんな若い人が何でまた？
松井:そんなもん決まっている。事件か事故や。
岡崎:若い子は無茶するからなぁ。
川瀬:これから一花も二花も咲かせられるのに。「つぼみ」のまま散ってどうする？
岡　:そやね。取りあえず、来たら歓迎しよう。
松井:まだ死んでへんで。
岡　:なんや。ところであんたは、ここへ来て良かったん？

川瀬:私はな、一人ではどこへも行かれへんし、言葉もしゃべれへん。皆に迷惑かけてなぁ それでも死にとうはなかった。

岡 :誰でも死ぬのはいややで。私は、俗世で地獄を見てて、早くお迎えに来てほしいと言ってたけど、薬はしっかり食後に飲んでたもん。

松井:自分で飲めるとええわなぁ。嫁さんに飲ませてもろうてたけど、何の薬かいまだにわからん。

岡 :そうか。私もボケやボケやって言われ続けてなぁ。トイレ汚すからってオムツはかされた時から、ホンマにボケたろうと思ってアホになってん。

岡崎:おばあちゃん、ボケふり老人やったんかいなぁ?

岡 :そうやで。そうでもせえへんかったら、生きていけへんかった。

岡崎:そら辛かったんやなぁ。私は、お陰さんで、死ぬまで元気やったからなぁ。

岡 :あんたは、幸せ者やったんやなぁ。

岡崎:その代わりになぁ。元気やていうて、認定は「自立」。払うだけ払って、一度もサービス受けてへんて言われて…。

松井:使わないのがええのになぁ。わしは、嫁やら息子やらに、何を聞かれても「わからん」って言えって言われて。認定がちょっとでも重くなるほうが、ぎょうさんサービス受けられるって言われた。

川瀬:それは詐欺になるのと違うの?

岡 :そうや、それでもなぁ。世間体がどうの、親戚がどうのって言ってなぁ。邪魔者扱いのくせに、外へは出してくれへん。病院やったらええのや。

岡崎:私はPPKやったさかい、老人ホームへボランティアに行ってたんやけどなぁ。ええとこやって思ってたんや。明るいし、看護婦さん優しいし、親切やし、ご馳走食べさせてくれるし…。身体が動かんようになったら、入ろうと思ってたんや。そやけど、ポックリと死んでしもうたさかい残念や。

川瀬:ええ死に方をしたんやなぁ。

松井:ほんまやでぇ。わしの場合はなぁ、まだ死んでへんのに嫁さんきばって葬式の準備までするんや。

川瀬:そら、おちおち生きてられへんがなぁ。

松井:そやろう? そやさかい、意地くそで生きたったんや。

川瀬:そりゃ、あんた嫌われるはずやわ。

岡 :そやけど、私らは幸せやで。昔やったら、朝、座敷牢でおむつ替えてもろたら、つぎはいつになるかわからへん。しかも、今みたいにええおむつはなかったしなぁ。

川瀬:ほんまや。そのとおりや。浴衣やらネルやらの寝間着といて、作ったのになぁ。風呂なんて寝込んだら、死ぬまで入れへんかったのに。今はどうや。風呂やらお湯まで持って家まで来てくれる。やっぱり文句言うても、俗世がよかったなぁ。

岡崎:ここもええがなぁ。住めば都。そやけど、今度来る子は若いしなぁ。俗世でちょっと苦労させんと、生まれた値打ちがないがなぁ。

岡 :ほな、悪いけど、帰ってもらおか。

川瀬:そうやなぁ。若すぎるわなぁ。
岡　:俗世へ押し返そう。年寄りと違って家族も喜ぶしな。
川瀬:ほんまや、ほんまや。たまにはいいこともせなあかんわなぁ。
松井:介護保険も使う者ばっかりやったら、また赤字でパンクや。若い子はちょっとでも残さんとなぁ。それが老人のためにもええのやからなぁ。みんなも気張ってやぁ。
岡崎:PPKめざしてがんばっておくれやす。それが後に続く高齢者のためですよってなぁ。

・まとめ

介護保険制度が2000年4月より導入され、その最前線で仕事をしているメンバーより話を聞いた。「心のバリアフリー」を唱えながらもメンバーの中には介護保険について全く知識の無いものもおり、1つ1つ確認しながら理解を深めていった。その後、脚本を頂いた。「寸劇」に参加する 4 人で稽古を始め、動きも入れてのセリフをつける中で、お互いにイメージが膨らみ、流れのスムースさ、理解のし易さ、観衆の聞き取りやすさ、などのチェックをし合い、脚本の手直しを数回加え、発表会に臨んだ。練習時間の短さもあり、朗読劇の形での発表に後退した。
今後の課題としては

(1)　高齢者の心のバリアについて、情報提供者を中心にしてメンバーで更に議論を重ね、自分の心のバリアの実態を内省し、1 歩でも各人の行動変容をもたらすことを期したい。
(2)　「寸劇」としても更に稽古を重ね、当グループとしての定番の出し物として完成度を高め、発表の機会を開拓して行きたい。

B　在住外国人

・滋賀県在住ブラジル人Aさんの話

(祖父が熊本出身。10年前に日本に来た。ブラジルにいた時はできなかった子どもが、日本に来てすぐにできた。一時帰国して出産。子どもは現在、小学校の3年生。日本に永住も考えている)

・ブラジルは土曜、日曜は完全に休み。店も閉まる。リラックスして楽しむ家族の日。日本の会社で働いて、残業や休日出勤があり、子どもとの時間がもてなくなったのが悩みという家族が多い。

・日本人は感情を表に出さないから冷たく感じる。いやなことを顔に出しても言葉では言わない。ブラジルの子ども達を保育している友人のところに警察が来た。早朝、子ども達を送ってくる車のエンジン音で起こされて腹を立てた近所の人が通報したらしい。迷惑をかけていることを親切に教えてほしかった。

・労働条件や雇用条件はよくない。契約が口約束で、何回も上司に言っているが聞こうとしないのでがまんさせられている。ボーナスも一回も出ていない。派遣会社は厳しく、「この日休みがほしい」と言ったら、やめてもらってのいいという対応をされた人もいる。

・ 滋賀県在住ブラジル人Bさんの話

・ヨーロッパやアメリカ人なら親しみの眼差しを日本人は向けるのに、アジアや南米は違う。英語圏の人のみを外国人と考えているのではないか。

・外国人の相談窓口では生活相談や関係の部署との調整を担当しているが、労働相談では、突然の解雇や会社や工場でのトラブルが多い。また、「税金のしくみがわからない」など、役所のサービスへの問い合わせが多く、窓口のない市町村からも来る。行政サービスの不充分さを感じる。

・ 脚本

外国人　5話　オムニバスストーリー

N…ナレーター

1 ピアス

（小道具はピアスと箱）

N　　:ブラジルの病院でのおばあちゃんとお母さんの会話です。

おばあちゃん:おめでとう。かわいい子だね。名前は何て付けたの？

お母さん　:ビビアンよ。元気な子に育ってほしいわ。

おばあちゃん:これは、おじいちゃんと私からのビビアンへお守りとしてのプレゼント。

お母さん　:ありがとう。早速、開けてみるわ。わぁ、ルビーのピアスね。

N　　:こんなふうに、ブラジルでは赤ちゃんが産院を出る時にはもう、ピアスができるように耳に穴を開けます。ピアスには、両親や祖父母の「元気に大きく育ってね」の願いが込められているのです。

ビビアンと両親は、2年前から日本で暮らしています。日本のある中学校での先生とビビアンとの会話です。

ビビアン　:このピアスいいでしょう。

先生　　:ビビアン！いつも言っているだろう。ピアスは未来中学では校則違反なんだ。ダメだって言っただろう。

ビビアン　:おばあちゃんが大事にしろってくれたプレゼントなのに…。

N　　:文化の摩擦は、こんなところにも見られます。「郷に入れば郷に従え」と日本人は自国の文化ややり方をおしつけます。理解し合い、尊重するってできないのでしょうか？

作者より　　川瀬　美智子

ブラジルの子ども達が日本の学校に来てぶちあたる壁はまず、言葉の壁、文化や習慣の壁、国民性の違いからくる考え方の違いの壁などが考えられる。

多種多様な人種や民族の中で育ったブラジル人と、他の国の人が教室にいる風景がまだまだめずらしい日本人とでは、育った環境も考え方も違うのは当然であるが、そこから生じるさ

まざまな問題や摩擦、誤解を何とか解決できないものかと考えた。

それは、外国人に慣れていない、閉鎖的といわれる日本人自身が少し変わることで、それらの壁がとりのぞかれる場合もある。

そこで、日本人にとっても厳しくて一考を要する中学校の校則について取り上げた。ピアスが当たり前という社会と校則違反になってしまう社会。

日本のルールをあくまでも守るべきなのか、それとも日本が変わる時に来ているのかを投げかけてみた。

2 サイレント

N　:続いて「サイレント」です。登場人物はブラジル人、韓国人、アメリカ人、日本人、日本人ガイドです。1日定期観光バスでたまたま乗り合わせたメンバー達です。

ガイド　:本日は未来観光をご利用いただきましてありがとうございます。皆様の前方に見えますのが琵琶湖でございます。あちらに見えますのがミシガンです。
〈みんなガイドが指さす方をみる〉

日本人　:〈ブラジル人、アメリカ人に〉　Look! Look!　Lake, ship!　Beautiful!
〈ブラジル人は理解できない。アメリカ人のみうなずく〉

ブラジル人:〈一歩前にでて判らないと言うジェスチャーで〉

N　:外見が欧米系というだけでなぜいつも英語がしゃべれると思われるのだろう。僕はポルトガル語しか話せないのに。

日本人　:〈ブラジル人を指して韓国人に〉何であの人英語で話しているのに反応してくれないのかなあ。せっかく説明してあげているのに。
〈韓国人無反応〉

韓国人　:〈一歩前にでて判らないと言うジェスチャーで〉

N　:私に日本語話されても判らない。

日本人　:なんや、あんたも日本語判らないの？どこの国の人？

N　:日本に来ている外国人は欧米人のみならず、アジア人、南米人、様々な人がいます。しかし、日本人はなぜか欧米人だけをもてはやしているように見受けられます。みなさん、心のどこかでこの様な見た目の判断をしていませんか。

作者より　　岡　佑里子

私たち日本人のなかには「外国人アレルギー」があるように思われる。言葉が、外見が、文化が少しでも違えば、はじいてしまっているように思う。しかし前ページのBさんの話にあるように、開国時より西洋文明にだけは憧れと羨望の眼差しが続いている。世間には横文字が溢れ、ファーストフードをはじめ、その文化は日本人の心の隅々までいきわたった。かく言う私も影響をうけた1人だった。小学生時より身の回りにあふれるこれら全てに引き寄せられていた。しかし、年齢が進むにつれ、複数の国籍の人々と触れ合うにつれ、私の考えは変わっていった。今私は知っている。外見が違っていても、人付き合いには変わらない、ということを。

3 ホームステイ

（小道具:机2、いす4）

N　　:登場人物は、韓国人留学生の男女とホームスティ先の夫婦です。私は、国際交流のボランティアをしています。時々、ホームスティを受け入れることがあり、一緒に暮らすことでいろいろな文化の違いを感じることがあります。先日も韓国からの留学生を受け入れました。そのときの出来事を報告します。

食事をしている場面です。

留学生女　:ご飯よそいましょうか？　　はい、どうぞ

留学生男　:ありがとう。

ホームスティ夫　:今日の天ぷら、私が作ったんだけど、味はどうですか？

留学生女　:えっ！？

留学生男　:日本では男性が食事を作るんですか？

ホームスティ妻　:昔は日本でも男性は台所に入らなかったけど、最近は、積極的に台所に入る人も多くなった。

N　　:一週間後の食卓です。

留学生男　:今日の料理はどうですか？韓国では作ったことがないので、どんな味か心配だけど。

ホームスティ夫婦:う～ん。おいしい、おいしい。

留学生女　:よくがんばったね。

N　　:韓国にも、男尊女卑の考えがまだ残っているようです。韓国からの留学生は、2～3年を日本で過ごします。これから日本人と食事をする機会も多くあるでしょう。

作者より　　松井　賢一

わたしの家庭では10年前から外国人のホームステイ受け入れを行っている。さまざまな国の文化に接することで、外国人に対するバリアが家族の中にもなくなってきたことを感じている。一方、各国の習慣や特に宗教によって考え方の違いを感じることも多かった。今回の韓国人の留学生を取り上げた理由は、儒教の考え方から“家”を重んじる韓国では、男女の区別がはっきりしており、男尊女卑の考え方が強いと感じたからである。この留学生が男性に絶対に炊事などの家事はさせず、女性が家事をしていることを当然のように振舞っていたからである。一方、我が家は、共働きのこともあり男女関係なく家事を行っていた。このとき、このホームステイを通じて留学生にもジェンダーフリーについて学んでほしいと思い劇にしてみた。

4 エレベーター

（小道具:ついたて）

N　:国際交流のイベント会場のエレベーター前です。
久田:今日は国際交流だけあって、外国人が多いね。
川瀬:本当、ここが日本だってこと、疑いそうよ。
久田:パッと見ただけじゃ分からない人もいる。
川瀬:そうそう、ここへ来る前にね。私迷子だったのよ。金髪の人には聞けないし困っていたの。たまたま後から追い抜いた人に尋ねたのよ。それが外国人だった。
久田:驚いたでしょう。
川瀬:驚いたなんてものじゃない。日本人と思っているから。
久田:思うのはアンタの勝手よ。だけど、大変だったね。
川瀬:外国人って知ってれば避けて通ったのに。でも、親切な人で良かったわ。
久田:わかる、わかる。好きとか嫌いとかじゃなくて外国人に弱いのよね。
川瀬:でも、向こうにしてみれば、誰が好きで誰が嫌いか分からないもの。
久田:外国語が話せれば悩むことないのに。今さら覚える気力はないし。
川瀬:私、近づかれるだけで体が硬直するのよね。
久田:あつ～い、厚い言葉の壁があるものね。

N　:ちょっと、待って下さい。壁は本当に言葉なのでしょうか？　私たちは、外国人というだけで身を引いていませんか？　外国人というだけで逃げていませんか？心を閉ざしていませんか？　私たちは身構えすぎているのではないでしょうか？

案内:お待たせいたしました。上へ参りまします。お足元に気をつけてお乗り下さいませ。本日のご来場、誠にありがとうございます。

作者より　　久田　君江

高齢者も障害者も男女参画問題も私にとっては関わりのある事
知っている世界の事
娘や息子は留学させ、ホームステイも引き受けたりしたが
困った事に在日外国人となると関わりが無い
知らない　から　分からない
殆どが森さんの体験談の中から拾ったもの
これも又、高齢者と同じく制約がある
出来るだけ登場人物を少なく
衣装の要らないよう、セリフを覚えなくても良い様に
エレベーターを設定し、声だけの出演とした
最後にドアが開きエレベーターガールの登場で
「本日は…」とやって欲しかった
ドアが作れなくって残念！

5 サンバ

（小道具：机2、いす6）

N　：お隣同士のブラジル人家族と日本人家族とのキャンプ場での有り様から、現在の日本人家庭の問題をご一緒に考えたいと思います。

パパ　：わぁー、この飯ごう炊さんのごはん、おいしく炊けたね。ユリコは、よく頑張ってくれたからね。

お父さん：みちこもゲームボーイをやらずに手伝ったら良かったね。

N　：食事が進み、宴たけなわです。

パパ　：ユリちゃん、リズムとるから、得意なサンバ踊って。

ユリコ　：はーい、ちょっと支度をするからね。

（ママが上着を脱がせ、口紅をつけ、りぼんをつける。パパは太鼓、ママはタンバリンでリズムをとり、ユリコが上手に腰を振って踊る。終わって、みなが拍手喝采）

ユリコ　：（息をはずませ、汗をふきながら）今日は、森の中でとても気持ちよく踊れた。

ママ　：いい動きだったよ。さーぁ、今度はみっちゃんの踊りも見せて。

みちこ：こんなところで踊れへん。知らないもん。

お母さん・お父さん：（顔を見合わせて、しばし沈黙）

お父さん：そうだ。車にカセットデッキと江州音頭のテープがつんであるので、あれをみんなで踊ろう。（時間が許せばちょっと踊る）

パパ　：ユリコはのびのびそだってうれしいが、日本の社会に溶け込むには、もっと日本の生活習慣やしきたりを知らないと、日本で住みづらいかもしれないね。

お母さん：うちのみちこの育ち方は、少し考えさせられるわ。ブラジル人の民族性もあるでしょうが、ユリちゃんが踊るときの目の輝きとそれを見守るふたりの暖かい眼差しがすてきだった。

作者より　　岡崎　一郎

在住ブラジル人Aさんより色々お話しを聞かせてもらった。その際Aさんの小学生のお嬢さんとそのお友達2人によるサンバをオープニングに披露していただき南米の雰囲気を味わうことができた。価格競争の舞台裏で深夜労働、低賃金で苦しんでいる、在住外国人の厳しい生活実態を知り驚くとともに、反省させられた。生活の中に根づいているサンバを見るにつけ、家族のありようが問われている日本の家族と対比することで、その問題に新しい光を当てたいと考えた。それで題名を「サンバ」とつけた。

C ジェンダー

・「家族経営協定」を取り上げるにあたって

現在、一般社会では女性の社会進出に伴って男女共同参画社会が進みつつある。しかしながら農家や農村では、男尊女卑の考え方が現在も強く女性の地位が低いのが現状である。農家の女性は自由に使えるお金がなく収入は家全体のもので経営主（男性）のものであり、

かつ家事は女性の仕事との考えも強く年中休日がないのが現状である。

この現状を解決する手段として農家内の役割分担や休日の設定・家族への給与支払いについての取り決めを文章化する取り組みが「家族経営協定」である。また、家族経営協定書は、家族以外の第三者(市長等)の前で調印式を行うことにより協定の順守と家族の認識を確かにしている。

視察研修:専業農家の家族経営協定の取り組み
視 察 日:2000年11月23日(祝)午後2～4時
視 察 先:浦谷 勝子(専業農家:水稲20ヘクタール+キュウリ・トマト、花木、メロン)
守山市木浜町
家族経営協定実践農家
守山市男女参画社会づくり推進協議会委員
滋賀県指導農業士
滋賀県普及活動推進協力員

・ 浦谷 勝子さんの話

もともと非農家出身の勝子氏は、会社員でパートナーもサラリーマンであった。結婚と同時にトマト・キュウリの専業農家となった。また、結婚当初「農家に嫁いだらとなりの犬から電柱にまで頭を下げろ」と周囲から言われたことから農村の習慣に驚かされた。

当初、家族経営協定は行政(農業改良普及センター)から指導があり深く考えないで協定書を作成した。しかし、この協定書によって今までなかった給料(月給20万、年間340万)や休日ができたことで自分の時間がもて、特に趣味の写真を撮る時間ができたことは大きい。また、役割分担(勝子氏は会計と販売、外交方面)がされたことで今まで従事者として言われた農作業をこなしているだけであったが女性でも経営者の1人としてやる気と責任感がでた。また、家事を労働の1つとして位置づけたことで食事の準備のために1時間早く農作業を切り上げることができたことで、家事に専念する事ができるようになった。家族の中の取り決めを文章にして協定書といったものにまですることは「水くさい」と考える人もあるが、文章化することで今まで見えなかった農村女性が感じていた障害(バリア)が家族全員に理解されたのではないか。

女性は落ちない太陽だと思う。女性が明るいと一家は朗らかでいられる。農場が職場であるので化粧もしていく。活き活きしていたいので。着古しではなく農園指定の作業着でプライドを持って仕事をしている。昔の農業の暗いイメージを無くしていきたい。祖父母も自分たちがサラリーマンから専業農家になった時から一緒に手伝ってくれた。借金をした事ではっきり気持ちが結ばれた。金融公庫よりの借金は自分たちにも周りの農家にも目標や経営が出来るという先駆者でありたい。

作業場は色々相談出来る心の拠り所であるように心がけている。(農大の研修生もホッと出来る場所を目指す)

お母さんがしっかりしていると農家の嫁は来にくいといわれているが女性の能力の活かせる農業でありたい。作業場にしかトイレがなくわざわざ帰って来なければ行けない。新しい農村女性としてやりたいことは今ある能力を生かしてやっていきたい。農業も職業として女性も関わっていって欲しい。魅力ある農家でいたい。2世帯の生活が農業でまかなえるようにがんばっていきたい。

・ 脚本

「ジェンダー問題を考える」

岡:今回は、心のバリアフリーの総まとめとして、パネル形式でジェンダー、男女共同参画問題について考えたいと思います。国では、男女共同参画基本法が制定されるなど、ジェンダーを取り巻く状況も変化しています。

心のバリアフリーでは、ジェンダー問題を考えるにあたって、松井さんの紹介で、実際に専業農家のお家に現地調査に伺いました。松井さん、調査した農家の様子を話していただけませんか。

松井:その農家は、「家族経営協定」を結んでいます。この「家族経営協定」は、県の機関である「農業改良普及センター」が第三者の立場から進めているモノです。協定とは、家事の役割分担、妻の給与支払い、農家の仕事や内容を明確に文章化するモノです。

岡:なぜ、家族経営協定とジェンダーの問題が結び付くのでしょうか。

松井:日本の農家では昔は力仕事が多く、体力的におとる女性は、一般社会以上に「半人前」に扱われていることが多かった。

滋賀県の場合は専業農家が少ないので、農家の生活の様子がわからないかもしれませんが、農家では夫婦が一緒に農作業を頑張り、一日仕事が終わって家庭に帰ると、男性は居間でくつろいでいる。その傍ら、女性は炊事や洗濯に追われているという状況です。これは朝も同じです。

機械化が進んだ現在、男女の体力による能力差は少なくなってきていますし、野菜を直接販売するときなど、能力の高い女性がいても、その能力を認めようとしないとか、女性の代わりに家事をしようということはないわけです。農家の男性は、ジェンダーの研修を受ける機会がほとんどなく、農家自らジェンダーの問題解決に進むことが難しいと思います。

岡:実際の協定には、どんなことが書かれているのですか。

松井:先ほど言った家事の役割分担や妻への給料の支払いについては当然書いていますし、仕事の役割もたとえば、夫は「農業機械担当」 妻は「販売・経理担当」とか具体的に書き、また、妻は食事の準備のため朝は1時間遅く農作業に加わり、夕方は1時間早く農作業を終わる。しっかり、休日もとる。こうしたことが決められていますので、この家族経営協定を進めて、今後、地域協定みたいなものができればと考えています。

岡:どれくらいすすんでいるのでしょうか。

松井:今は滋賀県で50件です。そのうちの多くが湖南地域に集まっています。

岡:まだまだ少ないですね。久田さん、これについてどうお考えですか。

久田:家族経営協定ができて、農家では女性の地位向上につながっているということですよね。私思うのだけれど、そんなに良いことなら、どうしてもっと家族経営協定を進める農家の人が現れないのでしょうか。出る杭は打たれるって言うけど、女性はまだまだ出にくいのでしょうかね。介護ひとつとってみてもなぁ。介護保険が始まって、もう1年というのに、やっぱりまだ、介護は嫁の仕事いう男が多い。

川瀬:介護と言えば、あの石坂浩二。イメージダウンやわぁ、ほんまに。

さわやかさでうってたのになあ。この前、遙洋子が朝日新聞に書いてたわ。

岡:何が書いていたのですか。

川瀬:ここに新聞記事持っているので、簡単に紹介します。

でも、世間が納得するように「妻としていたりませんでした」って言わんとあかんというのが腹立つなぁ。

久田:ホンマやな。自分の親なら自分で看ろよと言いたいわ。でも、こういう男社会ってほかにもあるわ。私も昨年母を亡くしたんやけど、葬式って完全に男社会やったわ。

岡:男社会と言えば、地域ではもっといろいろあるんではないですか。岡崎さんいかがでしょうか。

岡崎:私の地域では、自治会に関わっているのはほとんど女性です。私も定年後、自治会に関わっていますが、これまで何もしてこなかったので、地域のことが何も分からない。役員選挙はくじ引きで、その意味ではすごく民主的なのですが、いったん、自治会長が当たると、女性は尻込みするので、地域のことの分からない男性がなるということが習わしになっています。このように、地域の各種活動の実権は女性が握っているのに、固定化した男女のイメージがあります。

久田:岡崎さんは、自治会に関わるのは女性ばかりで、男性は関わりにくいとおっしゃいましたが、自治会のことずっと奥様に押しつけて来られたのじゃありませんか。自治会の中のご夫妻の顔、分かります？子どもさんの顔、分かります？高齢者が、どの家にいて寝たきりの人がどこにいるかご存知ですか。

岡崎:私も会社人間でしたら、久田さんの言われるようにほとんど知りませんでした。

久田:そう、つまり、その結果なのです。私個人の考えなのですが、そういう男性に罪滅ぼしをしていただきたいと思っているので、定年退職される方を自治会へねらい撃ちです。けれど、女房殿に「働け」と言われるのか、粗大ゴミ扱いされるのがイヤで逃げているのか知る由もありませんが、再就職されるのでガッカリです。

組織のノウハウをご存知で、感情的にもならない殿方が積極的に出てきてほしいもの。「今まで君に押し付けていたから代わるよ」なんて言ってみて下さい。

そんな殿方なら「一緒のお墓に入るのはイヤ」と奥様は決して言いません。また、決して粗大ゴミや濡れ落ち葉などと申しません。

岡崎:さすが久田さんですね。私も自治会の改革として、役員男女半々ということを提案しています。その理由は3つあります。1つは地域自治会で日常活動しているのは、女性中心であり、それをトップの男性の建前でしきると、ずれが生じやすく、トラブルの種を蒔いている。2つ目は、地域で起こる利権に絡む問題もこの男性の建前主義から発生しているものが多い

と思われる。3つ目は、時の流れとしての男女共同参画社会へがあり、自治会もこれを真剣に検討すべきである。

岡:そうですね。これから自治会も変わっていくんでしょうね。さて、森さんは女性問題、男女共同参画問題に長く携わってこられていますが、森さんのお住まいの所ではいかがですか。

森:私は野洲町ですが、野洲では「男女共同参画プランやす」という女性政策のための推進計画が策定され、町内の審議会などにも積極的に女性の委員を任命しています。

2000年6月現在で、女性の委員は1109人中282人(25. 4%)で、30%を目指しているところです。

岡:具体的な数値目標があるのはいいことですね。森さん自身は、野洲町の中でどのようなジェンダーの活動をしているのですか。

森:今は、野洲町女性団体連絡協議会の理事をしています。この協議会は、10年前に11団体が集まり自主的に運営しています。多少の移動はありますが、女性に関する共通の課題について研究を深め、女性の地位向上に努め、相互に協力し合うことを目的に掲げています。会則もあり、広報誌「やすオール女性」というのも出しています。他町の団体と交流したり、また、年1回は行政の幹部と懇談会も開いており、言いたいことを堂々と言う機会にしています。

岡:いろいろ行政との軋轢もあったと思いますが、今はいい関係ができているのでしょうね。このようにジェンダーに対してそれぞれの御意見が出てきましたが、さて、松井さんは、先ほど言っておられた地域協定について、何か具体的な提案はありますか。

松井:これはジェンダーだけでなく、これまで心のバリアフリーが取り扱ってきた全般の話になりますが、先ほどの家族経営協定をいかして、とりあえずできることから始めようという意味で、地域協定というものを考えました。

滋賀県〇〇地域協定

★男性ばかりが役員の団体には、女性役員の割合を30%にします。

★女性ばかりが役員の団体には、男性役員の割合を30%にします。

★3年に1回は女性が自治会長をします。

★結婚のときに、家事、育児、介護分担協定を結びます。

★在住外国人と友好的におつきあいします。

★高齢者、障害者には進んで声をかけます。

こうした地域協定は、なかなか実行は難しいかもしれませんが、少しでも進めるために、例えば、行政からの支援を受ける場合の用件にするとかの強制力を持たすことがよいと思っています。

岡:ありがとうございました。

3. これから

グループとして

(1) 既に発表したもののバージョンアップを定期的な会合(例えば月に1度)を通じて行う。

(2) メンバーの刺激と一般への啓発のため、各種の「人権」学習会的な発表の場を見つけ、年2, 3回の勉強を企画する。その際、他のグループや2期生などにも門戸を開き、マンネリ打破を心がける。

(3) 「情報収集」「シナリオづくり」「演出」についてレベルアップを図るため、自主研修、外部研修をつづける。

(4) これらの成果を文章およびビデオなどにまとめ、それも機会を見つけて公表し、外部からの評価を受け、活動のエネルギーとしたい。

個人として

岡 佑里子

参加当初学生だった私は「まず、行動！」と何事にも超速球で取り組んできました。開講時、塾のペースの「のろさ」にいらだちを感じたこともありました。これは裏返していえば、深く考えて行動していない結果でもあり、多くの人に迷惑をかけたり、傷つけたりしてきたと思います。今回、多くの経験者に恵まれた環境や、グループ活動でのメンバーとの深い関わりの中で、1つのことにじっくり取り組むという姿勢が学べたと思います。また、塾内で得た人脈はかけがえのないもので、今後、この人脈を広げながら、子ども、若者、高齢者、外国人すべてがともにコミュニケーションを取れる「場作り」を行っていきたいです。

岡崎 一郎

(1) 自分なりの「地域プロデューサー」のバージョンアップを続けながら、 地域の組織、ボランティアグループ(新規を含む)、各種ネットワークとの関与の中で、役割を創造的に発掘し、それを楽しみながらはたしていきたい。 例えば、今暖めているものは新しい多面的に活躍するシルバーボランティア「日吉シルバー青年倶楽部(仮称)」などである。

(2) 「寸劇」の面白さが少し分かったので、関与できるグループ(新設を含む)で同志をつのり、プレゼンテーションの際に活用を企画し続けたい。 その際すきな歌や踊りを加えた「ミュージカル寸劇」的なものにも挑戦したい。手始めに、関係ができた近くの幼稚園にBGM付きで童話「葉っぱのフレディ」の朗読劇からスタートする動きを進める。

川瀬 美智子

未来塾の2年間で学んだことは、私にとっていったい何だったのだろうか。自問してみた。講義や研修を通じて受けた影響もあったが、それよりも、メンバーのさまざまな人達がそれぞれの地域で活動していることを聞き、刺激を受けたことのほうが、ずっと大きな自分の財産になったような気がする。

「心のバリアフリー」のメンバーは、あまり無理をせず、自分たちのペースでやってきたので、他のグループや事務局の方々には、「大丈夫なの？」と心配をかけたことと思う。でも、一般の市民の感覚からいうと、仕事を持ち、家事や育児や介護をしながらの市民活動はいかに時間を捻出するかで、まず壁にぶちあたる。未来塾のメンバーにも同じ悩みを持つ人はいたのではないだろうか。

これからは、自分の今までやってきた活動を地道に続けること、さらに未来塾で築いたネットワークをフルに活用することをしていきたいと考えている。一期生が卒業しても情報交換したり、活動報告をしたりする場があればいいなと思う。

松井　賢一

バリア（障害）とは、弱者には見えたり感じたりするが、強いものからは見えにくい。家族協定もそんなバリアを明確にすることによってそのバリアをなくすことができる。たとえば、健常者は車椅子に乗って街を調査することで段差などのバリアがわかることや、男性の妊婦体験などがあげられる。

地域で車椅子の方が外出されるのをみかけたら一声かけてあげましょう。特に段差のあるところで立ち止まっておられたら介助してあげましょう。

このように何がバリア（障害）なのかをはっきりしてどうしてあげることがいいのか。文章化することによって理解され、どうしてあげることが良いのかはっきりするのではないでしょうか。

今まで車椅子の方と接したことのない方はどうしたらよいのかわかりません。具体的にどうしてあげるのかを地域協定にしてはどうでしょうか。例えば在住外国人の方とは、友好的におつきあいしましょう。相手の文化を理解し日本の生活習慣も理解してもらうよう心がけましょう。地域協定の案を検討してみたいと思います。

森　富裕子

今まで未来塾で習ったことが地域でどのように活かせるのだろうか?

習ったことと活動に活かすこととがはっきりするともっと中身が違うのではないか?

私の場合は、今までとさほど変わらないペースだと思う。塾では、友人が増えました。でも、同じ活動に動員するものでもないと思う。皆地域ではリーダーだと思うから、交流によって情報交換ができれば良いのではないだろうか？そこから、それぞれの活動に活かせていけば未来塾の目的は達成されるのではないかと思う。交流にしても、皆でというのではなく、よれる人が集まれば良いのではないだろうか。卒塾の折、皆の意見をあわせるというのではなくこのような声もあるというくらいでどうだろうか?

久田　君江

だから…何っ！　だからぁ　生き様が　死に様なんよぅ

自分の生きて来た結果が　自分の死に方となるんよ　わかる？

お金に走らば　お金で片付けられ情に走らば情に溺れる　それだけの事
それは仕方がない　それは、それで良いんじゃない？　本人が納得ならば…

精一杯生きて　苦労して「努力が足りない」と嘆くあ･な･た
人は見ているよ　貴方の後ろには必ず誰かが手を広げていてくれるよ
その目に私達なりましょ　その手に私達なりましょ
助けられることが当然じゃない　助けられないことが当然なんだよ
そう思えば　支援を受けた時泣けるほどうれしくなるんだよね
自然に頭も下がって手も合わせられる様になるんだよね
今　気付いた人ちっとも遅くないよ　悔いの無い人生を精一杯生きようよ!
心に少しでも余裕ができたら　元気な今　少しの勇気を出そう
自分の為じゃなくて　人の為にも動いてみようよ　それが
全ては自分への結果となって返って来るのだから

心のバリアフリーなんて
全く見えないものだから　気がつきにくいものなんだけれど本当に大切な事
この難しいテーマと取り組んだ1年　考えさせられ気付かさせられた言葉が一杯
玉手箱の中に閉まっておきたいけれど　やっぱり皆にお裾分けしようね
そしたらまた　新しい発見へと続くかも知れない

寸劇という楽しい発表にしたけれどこのまま終わる事なく　さらに一歩前進して
未来塾の劇団へ無理する事なく稽古が待ち望めるように…
しかも身近なもので命のありがたさを感じさせる夢劇団の設立へ
そして旗揚げ公演ができる様に　とことんやってみたい
絵に画いた餅で終わらせない為に2003年基礎構造改革元年にむけて
改革の追い風を受けて大いに楽しみながら実践していきたいものである
心のバリアフリーを選んだ私たちのライフワークとして…

セブン・ドロップス

有澤　一洋（山東町）
石垣　公由（大津市）
遠藤　恵子（大津市）
小澤　聡彦（秦荘町）
澤　　孝彦（高島町）
堤　　良彦（安土町）
広実　照美（守山市）

テーマ　　環境を切り口とした地域づくり

◆目　　次

□セブン・ドロップスのアルバム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
　Ⅰ はじめに
　Ⅱ 目　　的
　Ⅲ 経　　過
□調査事項・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・102
　Ⅰ 特定非営利活動法人グラウンドワーク三島
　Ⅱ 水とくらしに関するｱﾝｹｰﾄ
□活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
　Ⅰ 東近江水環境自治協議会との連携
　Ⅱ 環境創作狂言「琵琶の湖（うみ）」
　Ⅲ 蛇砂川現地視察
　Ⅳ 水とくらしの語らいﾌｫｰﾗﾑ
□特別寄稿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・119
　Ⅰ 大蔵流狂言師　木村　正雄
　Ⅱ （財）滋賀総合研究所主任研究員　秦　憲志
　Ⅲ 京都大学生態学研究センター　今田　美穂
　Ⅳ 東近江水環境自治協議会会長　丹波　道明
□総括とこれからのこと・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122

□セブン・ドロップスのアルバム

〈I はじめに〉

私たちは、「環境」という明確なテーマで集まったグループだが、最初から「環境」というテーマで研究したいと思っていた人、「環境」を一つの切り口として地域づくりへ結びつけたいと思っている人、ただ何となく「環境」なら出来るかなと思って参加した人など様々な人々の集まりである。

そこから研究グループとして何を見出すのか、そのことの話し合いに一番時間がかかったように思う。ただ、現地を見ることから活動をスタートして見ると、課題や活動の組み立てに迷うことも多く、行きつ戻りつ何度もこの研究の目的に立ち返るという作業を行ってきた。

メンバーが一つのテーマで自分の目的をかなえつつ研究をしていくなかで、グループの絆が強くなり、懇親会の場での、狂言で舞台へ立ちたいという壮大な夢を持ち、それが現実の姿になりつつある。

今回 50数回という研究活動を通してまとめたが、このあとも地域のネットワークづくりへ役立てるように引き続き活動を続ける予定である。

〈II 目　的〉

今、地域では従来のような地縁組織や自治会・学区単位を中心としたコミュニティが希薄化している。

地球規模で問題になっている環境は、「私だけが環境に配慮しても」、「私一人ぐらいはなんともない」と言う人々の意識が地域で日常生活から起こる環境への配慮を失わせていると思う。

そこで、私たちのグループは、蛇砂川という流域をモデルに選び、その流域に住んでいる人々が、環境の中でも「水」という目で見えるものに対して、流域の人々がどういう環境への配慮で手を結べるようになるのか、それを「環境を切り口とした地域づくり」に結びつけることを目的に調査活動を始めながら組み立てることとした。

〈III 経　過〉

初めに蛇砂川流域の小学6年生に「水とくらしに関するアンケート」を取り、その中から共通点を見つけ出して、地域の人々を巻き込む活動をする予定であったが、同じ目的の東近江水環境自治協議会が、設立準備されていることで協力しながら進めることになった。

この調査活動のアンケートの項目を検討中に、環境をよくしようと考えた時、生活する

人々の意識を変えていくことが一番大切なことではないかと気づいた。そこで狂言という手法で人々へ訴えられないかと、京都の大蔵流狂言師の木村先生に相談し、西の湖での船上学習をする中で、琵琶湖についての環境創作狂言を作って頂くことになった。

「水とくらしに関するアンケート調査」集計作業

アンケートは対象を小学6年生にしたことで、内容も川遊びの経験や水に対する関心を聞いた。生活経験が豊かとは言えない子どもへのアンケートであったが、学校や家での話し合いもあり、有意義な結果となった。

また、淡海ネットワークセンターの市民活動屋台村で、「水とくらしの語らいフォーラム」を開催し、テーマを「淡海に活きる」として、蛇砂川流域の山・農・葭・漁・商に活きる人々からお話しを聞いた。あいにく日曜日の午前中という時間帯もあって参加者は少なかったが、川の流域という繋がりや思いの違いを改めて確認することとなった。このときに行った利き水試飲では、比良山系の水が一番好評だったという結果も得られ、琵琶湖の周りに暮らしている私たちの水への思いを一層強くした。

このおうみ未来塾で2年目の研究活動といっても、実質は半年くらいしかなく、私たちは狂言の舞台鑑賞も設定したいと思い、引き続き２００１年も活動を継続することとなった。

❑調 査 事 項

〈Ⅰ 特定非営利活動法人グラウンドワーク三島に学ぶ〉

セブン・ドロップスと東近江水環境自治協議会は、２０００年8月１９日～２０日の1泊2日をかけてグラウンドワーク三島へ出かけた。この旅の目的は、次のとおりである。

①行政依存から市民が主役となり、市民自らが知恵とアイデア、そして汗を出し、その際に行政、企業の支援を受けながら魅力ある地域づくりの活動を進めている取り組みを学ぶ。

②市民・行政・企業のパートナーシップによる市民活動として、英国の「グラウンドワーク」手法で成功した三島の組織づくりを学ぶ。

グラウンドワーク三島で見たパートナーシップ築く地域づくり

みどり野ふれあい園

※花が咲き、実がなり、季節を知らせる園
※地域で守り、育て、年齢の壁を超えた交流が生まれ、笑い声が響く園
※パートナーシップ
★土地の提供は、行政
★設備提供は、企業
★維持管理は、住民

温　水　池

※緑と水と富士山、まさに絶景かな！
※ふっと足を止め、静かな語らいが生まれそう
★三面張りの農業用水の池を地域の憩いの場に
★管理マニュアルを作成し（周辺に住む高齢者の方々から聞き取り）周辺全戸に配布
★地域住民と市とが協力して維持管理。
★今後は、市の管理部分をグラウンドワークに委託する方向

三島梅花藻の里

※無くしてしまった故郷の宝物を復活
★湧水の豊かな水辺に咲き、県天然記念物であった三島梅花藻
★梅花藻の養成増殖基地の整備、維持管理は市民
★機材や土地、そして技術は企業や業者
★市は補助金

学んだこと
　こつこつと積み重ねる活動が人の輪を広げ、点と点の活動を線へと繋げ、それがいつしか大きな面となる。住民参加、住民発信のまちづくりが生まれる。

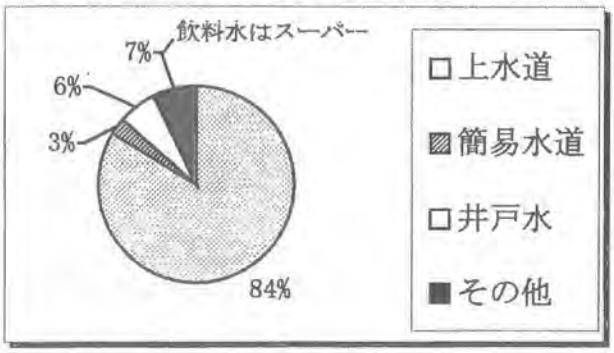
「水とくらし」のアンケート調査　（蛇砂川流域）　調査日 H12 年 9 月
（永源寺、八日市、安土、近江八幡、22 小学校　6 年生全員 1431 名対象）　回収率　85.0%

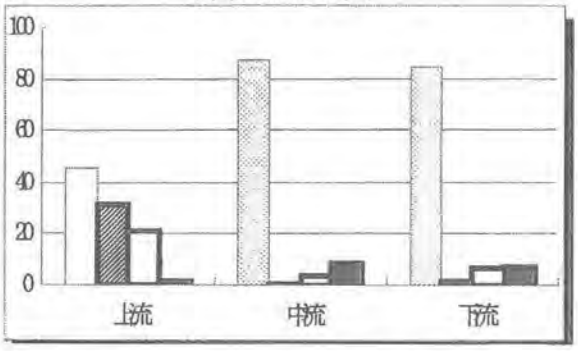
円 グラフ： 流域全体　　棒 グラフ： 流域別

上流：永源寺　中流：八日市　下流：近江八幡、安土

問１あなたの家の飲み水は、次のどれですか

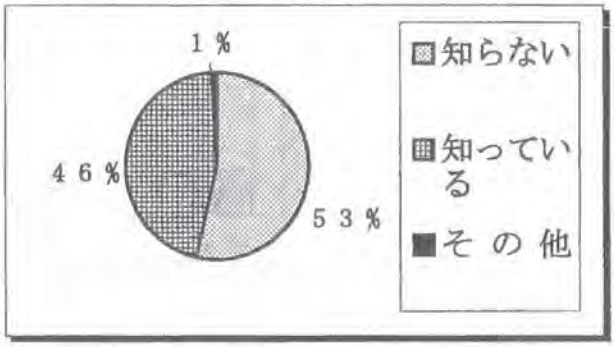
（単位は全て%）

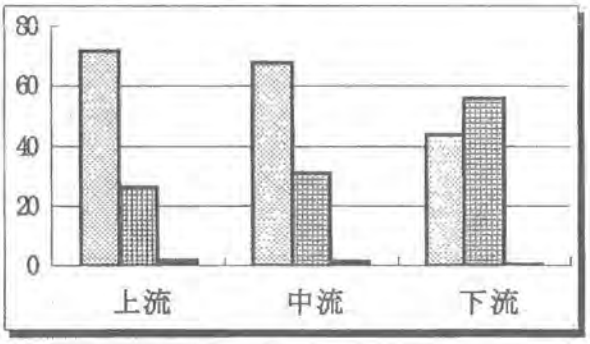




1. 上水道の普及はすすんでいる。
2. その他のなかで、中・下流域では飲料用としてスーパーで買うケースがある。
3. 下流域で伏流地下水による井戸水の利用がある。

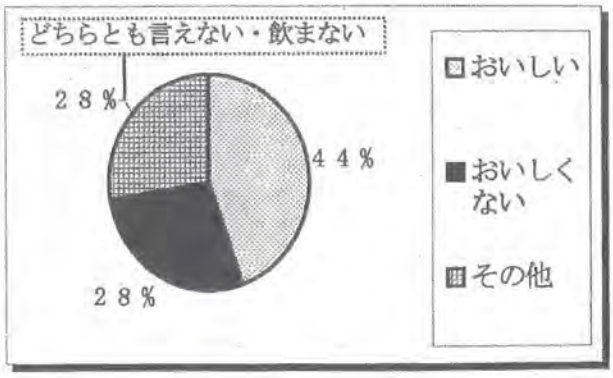
問２あなたの家の飲み水の水源は、どこにあるか知っていますか

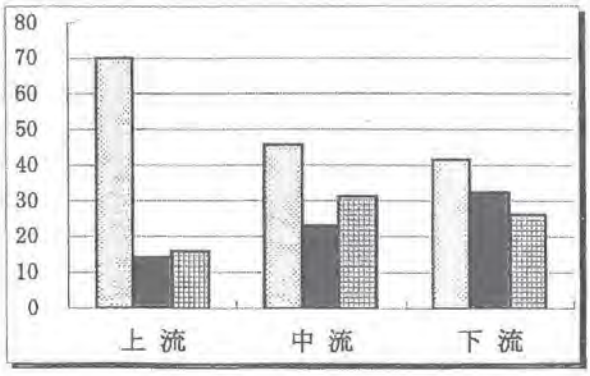




流域全体では水源を知っている、知らない人の割合は約５０％ずつ。
知っている割合は上流、中流の人は約３０％に対し、下流の人は約６０％と下流に住む人の方が、自分の飲み水に対する関心が高い。

問３あなたの家の飲み水(生水)は、おいしいですか





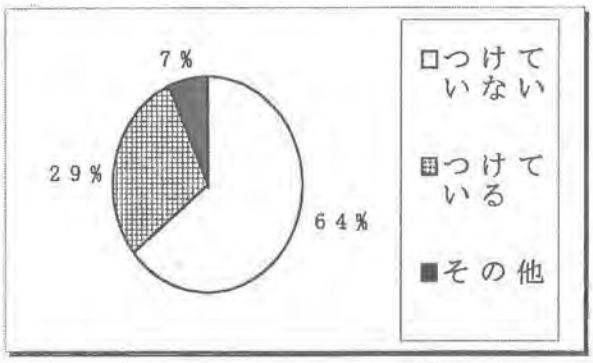
おいしさの基準がないので、その人の感覚だけの評価となったが、結果はイメージどおりとなった。ただ、今の子どもは、昔にくらべて生水を飲まなくなったようである。
アンケートの答えでも「飲まない」というのが、中流・下流地域で目立った。

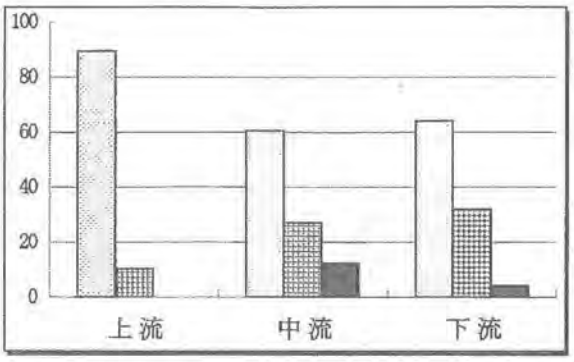
円　グラフ：流域全体　　棒　グラフ：流域別

上流：永源寺 中流：八日市 下流：近江八幡、安土

問４あなたの家では浄水器をつけていますか

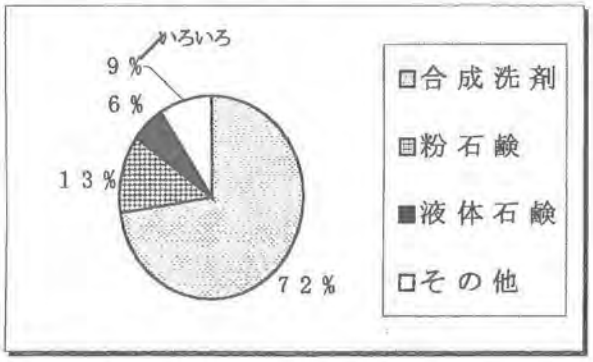
（単位は全て％）

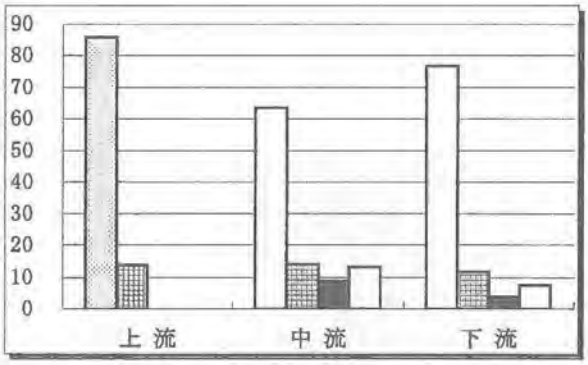




1.下流域で使用が高く上流域が低いのは、問３美味しさと反比例で、上流域では浄水器が必要とされていないことを示している。
2.京都や大阪のデータと比べてみたい。

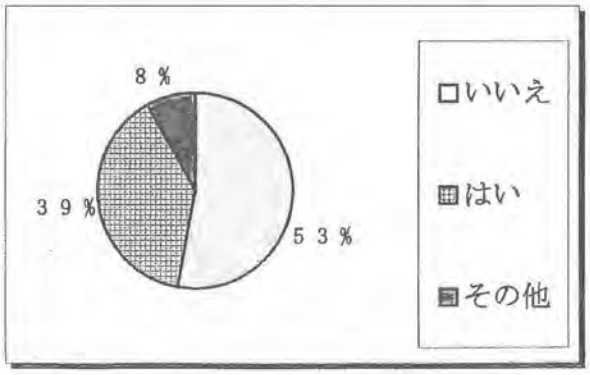
問５あなたの家の洗濯用洗剤は、主に何を使っていますか

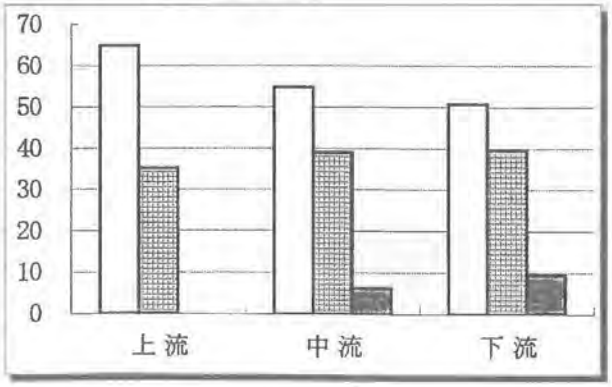




1. その他も含め合成洗剤の使用が80％を超える。贈答品などでもらう機会も多いのか。
2. 粉せっけんへのこだわりには流域で差がなく10％強ていど。
3. 洗濯洗剤と水質汚染の関係については、新たな取り組みが必要であろう。

問６あなたの家では、洗濯にお風呂の残り湯を使っていますか



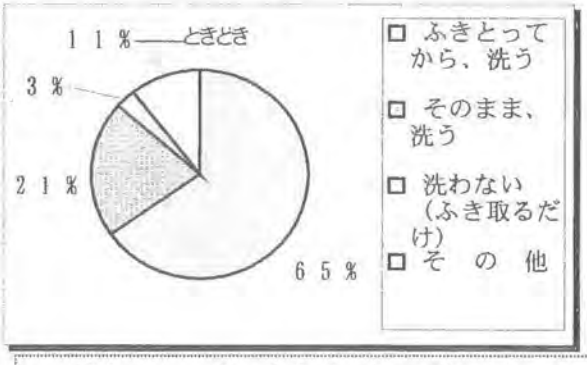


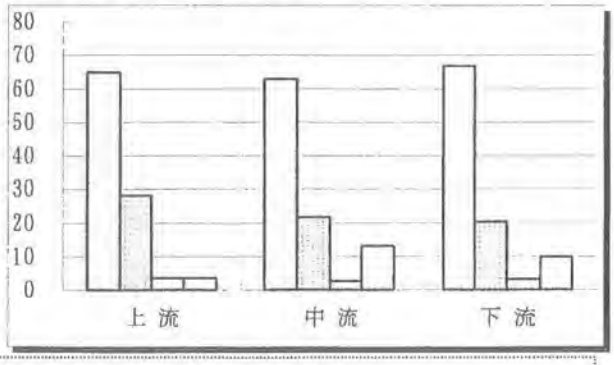
節水と言われる割にはお風呂の残り湯を使っている家庭が少なかった。しかし、これはお風呂場と洗濯機の置いてある家の構造上のこともあるので、一概には言えないが、下流ほど残り湯を利用している人が多いのは水に対する配慮の現れと見て良いのか。

円　グラフ：流域全体　　棒　グラフ：流域別

上流：永源寺　中流：八日市　下流：近江八幡、安土

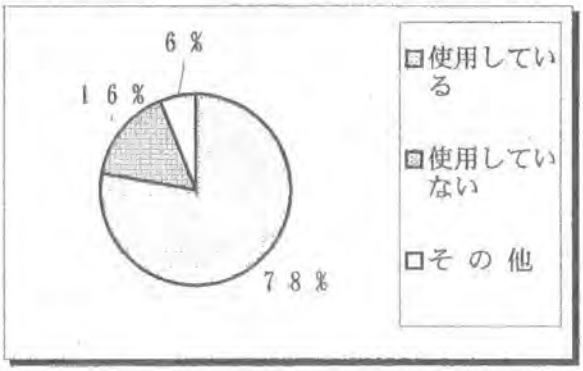
問７あなたの家では、フライパンの油汚れをどう処理していますか

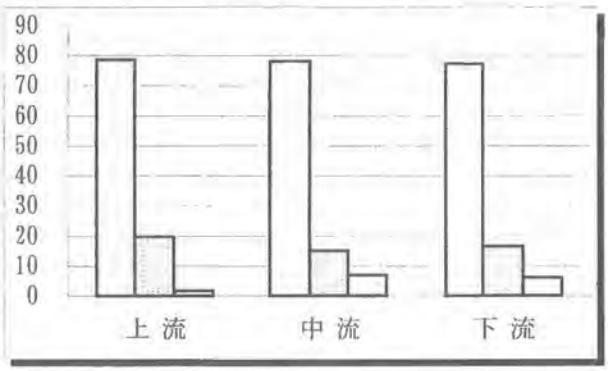




1．洗わない、時々も含めると80％に近い人が油汚れに対し意識している。
2．他の設問に比べて、排水に対する意識が優等生的に高いのはなぜか？
3．下流域の方が汚れに対する実感をもっているようだ。

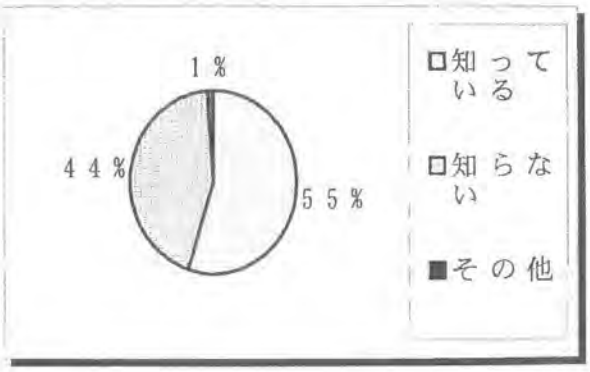
問８あなたの家の台所では、微細目ストレ-ナまたは水切り袋を使用していますか

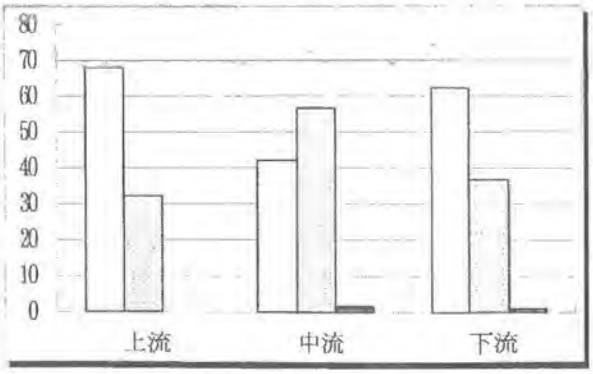




1.流域での差はない。使用していないは微細目ストレーナを使用していないこと？
2.水質汚染と微細目ストレーナの関係は密なのだろうか、特に油汚れなど下水処理の専門家の意見が聞きたい。
3.また、ストレーナのゴミの後処理の方法についても調査が必要である。

問９あなたの家の生活排水(台所やお風呂の水)は、どこへ流れているか知っていますか



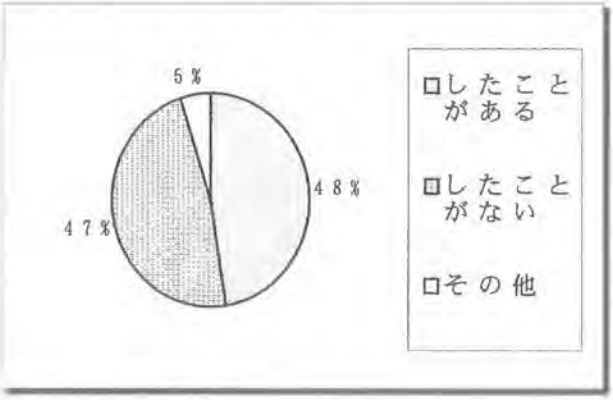


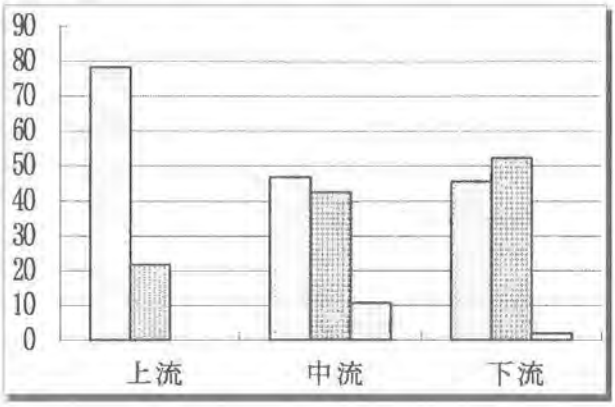
1.問いが悪かったのか、知らないが全体で44％と高い。排水への関心は低いのか。
2.上流域は川、下流域は琵琶湖が見えていて、中流域は下水道処理場か？
3.下水道施設の有無を一緒に調査する必要があった。

円　グラフ：流域全体　　棒　グラフ：流域別

上流：永源寺　中流：八日市　下流：近江八幡、安土

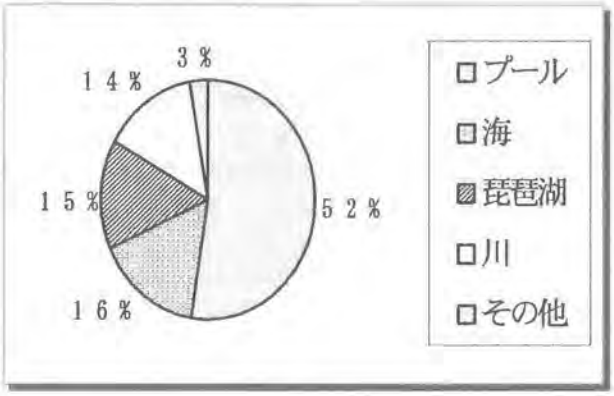
問１０ あなたは、家の近所の川で水あそびをしたことがありますか

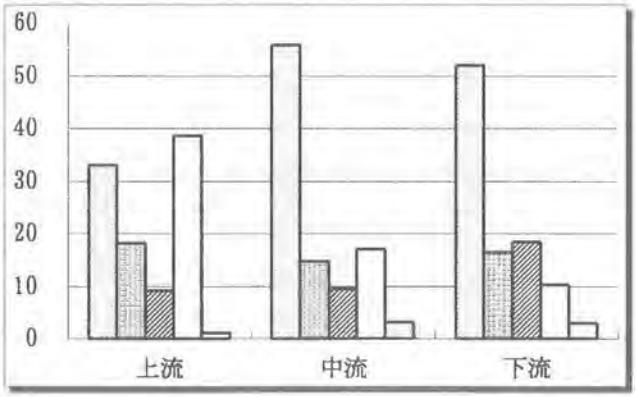




1．流域全体では、「水遊びをしたことがある、ない人」の割合は約５０％ずつ。
「したことがある」は、上流の人は約８０％に対し、中流、下流の人は５０％に満たないことから、中流、下流では川の汚れに起因しているのではないかと思われる。

問１１ あなたは、ことしの夏どこへ泳ぎに行きましたか

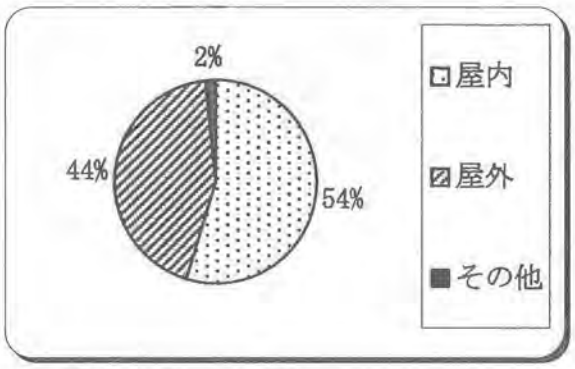


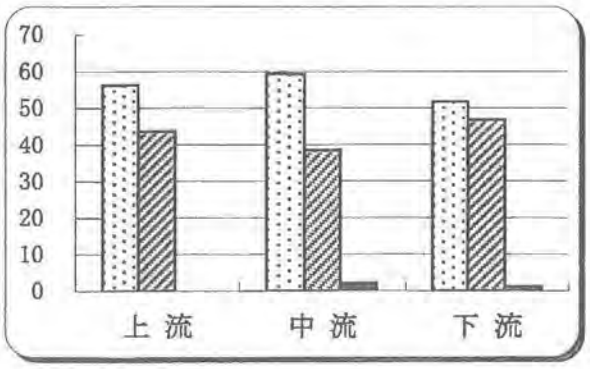


1．滋賀県の中下流域のほとんどの河川は現在泳げる環境にはない。
2．傾向として出かける家庭は重複記入も多い。重複しているもののカウントの仕方がどうか？
3．プールが琵琶湖に隣接したものであるケースが多かったので、別の切り口での設問が必要か？

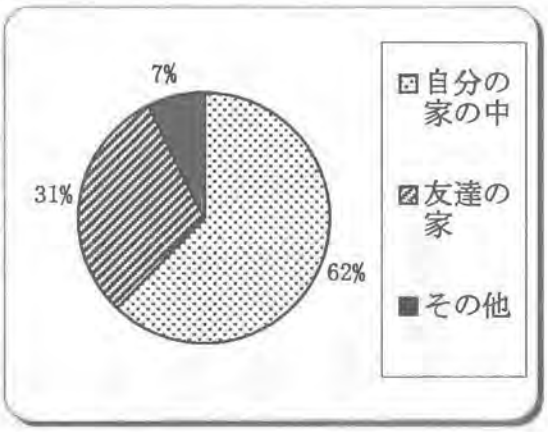
問12　遊び場　調査 重複記入件数比

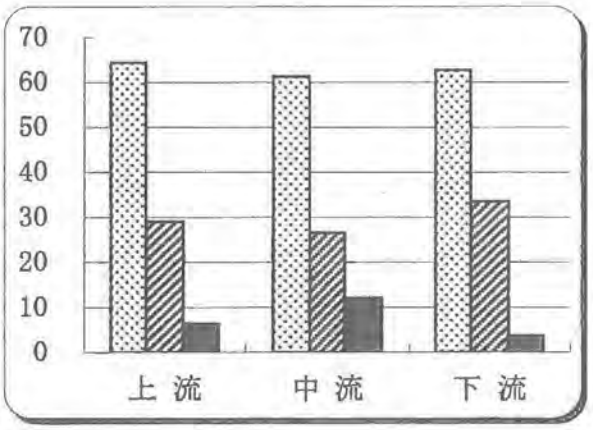
円グラフ:流域全体　　単位は全て%　　棒グラフ:流域別



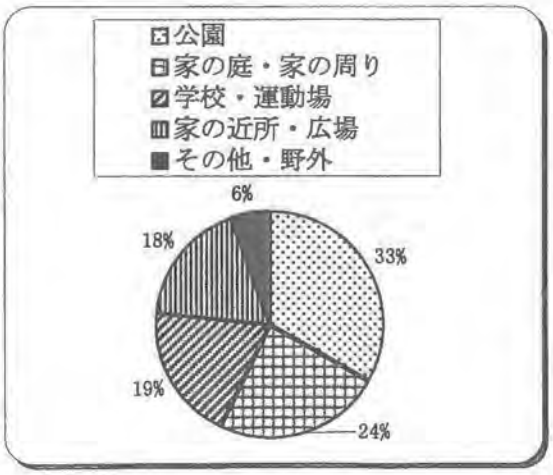


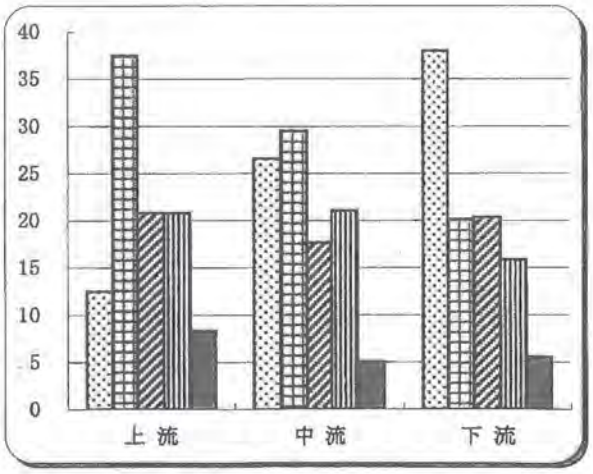
屋内として主なところ





屋外として主なところ



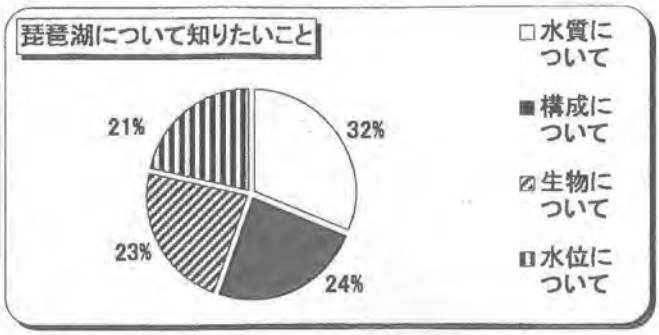


1. 夏休み後の調査にも関わらず圧倒的に屋内で過ごすケースが目立つ。
2. 流域での差異はすくない。ほとんど同じ遊びのパターンである。
3. 子供達の遊びの文化がほとんど室内になっている。ゲームか？塾通いの制約か？
4. 少子化や住宅事情（面積）がよくなり、家の中で過ごせる空間が出来たためか。
5. 屋外での遊び場については流域での差異がでている。施設、フィールドの違いで自然が家の周辺に多い流域と、公園での遊びの多い流域とが、はっきり示されている。
6. 自然を多く残した公園づくりが望ましいのではないだろうか。

問13（琵琶湖について知りたいこと）

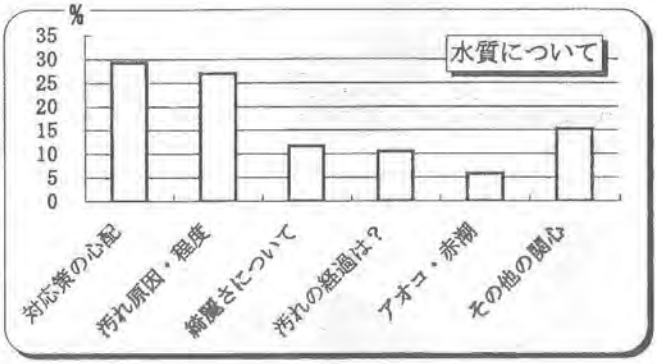
順位	全　体	%
①	水質について	31.0
②	構成について	24.4
③	生物について	22.9
④	水位について	21.4
合計		100.0

全体



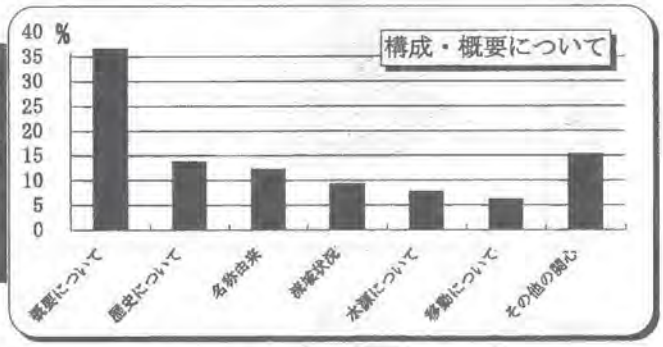
	①水質について	
順位	記入内容まとめ	%
1	対応策の心配	29.4
2	汚れ原因・程度	27.1
3	綺麗さについて	11.8
4	汚れの経過は？	10.6
5	アオコ・赤潮	5.9
6	その他の関心	15.3
合計		100.0

①水質について



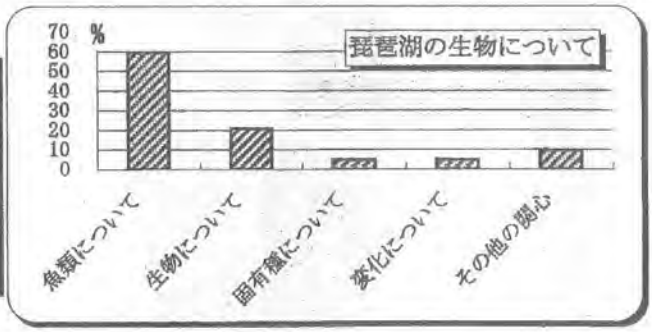
	②構成について	
順位	記入内容まとめ	%
1	概要について	36.4
2	歴史について	13.6
3	名称由来	12.1
4	流域状況	9.1
5	水源について	7.6
6	移動について	6.1
7	その他の関心	15.2
合計		100.0

②構成について



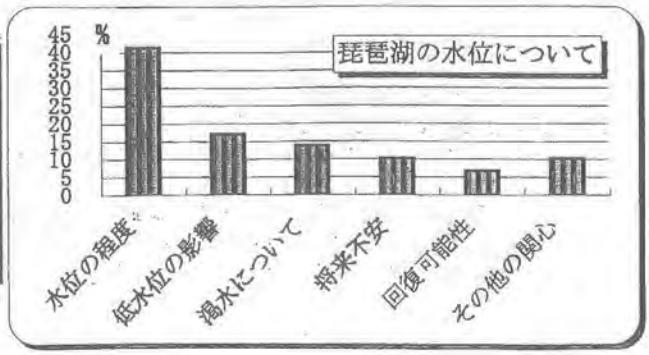
	③生物について	
順位	記入内容まとめ	%
1	魚類について	59.7
2	生物について	21.0
3	固有種について	4.8
4	変化について	4.8
5	その他の関心	9.7
合計		100.0

③生物について



	④水位について	
順位	記入内容まとめ	%
1	水位の程度	41.4
2	低水位の影響	17.2
3	渇水について	13.8
4	将来不安	10.3
5	回復可能性	6.9
6	その他の関心	10.3
合計		100.0

④水位について



問 13(前ページ)「琵琶湖について知りたい事」の考察

1．琵琶湖の水質についての関心が高いのはやはり日頃の情報が多いからと思われる。
2．琵琶湖の歴史、大きさ、広さ、深さ、水量、など概要の知識に関する質問が多かった。
3．ついで生物（特に魚類）に関する関心が多い。
4．調査時が丁度 最低水位－90ｃｍの時だったので水位についての関心も高かった。

問 14 感想部の考察（記入内容が多様なためグラフ化は出来ず）

アンケートの感想部については、自由記入の為非常に多岐になりグラフ化は困難で、記入内容の要約と意見をのべる。ただし個々の記入内容には大変貴重な内容もあるので 180 件の記入内容は問 13 の関心事の結果と共にすべて原文を付属資料として保存する。

内容の分類	件数	%	記入内容のまとめ・意見
1.琵琶湖の保全について	32	17.8	アンケ-トでは琵琶湖の汚れに関する直接的な問いは設定していないが記入内容では常にトップの関心事となっている。
2.水を大切にしたい	30	16.7	1.4.5.7.8.の記入内容とも関連している。したがって水環境への関心としては 60%を超える高率である。
3.話し合いしたこと	17	9.4	このアンケートの一つの目的が、この機会に家庭内での環境問題に関する対話の場を作ることにあったので一応の成果あり。
4.洗剤について	16	8.9	合成洗剤と粉せっけんの使用について、より正しい使用法の啓蒙が再度必要と感ずる。
5.琵琶湖の水位について	14	7.8	このアンケートが丁度 最低水位（－90ｃｍ）の時に実施されたため関心も高かった。
6.知らなかったこと	14	7.8	身近なことで意外と知らなかったことに気付いている様子がこの感想文から伺える。
7.飲料水について	13	7.2	滋賀県は比較的恵まれた水環境にあるため、逆に飲み水に対する関心（有り難さ）の低さも感じられる。
8.食用油の処理について	13	7.2	ほんとうのところ一番よい方法はどうか？との質問があった。洗剤と同様に児童に対する設問として多少無理があった。
9.生物について	11	6.1	琵琶湖への関心事では、生物に関するものが多くあった。他の項目とも関連するが、琵琶湖に関する基本的な知識についての質問事項が多かった。
10.その他	20	11.1	自由記入のため、内容が多岐になり上記の分類に入らないものを「その他」としてまとめた。
記入合計	180	100	この感想部の記入件数 180 は全体の 15%である。

アンケート全体の考察（調査者の意見）

● 今回の調査は記入者を小学６年生という、生活者とは言い切れない児童を対象にしたことで設問に多少無理があるものもあった。

しかし時代の移り変わりと共に、大人も子どもも生活様式（ライフスタイル）の大きい変化が現れており、このアンケートからもそれが実感できた。

● 飲み水に対する水源の知識も、きれいな水が目の前に見えている地域は無関心に思われる。

飲み水のおいしさは基準がないので感覚だけの評価だが、京都や大阪のデータと比べるおもしろいのではと思われた。

● 洗濯用洗剤に何を使っているかの問いも、ほとんどが粉石けんに○をつけていたが商品名を書く欄を設けていたのでその点で判断した。その結果多くの答えが合成洗剤だった。

合成洗剤と粉石けんの違いは難しい設問だったと思うが、滋賀県の石けん運動が引き継がれてない現実を改めて考えさせられた。

合成洗剤と石けんについてはさまざまな考え方があるが、再度、洗剤の使用法についての正しい方法・知識を啓発する必要性を感じる。

● 当然ながら環境面でも大人（親・先生）の影響が大きいと思われる。

問７のフライパンの油汚れをどう処理しているのかの問について、この回答だけが他の設問の答えに比べて大きく優等生的な答えになっていた。これは調理実習の時にそういう学習をしていると聞いたが、子どもから親へ教えていることも考えられる。

しかし知識と行動が一致しているのか、いささかの疑問を感じた。

● 今回のアンケートは子どもを対象にしたと言うことで、水遊びをしたことがあるかという設問と、この夏にどこへ泳ぎに行ったかも聞いて、川の流域で、水辺についてどう関わっているかを知りたかった。やはり川が目の前にある地域とそうでない地域は答えが分かれたが、泳ぎの方はほとんどプールが多く、川という答えは少なかった。

琵琶湖には流入する多くの河川があるが、県内の河川は学校での指導によるのか、水に親しむことができない護岸工事が行われている可能性が高いのか、そのほとんどが中下流域では現在泳げる環境にはないと思われる。

● 遊び場についても全国的傾向とも同じで、今の子どもが外で遊んでない様子がよくわかった。ただ屋外での遊び場の違いは施設の差やフィールドの違いであろう。

● 琵琶湖について知りたいことについては、さまざまな意見が出されていたが、調査した時期が琵琶湖の水位が－９０cmになり、マスコミなどで話題になっていたのでそのことを気にかけていることがよくわかった。でも貴重な存在価値の琵琶湖についての意識がそれほど感じられてないのではないかとも思われる。

その中でも少ないながら、鋭い感性を持つ児童の意見に希望がもてた。

● 感想の内容からも「頭ではわかっているが」行動が伴わない実態が読みとれる。社会全体として小学校の年代において、もう少し自然の中で体験学習の場を多くして地域に密着し、自分で発見し考え行動に結びつく環境教育が必要だと感じた。

最後にこのアンケートにご協力いただいた皆様に深謝申し上げると共に、この結果が今後の地域や環境学習の場に少しでもお役に立つことを念願いたします。

アンケート 取り組み活動の総括（グループ活動として）

（グループ活動の成果および反省・今後の課題）

（1）良かったこと

● グループで初めての共同作業を進める過程で、よりメンバー間の相互理解や意志疎通が図られてグループワークの目標も定まり活動に弾みがついてチームワークが育ってきた。
全員参画による知恵と汗が、こうした活動の基本であることを改めて感じた。

● 対象者を小学６年生としたことで、より平均的な家庭のデータ抽出ができたのではないか。また、アンケートとしては全体で８５％という高い回収率がえられた。
（上流域：87.7%　中流域：89.1%　下流域：82.5%）

● 教育委員会や学校関係者の協力が得られ、今後の活動に結びつける足がかりが出来た。

● 流域別（上、中、下流）での水環境の違いの実態や関心の傾向がつかめた。

（2）不足反省点

● アンケート調査は初めての経験なので、対象者（児童）への配慮や記入方法についてのわかりにくさもあったのではないか。

● 児童を対象に「水とくらし」への設問としては無理な設問があり保護者と児童の意見・回答が混在する結果となった。

● 煩雑になるが水環境への負荷に対する程度が違う職種別や年代別などの意識傾向を調べる必要があった。

● アンケート設問全体から、「水とくらし」のどのような実態を把握したいのかなど、調査側の主旨目的に不明確なところがあった。

● 時間的な制約もありアンケート設問事項の検討不足は否めない。

（3）今後の地域作りへの課題・展開

●この結果をもとに今後の地域フォーラムや住民の意識啓発に、どのように活用していくかについて再度手段・手法を検討しなければならない。

●この結果をもとに今後の活動がパフォーマンスに終わらず、実効的かつ納得が得られる水環境改善への具体的な提案に結びつけていかなければならない。

●今後、「水環境モデル地域づくり」を目指すには、継続してこのようなアンケートを実施し、改善度合いを追跡する必要があると考える。
その際この第一回目の反省点を改善し、より良いアンケートをつくるべきだ。

●このアンケート結果を学校教育関係者や地域社会の環境学習の場にどのように活用するかについてさらに検討を要する。

活動報告

〈Ⅰ 東近江水環境自治協議会との連携〉

私たちのグループ研究のテーマは、「環境を切り口とした地域づくり」である。

たくさんの環境問題の中から、滋賀の淡海にふさわしい「水環境」を題材として、生活者の視点からとらえ、「気づき」から行動への提起に臨んでみることとなった。

グループの立ち上げの少し前から、東近江（八日市市・近江八幡市・蒲生郡・神埼郡）地域で「住民を主体」とした自治組織の設立の動きがあった。琵琶湖の「内湖」といわれる「西の湖をきれいにしたい」という願いを流域単位で実現させるために行動を起こそうというもので、「西の湖を媒体として奇麗な水の琵琶湖をとりもどす」ねらいでもあり、私たちのグループの研究テーマとも合致し、流域単位の組織づくりや環境問題の行動等の身近な研究が可能であり、場合によっては一緒の行動も可能ということから連携を進めることとなった。

グループ討議が始まった３月段階での住民自治組織の範囲は、蛇砂川（長命寺川）流域の２市２町（近江八幡市・八日市市・安土町・永源寺町）であったが、この２市２町以外の市民の参加も見込まれ、限定するよりは拡大が是ということから「東近江」地域に拡大が行われたため、結果として東近江のなかの１河川流域での取り組みということとなった。

その後に発表された「マザーレイク２１」の流域単位が県下７流域に分けられ、この東近江地域も「八日市流域」として公表された。

名前こそ違うが、マザーレイク２１の「八日市」流域と私たちが連携を進める「東近江」流域は同じ区域である。

そして、この流域は、私たちが対象とした蛇砂川（長命寺川）と愛知川・日野川の３つの河川流域を包含している。つまり、東近江水環境自治協議会は、これらの３流域の緩やかな連携をめざす協議会であり、今後も多くの組織づくりが展開されるもので、今回の対象は、蛇砂川という１つの河川流域ということである。

これは、この区域に限らず「集水域」単位は、個々の河川流域単位での組織から、各エリアにおける河川流域組織の集合を図るべきものかと考えられる。

今回の研究テーマが、これから始まる「琵琶湖総合保全計画（マザーレイク２１）」の第一歩の課題であり、現実に動き出している組織が２１世紀の新しい取り組みのキーワードの一つと言われる「パートナーシップ」の確立の側面的支援ということも自覚して、進めていくことが必要である。

東近江水環境自治協議会との出会いは、第１回グループ会議の２０００年5月２０日から始まった。

当時、東近江水環境自治協議会設立準備会の座長であった丹波さん（7月８日の協議会設立総会で会長に就任）と近江八幡市の冨士谷さんを招き、蛇砂川流域での活動テーマや今後の計画に対する我々の意見を出して、現地の感触をつかむための意見交換を行った。

活動指針や規約案からは、新しい型の工夫や熱意が感じられ、丹波さんの人柄に触れて今後の連携についての確信を得た。

私たちのグループでの研究を進めるに当たって、流域の全小学校6年生を対象するアンケートを行うことを協議し、アンケートの配布時に各市町の教育委員会や学校への依頼で連携を行い、協力が得られやすい状況を作り出すことができた。

また、環境創作狂言への取り組みでは、大蔵流狂言師の木村先生との打ち合わせの場所で丹波会長をはじめ、地元漁師の奥田さん・ヨシ職人の竹田さんらの参加を得て、かっての状況や現状を語ってもらい、具体的なイメージングが図れたことと、上演に際しての実行委員会では更に連携を進め、ともにフォーラムの成功をめざしている。

〈Ⅱ　環境創作狂言について〉

琵琶湖や内湖、その流域の現状を地域の人たちに認識してもらい、環境にやさしい生活の実践を図ってもらう気づきの手法として、創作狂言を考えた。

狂言は、人間の「生きざま」を風刺する手法で、自分達の日頃の執着や悩みの「本質」を観客に気づかせ、反省と明日への希望を見出せる芸能だと思う。

現実社会の中では、私たちは同じ矛盾（現実）の上に立って生きているのだから、お互いに批判したり対立したりすることはあっても、相手を否定することは出来ない。現実の否定は、自他共の生命への否定であり、共存への道を閉ざしてしまうのではないか。

大蔵流狂言師　木村先生との懇談

虚構（フィクション）の世界でのみ、否定は許されるのだと思う。

そこで私たちは、伝統的な古典芸能である狂言の形式から、返ってリアリティーを引き出すことができ、水環境問題をお互いに考え合って今後の生活に生かしていく体験の場に出来るのではないかと考えた。

こうしたグループの思いと狂言師木村先生の理解の中から環境問題をテーマにした創作狂言が生まれたのである。

〈西の湖船上会談〉

私たちメンバーは、大蔵流狂言師の木村先生を西の湖にお招きして船に乗って頂いた。その周航のあいまにカイツブリが葭の群生に出入りし、アオサギが出迎えてくれる湖上での会談がはずんだ。

西の湖での船上会談

東近江水環境自治協議会の丹波会長から西の湖の歴史、生い立ち、環境変化について人間の目線から見た自然との共生を願う思いが語られた。葭職人の武田氏は、植物の目線から見た今昔の話を語ってくれた。

また、セブン・ドロップスからは、水環境境についてのそれぞれの思いが飛び交い、こうした中で、創作狂言のイメージが醸成された重要な会談であった。そして、このイメージングから２ケ月後、シナリオの原案が出来上がり湖沼問題創作狂言「琵琶の湖（うみ）」は誕生したのである。この狂言は、２００１年６月２４日（日）に近江八幡市文化会館で公演が行われることに決定した。

〈「琵琶の湖（うみ）」のあらすじ〉

葭原（よしはら）を背景にして、葭笛（よしぶえ）が奏でられると、京都の祇園祭に登場する鷺舞が現れる。蛇砂川下流の西の湖を舞台にして、外来種のブラックバスは大名で、ブルーギルは太郎冠者である。琵琶湖を代表する在来種の小魚たち、鮒（ふな）、鯉（こい）、諸子（もろこ）、鰉（ひがい）、琵琶鱒（びわます）、鮠、（はえ）、鰕（たなご）、小鮎（こあゆ）の八匹の淡水魚が、それぞれの魚類の形をした天冠をつけて、これも祇園祭に行われる田楽を舞う。

創作狂言「琵琶の湖」のシナリオ打合せ

結末は、在来種の魚達が鳶や烏の力を借りて、外来種の魚を故郷に追い返すことになり、鷺舞と小魚達の喜びの田楽舞と葦笛の合奏が続く中で終曲を迎える。また、ここに至るま

でに、能の「三番三」の中の「鈴の段」も登場し、４人の黒子が観客の側に立った思いや神の立場で、コメントや批評を述べる。

良き時代の情緒（環境）と、近代的な開発による文明と利便性を有する現代と共存できるのかを、外来種の魚と在来種の小魚達とのやりとりの中で舞台は進んでいく。

「舞」あり、「葭笛」あり、「語り」ありで、華やかさと楽しさも備えたバラエティー形式の、湖沼環境問題創作狂言である。

〈作者紹介〉

木村　正雄

昭和４（１９２９）年６月２４日生。大蔵流狂言師。京都出身。京都在住。
芸名,木村　正雄。京都大学文学部卒業。
現在,京都大学留学センター講師。樟陰女子大学国文学科講師。
狂言師木村政一の長男。父及び１１世茂山千五郎に師事。
昭和　７（１９３２）年に(伊呂波会)のシテで初舞台。
昭和４４(１９６９)年１２月「七笑会」で『花子』
昭和４７(１９７２)年１２月「双の会」で『三番三』
昭和４９（１９７４）年１１月『双の会』で『釣狐』
平成　６（１９９４）年１１月『翔の会』で『枕物狂』を披く。
著書に『新作絵入り狂言記』がある・日本能学会（重要無形文化財団体指定）

茂山千五郎家では弟子筆頭で、「同門会」「七笑会」「双の会」「翔の会」を主宰した。狂言の普及・啓蒙に力を入れ,新作狂言を１８作創るなど、現代においての狂言のあり方にも一見識を持つ。
昭和５６(１９８１)年、自作自演の新作狂言『筵八幡』で,大阪文化祭奨励賞を受賞する。

〈Ⅲ 蛇 砂 川 現 地 視 察〉

セブン・ドロップスのメンバーが、これからの活動を進めるに当たって、現地の状況がわからないままでは、イメージが膨らまない面もあり、認識を共有する意味でも、現地踏査は欠かせないことでと、下流から上流へさかのぼった。

蒲生野を蛇のように屈曲しながら流れる様子に由来してその名前がつけられたという蛇砂川は、永源寺町を源流とし、下流の西の湖を経て

蛇砂川の中流付近

長命寺川となって琵琶湖に注いでいる。

私たちのグループは、県下全域からの個々人の集まりであることから、「東近江」といういわゆる「ローカル」なところの土地勘や地理感が全くないので、今後どうすべきかを考えた結果、現地踏査で少しでも認識を深めようということになった。

途中で中小河川の合流部を見たり、新たな河川工事の計画箇所を見たりした。水が、源流から湖へそそぐまでに、住宅や工場等の密集する市街地を経ることによって汚れていく様は、この地域に限らず、滋賀の地形上において琵琶湖へそそぐ川の共通点であることをあらためて感じられた。

琵琶湖は、汚れざるを得ない状況にあるとすれば、汚れないようにするためには何をすればよいのか？

今後の方向を考える大事な一日となった。

〈Ⅳ 水とくらしの語らいフォーラム 〉

２０００.10.1　　９：30~11：55
ピアザ淡海３階　　３０５号室

<フォーラムの目的>

川の流域を水環境として考え、水源から琵琶湖までの間で水と関わって仕事をしている方々から、それぞれの水への思いを語ってもらい、水利用の違い、文化の違いを超えて、思いをどう共有するのかを考えて見た。

コーディネーター	岡田玲子さん（水と文化研究会）		
パ　ネ　ラー	山に活きる	辻善也さん	（永源寺町森林組合）
	農に活きる	竹内正企さん	（農業・詩人）
	葦に活きる	竹田勝博さん	（葭職人）
	漁に活きる	今井博章さん	（鮎養殖業）
	商に活きる	西村恵美子さん	（西勝酒造）

<パネラーの語り>

以下にコーディネーターと各パネラーのお話の要旨を発言順にまとめました。

・**岡田**：「現在、滋賀県立大にて、水とくらしについてまさに勉強しており、上水道が入る前の暮らしについてお年寄りから聞き取りをして、歴史に残らない当たり前のことを調べています。70歳以上の主婦が私の先生です。今日も現場のスペシャリストから、お話が聞けるのを楽しみにしてきました。」

・辻　：「水源の山から考えてみると、山の保水能力はどんどん低下していると思います。

理由は山仕事では生活できないので手入れもできず山が荒れて表土の流出が始まっているからです。県の予算で手入れもしていますが必要面積に対し毎年１％位しかできません。木材の価格がアップすれば別ですが、困難な中で努力している毎日です。」

「水とくらしを語らいフォーラム」

・竹内：「兵庫県の出身でダム建設のため移住し、大中に来て農業をしています。以前は大量の肥料と農薬を使用して大量生産を目指したこともありました。しかし肥料と農薬が琵琶湖の水質悪化と関連すること、減反政策の拡大もあり、今は反当収量は落としても、安全な、お米づくりを支持する消費者、琵琶湖の水を飲む消費者との連携を考えています。」

・竹田：「西の湖の近江葭を商売にしています。西の湖も大中と小中の干拓工事のときに同じ話がありましたが、葭地が私有地だったため地主の承諾が得られず、残りました。しかし葭の需要も減り中国からの輸入もあるので、葭を刈ったり、焼いたりは少なくなっています。湖の景観とか生態系を守る役割があるので、商品価値のない葭は県が３～５年に１度刈り取るようになりましたが十分ではありません。品質的には琵琶湖総合開発で春先の水位が上がり悪影響がでています。西の湖については水の汚れとため池化が気になります。湖岸で毎日、水を見て上流の人達に呼びかけたいと考えています。」

「水利き試飲」コーナー

・今井：「近江八幡で地下水を使って鮎の養殖をしています。鈴鹿山系や愛知川からの地下水ですが河川改修などで減っているようです。また魚の住みかも減って稚鮎も減っています。最近は養殖よりも栽培漁業と言う考えになってきていますが琵琶湖は天然の大きなイケスです。しかし上流にダムなどができて、琵琶湖の魚にとって環境は悪くなっているようです。」

・西村：「酒造業でやはり鈴鹿山系の地下水を使っています。水を大量に使う関係から水に

関心をもったのですが、近江八幡は豊臣秀次の城下町として給排水が設計され、排水は八幡掘から田んぼへと流れていましたが近年は家庭排水が増えて八幡掘がヘドロで埋まって浚渫しなければならない事態になり、浚渫したら浚渫土で池が埋められるという現実から、先ず家庭から汚れた水を流さない、もっと水を大切にすることが大切だと考えています。」

・**岡田**：「まとめとして、今回のフォーラムから環境を変えるのもストップするのも、人間であると強く感じました。その人間の考えと力が正しい選択をしていくことに期待したいと思います。」

<利き水試飲会>

9種類の主に天然水からおいしい水を選んでもらった結果は、地元比良山系の水が第1位となった。

<フォーラムの反省点>

・開催日時が、日曜日の午前中ということもあって、参加者は延べ４０人余りであった。また、参加者の集客力についての工夫も足りなかった。
・パネラーの５人は少し多かったが、幅広い話しを聞くことができた。
・おうみ市民活動屋台村の一つとして開催したため、熱心に参加してもらっている人にとっては、落ち着かない会場の雰囲気にならざるを得なかった。
・水とくらしを考えたフォーラムであったが、パネラーの立場も違ったので、水に対する思いや視点の違いがよく理解でき、今後のワークショップへの繋がりが出来た。

□ 特別寄稿

☆『びわの湖（うみ）』について

大蔵流狂言師　木村　正雄

「マザーレーク２１－琵琶湖総合保全計画―」として，「水質涵養」「自然的環境・環境保全」を三本の柱とする「健全な琵琶湖の次世代への継承―琵琶湖と人の共生」という市民活動が，近年盛んに叫ばれ、行動するグループが増えてきました。
この運動は，単に琵琶湖を有している滋賀県だけの問題ではありません。下流の宇治川や淀川流域の京都府や大阪府の問題でもあり，上流域の福井県や岐阜県を含んだ日本中部、いや，

日本全土の問題でもあるわけです。

今年,南アルプスを散策してきて、透明度の素晴らしいフランスのアヌシー湖に驚き,その原因を問い質した所,湖周辺は大観光都市であるにもかかわらず,その汚水は一滴も湖の中に入れず、遥かな下流で処理されているとの事。

行政が遅れている日本では考えられないことでした。行政の認識が遅れていれば、その行政の下に住んでいる地域生活者の意識が遅れているのは当然で、早晩、琵琶湖はドブ溜りになりさがると思われていた矢先の、遅蒔きながらの活動です。

私も京都に住んでいて,琵琶湖の恩恵に預かっている者として,何らかのお手伝いができればと,この作品を創作しました。

この狂言的バラエティショーには,京都の祇園祭に登場する「鷺舞」や「祇園田楽」も現れ,能の『翁』の『三番三』の「鈴の段」も登場します。葭で作られた葭笛が奏でるよき時代の情緒が,近代的な開発と共存出来るのか、在来種の小魚,外来種の魚とに象徴的に語って貰おうと思っています。かっての「背高泡立ち草」は、現在では在来種と共存しています。最も,徹底的な除去作業の後にですが・・・・・。絶望的ではありますが、ブラックバスやブルーギルも共存出来ればと,淡い夢は持っては居りますけれども・・・・・・。

☆じわじわと広がった７色のドロップ

財団法人　滋賀総合研究所　秦　憲志

じわじわと味が広がっていく七色のドロップ

１年間にわたる「おうみ未来塾」の活動、ご苦労様でした。

セブン・ドロップスの活動経過を拝見させていただき、「水環境を切り口にして地域づくりに取り組む」、その一つの方向を示すため、よくぞここまでつくりあげてきたなと、正直、皆さんの行動力に感心しました。

私自身は、ほんの一端ですが、アンケート企画やまとめの段階で関わらしていだき、エネルギッシュな皆さんから大いに刺激を受け、本当にありがたかったなと思っています。

「おうみ未来塾」の活動成果を発展させ、今年は、湖国21世紀記念事業で、環境創作狂言や流域ワークショップ、フォーラムを行うということを聞き、本当にすごいことだなと思います。地道な研究活動や作業を積み重ね、環境を改善していくためには「人々の意識を変えていくことが最も大切なこと」だと気づき、創作狂言を試みる。ユニークな着想がすばらしいと思います。

アンケートの中で小学生の子どもたちが、琵琶湖の生物の中で魚類についてもっと知りたいと答えています。創作狂言は、琵琶湖の魚たちが主人公になるということです。子どもたちにも鑑賞してもらって、興味や関心がドンドン広がっていけばいいなと思います。

セブン・ドロップスのドロップは『滴』という意味だそうですが、あめ玉のドロップとも重なります。口の中でじわじわとドロップの味が広がっていくように、県内各地の地域

づくりにおいても、セブン・ドロップスの七色の味がじわじわと広がっていけば楽しいなと、期待しています。

☆流域でつながった隣人への配慮を復活させるもの

京都大学生態学研究所　今田　美穂

一昨年の春、私は、関西に移り住み、滋賀県で農林業に携わる人びとに、そこでの水に関わる暮らしについて、幾たびか話しを聞く機会をもった。そのことで、豊かな山々からしみでる湧水が河川水となり、人々の労苦をもって田やムラを潤しながら琵琶湖にたどり着き、その下流にある人々の暮らしをも支えてきたことを、多少なりともかいまみることができた。

セブン・ドロップスが行っていることは、そういった「在地で生きていく術（すべ）」を、語り継いでいく試みであると思う。そして、人々の暮らしの感覚というものを、蛇砂川流域という単位で見直すと同時に、上－中－下流での水へのまなざしの違いを浮き彫りにしようとしたのである。生活者が田や畑を耕しながら積み重ねてきた経験は、国が定めた法制度とも異なる、その土地なりの細やかな取り決めとして伝えられてきた。しかし、農業県といわれた滋賀県でも、都市的生活を選択する人が大多数となり、それらを新たな生活領域で再検討していく必要があるのだと思う。その一つとして、流域圏は注目されている。実態として水をとりまく世界をイメージし、流域でつながった隣人への配慮を復活させるものが何なのか、その答えがわかるのは間近であると期待したい。

☆セブン・ドロップスの皆さんとともに歩んだ日々に思う

東近江水環境自治協議会会長　丹波道明

セブン・ドロップスの皆さんと初めてお出会いしたのは２０００年の５月２０日、私の６９歳の誕生日だった。それから１年も経っていないのだが、志が同じであるせいか昔からの仲間の様な気がします。

セブン・ドロップスのメンバーに出会って先ず感じるのは、多彩な個性であります。

７人の皆さんは、それぞれ自分が体験してきた知識や技能の違いという個性の差があるのは当然としても、議論や仕事の進め方についても様々な違いを示します。

即ち、夢を掲げ、強引に引っ張ろうとする堤さん。それを現実という杭につなぎ止めようとする澤さん。意見が拡散し出すと厳しく「突っ込み」を入れる遠藤さん。上手に「ぼけ」ながら現実的な解決策をさりげなく提示する広実さん。　環境問題から離れて議論がさまようと鋭い批評で引き戻す石垣さん。心配しながらも前へ前へと車輪を回し、いつの

間にかことを進めている小澤さん。全体を穏やかな雰囲気でくるむ有澤さん。といった具合であります。

そして、これらの個性は、それぞれが属する組織のしがらみを超えて、自ら設定したグループとしての活動目標を一つ一つ達成しつつ、より大きい目標－創作狂言「琵琶の湖(うみ)」上演に対して、うまく結集されつつあるように思うというのが私の次の印象であります。

７人のメンバーが設定したこの大きい目標は是非成功させなければならない目標なのです。それはまた何故か？

２１世紀のわが国が必要とする人材についてのキーワードは、世の為人の為に何がなし得るかを考える熱き思い（志）があること。様々な枠組みを乗り越えられる個性を持つこと。その個性がぶつかり合い、新しい物事を苦しみ楽しみながら創造出来る場の設定が出来ること。そして、力を合わせたら出来たという成功体験の積み重ねで自信をつけること。最後に、他人を、いやあらゆる「いのち」を思いやれる心を持っていることであると私は思っています。

そして、それらキーワードの達成実験が、まさにおうみ未来塾に学ぶセブン・ドロップスの活動なのだ。しかも、今その第一歩が達成されようとする段階にまで来ているのだ。

東近江水環境自治協議会は、この「７つの水の滴」が作り出した創作狂言「琵琶の湖(うみ)」上演という企画を、一緒になって実行し先ず小川のせせらぎをつくりたいと念じています。

それはこの成功が、セブン・ドロップスにとって大切であるのと同様、当会の成長にとって欠かせないプロセスと考えているからであります。

一つ一つ目標や課題を達成しつつ自信をつけ、他のせせらぎもいざなって新しい世紀の光に輝くこの「７つの水の滴」を大河にしたい。

これが私の夢であり７人の楽しい仲間に対するエールなのです。

総括とこれからのこと

〈研究活動のテーマと目的〉

セブン・ドロップスは、環境グループとして集まったが、環境問題のみで活動を行うのではなく、地域づくりを主眼において研究活動のテーマを「環境を切り口とした地域づくり」と設定した。

このテーマの趣旨・目的は、環境がまぎれもなく日常の問題になった今、私たちの暮らしの中で最も身近な「水」、そして人々の生活の場である「流域」を学ぶ中で、私たちがどういう形で、そこからどういう地域づくりへの行動を起こす事が出きるのか、そして、どう流域の人々を巻き込めるのか、その仕掛けづくりを考え、その手法を探るものであった。

〈現場に学ぶ〉

グループ活動は、現場を見て学ぶことからスタートした。「現場主義」という考え方である。これは、調査活動を行う上での大切な部分である。私たちは早速、グループ活動のフィールドとなった蛇砂川の現場調査を、地元の人たちの参加も得て行ったほか、環境創作狂言のイメージングのため、大蔵流狂言師の木村先生をお招きし、西の湖の変遷、ヨシ群生や水質を調査しながらの学習も行った。

また、県外視察として行った特定非営利活動法人グラウンドワーク三島の視察は、活動を進めていく上で、重要な部分となった。

このように、グループは、時間の許す限り、現場へ出かけ、そこでさまざまな人に出会い、教えて頂きながら学習を行ってきた。

〈グループ活動の原動力〉

昨年４月から本年２月末までに行った私たちのグループ活動は、実に５０日を超えた。

メンバー各自がそれぞれ自分のフィールドを持ち、仕事、家庭、気力、体力の調整を図りながらの活動であった。

このエネルギーの原動力はなんだったのだろうか、と思わずにはいられない。

一つに考えられるのは、活動を行うなかでの、メンバー一人ひとりの想いが一致したことであろう。この共有できた想いとは、なんだったのだろうか。

この核心部分については、まだ十分に話し合っていないが、メンバーが一つのテーマで自分の目的をかなえつつ研究をしていくなかで、グループの絆は強くなっていったことは確かである。

いずれにしても、私たちセブン・ドロップスは、３月の卒塾後も活動を続けていくことになっている。私たちが計画した活動が無事終了した時点で、ゆっくり話し合ってみたいところである。

〈グループ活動に弾みをつけた環境創作狂言〉

グループメンバーの一人の提案で始まった環境創作狂言づくりは、グループ活動に思わぬ弾みをつけた。この狂言のイメージづくりということで、西の湖での「船上会談」も実現でき、シナリオづくりをお願いした大蔵流狂言師の木村先生の出会いもグループに力強い励みとなった。

グループ活動の当初計画のメインは、蛇砂川流域で生活している人々の「水とくらしにに関するアンケート調査」の実施であった。しかし、湖国２１世紀記念事業にまで、発展したのは、創作狂言というユニークな着想が出てきたからである。さらには、この創作狂言づくりがきっかけで、東近江水環境自治協議会の皆さんとの協力関係もより強くなった。

〈活動助成資金の獲得〉

私たちは、活動の目的を達成していくための資金づくりとして、県の活動助成事業にも

積極的に応募し、湖国２１世紀記念事業と夢エコ交流事業が採択された。

湖国２１世紀記念事業「水といのちの活動」支援事業では、ねばり強く第２回目で採択された。

この２１世紀記念事業として採択された活動名は、「環境創作狂言から気づく水とくらしへの思い」となっている。今日の環境問題とは、人間の意識の集積がもたらすものと、これまで行ってきた「水とくらしの語らいフォーラム」や「水とくらしに関するアンケート調査」で再認識した。

今、地域では従来のような地縁組織や自治会・学区単位を中心としたコミュニティが薄れ、そのため生活者一人ひとりの日常生活から起こる環境への配慮も失われつつあるのが現状の姿であると考えられる。

今回の２１世紀記念事業は、地域の人々が毎日の暮らしの中で起こる身近な環境問題について気づき、それをさらに大きく展開して「モデル地域づくり」を目指すものである。

〈環境への気づきをもってもらう仕掛けづくり 〉

地域の人々に環境への気づきをもってもらう仕掛けづくりとして、「奏でる・語る・鑑る」流域フォーラムを本年の６月２４日に近江八幡市文化会館大ホールで行うことになった。

活動の最初に設定したテーマ「環境を切り口とした地域づくり」の中で位置づけていた「地域の人々を巻き込む仕掛けづくり」がいよいよ実現の段階に来たのである。

この事業の推進にあたって、私たちと東近江水環境自治協議会との連携による実行委員会を発足した。

この流域フォーラムの「奏でる」は、フォーラムのオープニングとして地域住民参加によるヨシ笛コンサートを行い、「語る」については、環境問題の現状や「あるべき姿」についてゲストの先生方に語ってもらう。また、「鑑る」については、環境創作狂言で、琵琶湖や内湖、その日常生活から起こる環境への気づきをもってもらう設定としている。

狂言は人間の生きざまを風刺する手法であり、私たちの日頃の執着や悩みの本質を見る側に気づかせ、反省と明日への思いを見出してもらう古典芸能である。

現在の環境問題は、生活者自身の生きざまやライフスタイルが大きく関係している。「わかっているが、やめられない」という悲しい人間の性を風刺し表現するのは、まさに狂言の得意とするところである。

そして、この環境創作狂言から気づく人々の「美しい水とくらしへの思い」をさらに、次なる目標である「地域づくり」につなげる流域交流と環境学習のプロジェクトを動かしていくため流域ワークショップへと展開していく計画である。

〈おわりに 〉

私たちの活動は、限られた期間の中で忙しく慌しく過ぎた。

でも、楽しさと新しい発見と出会いのあるものであった。この思いを大切にして、湖国２１世紀記念事業を東近江の流域の人々とともに、さらに大きく展開していきたいと考える。

最後になりましたが、この報告書のために、お忙しい中、特別寄稿を書いていただいた

４人の先生方に、心から感謝を申し上げるとともに、みなさんの力強いエールを励みとしてグループ一同、心新たにスタートして行きたい気持ちで一杯である。

これからの活動スケジュール

		創作狂言ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ	葦笛プロジェクト	語るプロジェクト	ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ
２０００年度	８月	環境狂言イメージづくり			
	９月				
	１０月				
	１１月				
	１２月	「奏でる」・「語る」・「鑑る」流域フォーラム開催実行委員会発足準備			
２００１年度	１月	「奏でる」・「語る」・「鑑る」流域フォーラム開催実行委員会発足			
	２月	環境狂言シナリオ最終検討	葦笛コンサート参加者公募・決定		
	３月	狂言稽古練習開始　狂言上演準備開始	葦笛練習開始	フォーラム開催準備	
	４月				ワークショップ開催実行委員会
	５月				ワークショップ開催準備
	６月	「奏でる・語る・鑑る」流域フォーラム開催			
	７月				「湖を感じる」ワークショップ
	８月				
	９月				「土を感じる」ワークショップ
	１０月	世界湖沼会議へＮＧＯとして参加（ｻﾃﾗｲﾄｾｯｼｮﾝ）			「森を感じる」ワークショップ
	１１月				
	１２月	ワークショップのまとめと（２００２年以降の行動につながる共通概念と地域特性）			

活動内容一覧

日時	内容	場所
1999・6・13	おうみ未来塾開講式 地域プロデューサーとは おうみ未来塾の教育学習システム	県民交流センター305会議室
7・25	講義① 現代社会と非営利組織 講義② 私が動いてまちが変わる	県民交流センター205会議室
7・25	幹事会	
8・22	講義③ NPOとこれからの行政 講義④ 湖国菜の花エコプロジェクト 講義⑤ インターネット講座（初級編）	滋賀大学経済学部
8・25	幹事会	
9・ 4	講義⑥ 地方分権とまちづくり 講義⑦ ファンドレイジング～資金調達は団体のヘルスチェック～ 講義⑧ インターネット講座（中級編）	滋賀大学経済学部
9・17	幹事会	
10・ 2	おうみ未来塾県内研修 せせらぎ遊園のまちづくり	甲良町学び舎、北落横関尼子
10・ 3	おうみ未来塾県内研修 朽木新本陣日曜朝市	朽木新本陣
10・21	幹事会・編集委員会	
10・30	おうみ未来塾県内研修 黒壁のまちづくり	長浜黒壁
11・ 8	Dグループ検討会　これからの講義等について	草津コミュニティ支援センター
11・14	Bグループ検討会　これからの講義等について	近江八幡ニューオウミ
11・19	Cグループ検討会　これからの講義等について	守山市小津公民館
11・28	Aグループ検討会　これからの講義等について	淡海ネットワークセンター
12・26	講義⑨ ワークショップ「企画力向上」	県民交流センター203会議室
2000・1・29	講義⑩ 「県の将来像」	県民交流センター203会議室
2・19	講義⑪ ワークショップ「研究テーマだし」 グループ分け	県民交流センター304会議室
2・22	幹事会・編集委員会	
3・ 5	幹事会・編集委員会	県立女性センター
3・18	講義⑫ 課題解決手法、グループ分け	県民交流センター304会議室

日　時	内　　容	場　　所
4・ 6	幹事会・編集委員会・お花見会	草津コミュニティ支援センター
4・22～23	おうみ未来塾グループオリエンテーション おうみ未来塾グループ研究企画書の作成	滋賀県青年会館
5・11	幹事会・編集委員会	
5・13	びわこのあまち「地域」とはどのようなものなのか。意見を出す・レポートをまとめて出す。	淡海ネットワークセンター
5・16	ブレークスルー夢デザイン 助成金調査の方向性の検討	淡海ネットワークセンター
5・19	心のバリアフリー 高齢者問題についての話し合いと劇の脚本作り	草津コミュニティ支援センター
5・20	セブン・ドロップス第1回グループ会議 活動のテーマ、趣旨、目的、今後の計画について 蛇砂川改修事業、環境活動助成事業応募について	淡海ネットワークセンター
5・27	びわこのあまち「地域」とはのまとめ	淡海ネットワークセンター
5・31	セブン・ドロップス 夢発見エコ交流手作り助成事業および湖国21世紀記念助成事業応募書提出	淡海ネットワークセンター
6・ 3	セブン・ドロップス第1回現地研修(蛇砂川流域) セブン・ドロップス第2回グループ会議 6／11の発表会、メンバーの役割分担について	
	ブレークスルー夢デザイン おうみ未来塾開講式プレゼンの協議	草津コミュニティ支援センター
6・ 5	ブレークスルー夢デザイン おうみ未来塾開講式プレゼンの協議	能登川井口宅
6・ 8	幹事会・編集委員会	
6・11	おうみ未来塾目標発表会	県民交流センター207会議室
	セブン・ドロップス第3回グループ会議 「水とくらしに関するアンケート」の内容について・午後から目標発表会の内容について	淡海ネットワークセンター
	びわこのあまち「満足度の姿について」	〃
	心のバリアフリー　朗読劇の練習・発表	〃
6・23	ブレークスルー夢デザイン 地域通貨フォーラムの準備	ホテルレイクランド彦根
6・24	びわこのあまち「満足度の姿について」のまとめ	淡海ネットワークセンター
6・27	セブン・ドロップス第4回グループ会議 「水とくらしに関するアンケート」、三島グランドワークの視察、長命寺川流域改修事業について	〃
7・ 7	ブレークスルー夢デザイン　助成金の調査	ホテルレイクランド彦根

日　時	内　　容	場　　所
7・10	セブン・ドロップス第5回グループ会議 アンケート項目の再検討・三島グランドワークの視察、夢発見エコ交流助成決定について・滋賀総研まちづくり研究活動の応募について	淡海ネットワークセンター
7・13	幹事会・編集委員会	
7・15～16	おうみ未来塾　県外研修　愛媛県内子町、双海町	愛媛県内子町、双海町
7・18	セブン・ドロップス第6回グループ会議 アンケート項目の再検討・三島グランドワークの視察、市民活動屋台村フォーラムについて	淡海ネットワークセンター
7・20	心のバリアフリー 在住ブラジル人インタビュー ブラジルの子どもたちにサンバを踊ってもらう	県立女性センター
7・26	セブン・ドロップス第7回グループ会議 アンケート項目の再検討・三島グランドワークの視察、市民活動屋台村フォーラムについて・環境をテーマにした創作狂言について	淡海ネットワークセンター
8・29	心のバリアフリー　各自でテーマ別に脚本作り	守山市浮気自治会館
8・　9	セブン・ドロップス第8回グループ会議 アンケート項目の再検討・三島グランドワークの視察、「みずとくらし」の語らいフォーラム、西の湖「船上会談」について	淡海ネットワークセンター
8・10	幹事会・編集委員会	
8・11～12	びわこのあまち　県外研修　長野県飯田市、浪合村	長野県飯田市、浪合村
8・13	セブン・ドロップス　西の湖　第2回現地研修会 西の湖を調査しながら創作狂言の内容を考察	安土町西の湖
	心のバリアフリー　農業祭りに参加	竜王
8・16	ブレークスルー夢デザイン 助成金の方向性の検討・フォーラムの検討	ホテルレイクランド彦根
8・19	ブレークスルー夢デザイン フォーラム出演者打ち合わせ	草津コミュニティ支援センター
8・19～20	セブン・ドロップス　三島グランドワーク視察 三島梅花藻、楽寿園、温水池等を視察 ２０日はＮＰＯ法人もえぎ	静岡県三島市
8・23	セブン・ドロップス 「水とくらしに関する」アンケート調査配付	
8・27	おうみ未来塾塾生会「これからの未来塾第１期生」	県民交流センター３０２会議室
	セブン・ドロップス第9回グループ会議 屋台村フォーラムに伴うブレークスルーとの調整	淡海ネットワークセンター
	ブレークスルー夢デザイン　フォーラムの検討	〃

日　時	内　　容	場　　所
8・29	ブレークスルー夢デザイン　地域通貨研究会参加	京都
	心のバリアフリー　脚本を持ちより話し合い	守山市浮気自治会館
8・31	セブン・ドロップス第１０回グループ会議 「水とくらし」の語らいフォーラムについて 中間発表の内容、今後の活動日程について	淡海ネットワークセンター
9・　8	セブン・ドロップス第１１回グループ会議 「水とくらし」の語らいフォーラム打ち合わせ	近江八幡市　酒遊館
9・　9	びわこのあまち 「大切にしたいまち」アンケートについて	淡海ネットワークセンター
9・10	ブレークスルー夢デザイン フォーラムの準備・助成金研究	能登川町博物館
9・11	ブレークスルー夢デザイン フォーラムの出演者打ち合わせ	滋賀銀行経済文化センター
9・12	セブン・ドロップス第１２回グループ会議 地球市民大学校説明、「水とくらし」の語らいフォーラム準備、中間発表、環境創作狂言について湖国２１世紀記念事業助成申請内容について グループ最終報告書のまとめ方について	淡海ネットワークセンター
9・14	幹事会・編集委員会	
9・15	ブレークスルー夢デザイン　フォーラム協議	淡海ネットワークセンター
9・23	びわこのあまち 第１回「メンバーの地域をまわろう」 五個荘町五個荘てんびん塾	五個荘町
9・24	心のバリアフリー　脚本を直しながら練習	淡海ネットワークセンター
	セブン・ドロップス第１３回グループ会議 「水とくらしの語らいフォーラム」準備、中間発表の内容、環境創作狂言について	守山市つがやま荘
9・27	セブン・ドロップス　湖国２１世紀記念事業 助成申請協議	
9・30	びわこのあまち 「大切にしたいまち」アンケートについて	淡海ネットワークセンター
10・　1	おうみ未来塾中間発表	県民交流センター３０４会議室
	セブン・ドロップス 「水とくらしを語るフォーラム」開催	〃
	心のバリアフリー練習・発表	淡海ネットワークセンター
	びわこのあまち「中間発表」	〃
	ブレークスルー夢デザインフォーラム開催	県民交流センター３０４会議室
10・10	セブン・ドロップス第１４回グループ会議 水とくらしに関するアンケート集計作業	守山市小津公民館

日　時	内　　容	場　　所
10・12	幹事会・編集委員会	
10・15	ブレークスルー夢デザイン フォーラム記録集について	長浜
10・17	セブン・ドロップス第15回グループ会議 「水とくらしの語らい」フォーラム反省・アンケートの集計、分析・運営委員へのレポート提出について	淡海ネットワークセンター
10・20	びわこのあまち「天気村で語ろう」	草津市NPO子どもネットワークセンター天気村
	心のバリアフリー　まとめ・今後の計画	守山市浮気自治会館
10・23	ブレークスルー夢デザイン フォーラムのまとめについて	ホテルレイクランド彦根
10・24	セブン・ドロップス第16回グループ会議 21世紀記念事業、創作狂言、最終報告について	淡海ネットワークセンター
10・30	セブン・ドロップス 湖国21世紀記念事業第2次審査	県大津合同庁舎
	セブン・ドロップス第17回グループ会議 最終報告書のまとめ方について	〃
11・ 7	セブン・ドロップス第18回グループ会議 21世紀記念事業、創作狂言、最終報告について 水とくらしに関するアンケート分析作業について	淡海ネットワークセンター
	ブレークスルー夢デザイン 最終報告のまとめ方について	ホテルレイクランド彦根
11・ 9	幹事会・編集委員会	
11・10	ブレークスルー夢デザイン フォーラム記録集について	長浜
11・21	ブレークスルー夢デザイン 最終報告のまとめ方について	長浜
11・23	ブレークスルー夢デザイン 草津おうみヒヤリング	草津コミュニティ支援センター
	心のバリアフリー　浦谷勝子さんにインタビュー	守山市つがやま荘
11・24	セブン・ドロップス第19回グループ会議 環境創作狂言のシナリオ、最終報告書について	守山市小津公民館
11・27	セブン・ドロップス 湖国21世紀記念事業に採択される	
12・ 2	講義⑬　プレゼンテーション技法	県民交流センター204会議室・なぎさ公園
12・ 3	ブレークスルー夢デザイン フォーラム記録集について	長浜
12・ 5	セブン・ドロップス第20回グループ会議 アンケートの分析と考察、環境創作狂言、湖国21世紀記念事業、グループ宿泊会議、最終報告書	淡海ネットワークセンター

日　時	内　　容	場　　所
12・　9～10	セブン・ドロップス第２１回グループ会議 アンケート調査への考察と学校・教委への報告について・環境創作狂言、湖国２１世紀記念事業、最終報告執筆状況と内容確認について	近江八幡国民休暇村
	「合宿」びわこのあまち　まとめ	守山市びわ湖プラザ
12・14	幹事会・編集委員会	
12・15	セブン・ドロップス第２２回グループ会議 アンケート調査結果を学校・教委へ送付・湖国２１世紀記念事業の準備体制、最終報告書執筆状況とレイアウト、卒塾活動報告内容と方法について	淡海ネットワークセンター
	心のバリアフリー　報告書検討	県立女性センター
12・16	ブレークスルー夢デザイン　県外研修	宝塚ＮＰＯセンター
12・22	セブン・ドロップス 湖国２１世紀記念事業協会　広報番組出演	
	セブン・ドロップス第２３回グループ会議 アンケート調査結果を学校・教委へ送付・湖国２１世紀記念事業の準備体制、最終報告書執筆状況とレイアウト、卒塾活動報告内容と方法について	淡海ネットワークセンター
12・27	ブレークスルー夢デザイン　報告書まとめ	草津コミュニティ支援センター
2001・1・　3	セブン・ドロップス 大蔵流新春「翁」奉納鑑賞・狂言打ち合わせ	京都八坂神社能舞台
1・　7	ブレークスルー夢デザイン　活動報告まとめ	能登川井口宅
1・10	セブン・ドロップス 茂山千五郎家　京の狂言展鑑賞 東近江水環境自治協議会との合同会議（セブン・ドロップス第２４回グループ会議）	美術館「えき」ＫＹＯＴＯ
1・11	幹事会・編集委員会	
	第２回「メンバーの地域をまわろう」 びわこのあまち　まとめ	近江八幡市　吉田宅
1・13	おうみ未来塾　塾生会　卒塾後について	県民交流センター３０２会議室
	心のバリアフリー 報告書検討・ビデオ検討・ジェンダー勉強会	淡海ネットワークセンター
1・17	セブン・ドロップス第２５回グループ会議 報告書の執筆状況と内容確認について・「奏でる」「語る」「鑑る」流域実行委員会発足について	淡海ネットワークセンター
1・21	ブレークスルー夢デザイン　活動報告まとめ	能登川井口宅
	セブン・ドロップス　湖国２１世紀記念事業 夢～舞めんと広場への参加「水といのちの活動」認定証交付式、活動発表会、参加団体交流会	県民交流センター

日　時	内　　容	場　　所
1・24	セブン・ドロップス第26回グループ会議 グループ報告書の内容確認について	淡海ネットワークセンター
1・26	セブン・ドロップス 「奏でる」「語る」「鑑る」流域フォーラム第1回実行委員会	近江八幡市かわらミュージアム
1・27	セブン・ドロップス 狂言「琵琶の湖(うみ)」稽古の視察と打ち合わせ	京都八坂神社
1・28	ブレークスルー夢デザイン　活動報告まとめ	能登川井口宅
1・30	ブレークスルー夢デザイン　活動報告まとめ	長浜
	第3回「メンバーの地域をまわろう」 びわこのあまち　まとめ	愛東町　苗村宅
1・31	心のバリアフリー　報告書検討	県立女性センター
2・ 6	セブン・ドロップス 創作狂言「琵琶の湖」の打ち合わせヨシ笛について	近江八幡市文化会館
2・ 7	セブン・ドロップス第27回グループ会議 報告書の確認・「奏でる・語る・鑑る」実行委員会・「水とくらしの語らい」フォーラムの報告会・ヨシ刈りボランティアの参加について	淡海ネットワークセンター
2・ 8	幹事会・編集委員会	
2・10	ブレークスルー夢デザイン 活動報告まとめと最終発表打ち合わせ	ホテルレイクランド彦根
2・11	セブン・ドロップス 西の湖　ヨシ刈りボランティア参加と東近江水環境自治協議会との交流	西の湖
2・12	心のバリアフリー 報告書検討、ビデオ撮り、卒塾式発表の打ち合わせ	県立女性センター
2・14	セブン・ドロップス第28回グループ会議 報告書の確認・「奏でる・語る・鑑る」流域フォーラム実行委員会の予算案について	淡海ネットワークセンター
2・15	びわこのあまち びわこのあまち　まとめ	淡海ネットワークセンター
2・17	ブレークスルー夢デザイン　最終発表打ち合わせ	長浜
2・18	幹事会・編集委員会	
	ブレークスルー夢デザイン　最終発表打ち合わせ	長浜
2・19	セブン・ドロップス 創作狂言「琵琶の湖」の打ち合わせ	近江八幡市文化会館
2・20	セブン・ドロップス　フォーラム第2回実行委員会 ヨシ笛コンサート・語らいフォーラム・創作狂言「琵琶の湖」・事業予算案・チラシチケットについて	県立女性センター

日　時	内　　容	場　　所
２・２２	セブン・ドロップス第２９回グループ会議 報告書の確認・「奏でる・語る・鑑る」実行委員会の予算案・「水とくらしの語らい」フォーラムの報告会・２１世紀記念事業「であい宣言」について	淡海ネットワークセンター
２・２４	ブレークスルー夢デザイン　最終発表打ち合わせ	能登川井口宅
３・　４	セブン・ドロップス 夢発見エコ交流「てづくり企画」実地報告会参加	県民交流センター
３・　７	セブン・ドロップス第３０回グループ会議 卒塾「旅立ちの会」グループ発表の内容について	淡海ネットワークセンター
３・　８	幹事会・編集委員会	
３・１１	おうみ未来塾　グループ研究報告会・旅立ちの会	県民交流センター２０７会議室